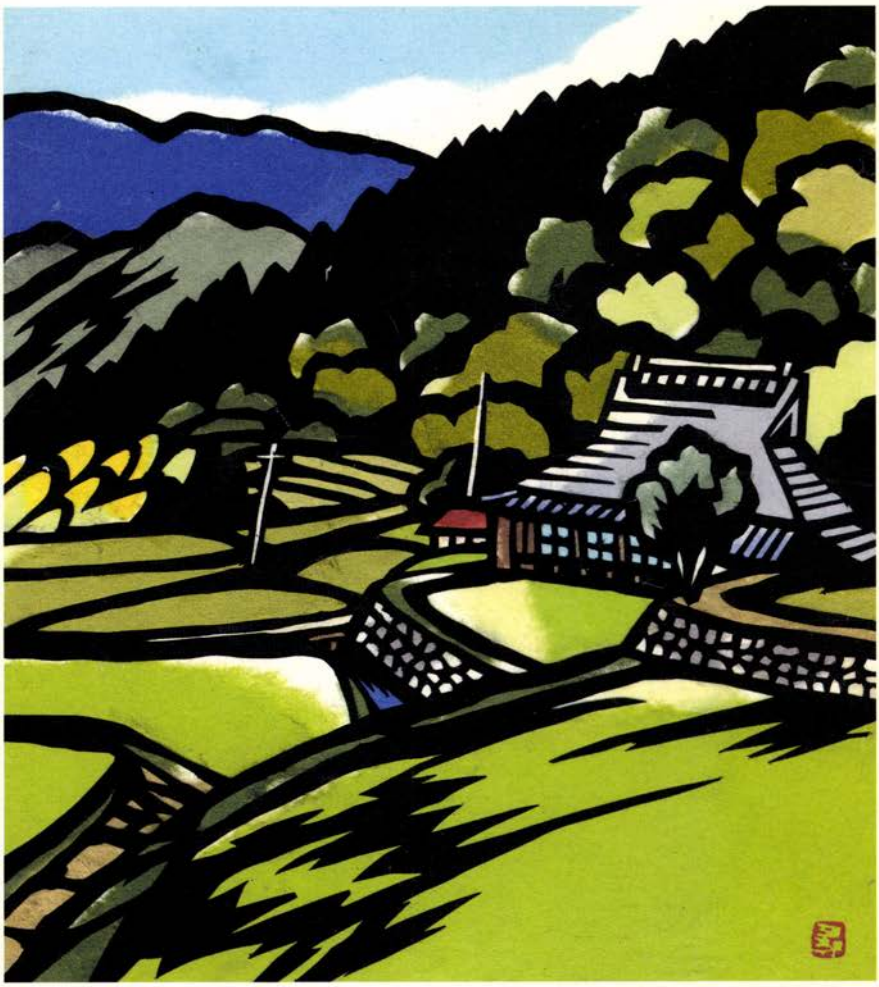
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九七四号



日川協加盟

No. 974

七月号

―路郎賞・川柳塔賞の応募は八月号の刷り込み用紙で―

① 川柳塔欄・水煙抄欄に6か月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成19年9月号から平成20年8月号までの入選句（自分の句を出句する）

③ 8月号刷り込み用紙に5句を楷書で書き8月10日必着のこと。

昨年九月から今年八月の間に誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選択して応募して下さい。

ただし「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いのないようにお願いします。

選者交代のお知らせ

九月号（七月投句締め切り分）から来年八月号までの選者を次の通り交代します。

水煙抄　小島蘭幸

檸檬抄　高瀬霜石　木本朱夏　共選

川柳塔社

「檸檬抄」課題

高瀬霜石・木本朱夏　共選

発表	月	課題	締め切り日
20年	9月	穴	7月15日
	10月	うろうろ	8月15日
	11月	許す	9月15日
	12月	去る	10月15日
21年	1月	未来	11月15日
	2月	鍵	12月15日
	3月	刻む	1月15日
	4月	永遠	2月15日
	5月	緑	3月15日
	6月	ゼロ	4月15日
	7月	裁く	5月15日
	8月	保険	6月15日

お腹の減る快感

河内天笑

以前はＪＲ津久野駅より拙宅までの約二キロ余りをよく歩いたが、昨年秋ＮＨＫ川柳教室の帰路久しぶりに歩いて帰ったところ、家に着くまでに五回も休息を取らねばならぬ程、体力が落ちているのに気付かされた。心臓がばくばくするのは二三分で治まるのだが……。

また、昨年秋とこの春に二回も軽い肺炎を経験。近所の内科のすすめで四年前まで通院していた大阪労災病院でカテーテル検査を受ける事になった。

検査の結果は左心室へ流れる血管の二ヶ所に75％の狭窄が見られた。平成14年冬に四回目のステントを埋め込んだ所の近くだ。25％の血流はオペをするかしないかの境目らしい。

五月二十二日から三日間の検査入院より前後四回に分けていろいろの検査を受けたが、六月十二日の診察前の体重測定でカテーテル検査当日より六キロ（三週間）の減量に主治医が注目。凄い減り様なので、あと一ヶ月現在実行している一日一六〇〇キロカロリーを続けて下さいと励まされた。

一六〇〇キロカロリーとは、ご飯を茶碗に六～七分目、煮魚の小さいのを一切れ、根菜類の煮物とみそ汁。これが昼食と夕食で朝は五枚切れの食パン一枚に牛乳とバナナ、間食はなし。これを厳重に守った結果、三週間で六キロ減り、ベルトの穴も二階級特進。

はじめは妻が鬼に見えたが、目方が減って行くのがたのしみで胃も協力し出した。第一、何十年か振りにおなかが減る快感を思い出したのは何よりの収穫。医師によれば、これから一ヶ月はこれまでの様には減らないが、続けてすこしずつ減らせば心臓の筋肉の負担も減り、オペをしなくても済むのではないかと七月十九日の診察日を期待してくれている。

◆

自選句

来年もきっと来るよと杉花粉　天笑
まだ毒を恐れていない好奇心　〃
野良猫に居つかれ易いたたずまい　〃
ポケットを出たことがない夢いくつ　〃
爺さんと婆さん繋ぐ周波数　〃

座右の句
寝転べば畳一帖ふさぐのみ　（路郎）
私の句
生きてゆく達人がいる友がいる　星野育子

川柳塔　七月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「天見流谷」

■巻頭言　お腹の減る快感……河内天笑…（1）
朝日カルチャー教室の薫風先生……瀬戸まさよ…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
川柳塔の川柳讃歌 (43)……木津川　計…（46）
麻生路郎句抄……（47）
自選集……（48）
水煙抄……西出楓楽選…（52）
温故知新……（75）
愛染帖……新家完司選…（76）
誹風柳多留一一篇研究 36……（80）
檸檬抄「ふらふら」……鈴木公弘・西口いわゑ共選…（82）

朝日カルチャー教室の薫風先生

瀬戸　まさよ

薫風先生は、いつも濃紺の背広に白のワイシャツ、ブルー系のネクタイ姿でふらっと教室へこられた。色白で痩身の先生が若いときはがっちりとした体格だったとはとても想像できない。軽すぎて自動ドアが開かずドンと少し跳んだら開いたけどなと言われ、皆の笑いを誘われたこともあった。

教室が始まるのは十時。大きい字で書かれた先人の佳句のプリントが生徒の手に渡るのを見定めてから、句の解釈、その句のよさはどこにあるのか、作句者の経歴など、ごく短く述べられる。それが終わると自宅へ送られてきた生徒の作句の束「ハガキ」を一枚、一枚批評される。

「あんさん、今回はあまりいいのがなかったね」とか「この句はいい！」と端的に評価される。句は課題に即して作り、何句提出しても自由なのである。

「瀬戸さんはいつも三句やね」と暗に少なすぎる批判を言外に含め言われたこともあったが、私が生来の寡作で自選していることに気付かれたのか、諦められたのか、それ以降言われることはなかった。

一路集
「とんぼ」……時広一路選…(84)
「噂」……清川玲子選…(84)
「ポスト」……喜田准一選…(85)
初歩教室「安い」……三宅保州…(86)
秀句鑑賞「同人吟」……早川清生…(88)
「水煙抄」……森村美花…(90)
特別寄稿「大八文庫」……古藤愛子…(91)
■各地句会だより　川柳塔まつえ吟社……三島淞丘…(92)
六月本社句会……(94)
各地柳壇（佳句地十選／片岡智恵子）……(98)
全日本川柳2008年福岡大会……(112)
柳界展望……(113)
七月各地句会案内……(114)
■編集後記（ひとこと／山本蛙城）……希久子・朱夏…(146)

座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな　（薫風）

私の句

私の空虚を埋めてくれた星　小豆澤歌子

しかし送ったはずのハガキが行方不明になることが時にはあった。誰彼を問わずにである。察するに、あちこちのカルチャーや投稿誌から毎日のように送られてくるハガキの仕分けを間違って他の場所に入れられてしまうときがあったのではと想像するのだ。私は以後、必ず課題の下に朝日カルチャーと明記することにした。

が、誰も薫風先生に文句を言う生徒はいなかった。勇気がないのでなく誰もが薫風さん（敢えて先生と言わず）に、まぁいいかという寛大さと許容の精神を持たざるを得なかった人柄と、川柳作家としての実力に尊敬の念を持っていたことに尽きると思うのだ。

さて、私自身、句を褒められたことは滅多にない。先生は句の評価にはとても厳しかった。一時、教室の人数が多くなり過ぎ教室は「川柳研究」と名を改め新たに「川柳入門」の講座を設けられた。初代講師は故吉岡美房氏であった。美房氏は講師を務めるに当たって私たちの教室を見学された。昼食会に向かう途中「薫風さんってどんな人ですか」と尋ねられた。「やさしい先生ですけど句に対してはとても厳しいです」即座に答えた私である。

魂魄を天地に分かちグッドバイ　薫風

川柳塔

河内天笑選

嘘だとは承知のうえで握手する
白黒をつけて淋しい大ジョッキ
スタートはたった今でもおそくない
困ったら神が味方と思い込む
ピンヒールにすいすいすいと抜かれたり
明日という不確かなものそれでいい

西宮市　西口いわゑ

褒め合って丁丁発止セレブたち
さわやかに見えて厳しい無礼講
お隣の亭主と出合うごみ出し日
ご返杯の所作にも慣れて管理職
プロとして情け無用の恩返し
エコバッグ少し地球を思い遣る

堺市　柿花和夫

芯のある男を潰す村八分
危険度がどんどん嵩む過密都市
献体を決めたわが身を慈しむ

弘前市　高橋岳水

老人が老人看取る頼りなさ
手相見の暗示で消えた不整脈
手探りでたった一度の道を往く

藤井寺市　太田扶美代

続編もいいもの葉桜のように
リクライニングシートで熟睡はできぬ
デュエットをすればわたしがわかるはず
パッと咲きそおっと散ってゆく輪廻
矢車草久しく母の夢を見ぬ
ライラック咲いて次つぎお客様

海南市　三宅保州

サイレンが怖い空襲経験者
ゴキブリも必死に生きているんだよ
無礼講も形状記憶されている
尼寺は上得意様です酒屋
だんご鼻にとても興味がある天狗
売地という立て札見えぬほどの草

東広島市　福島万年

背を伸ばせ手を振らんかと我に喝
あの世から無言電話が掛かる夜
花筏後期高齢優待席
健康の秘訣聞かれる歳かなあ
知り過ぎた猫は大事にしなくては
賽銭がうふふと笑う願い事

八尾市　生嶋ますみ

物価高ひとりの城が崩れそう
老いるのは嫌だ五キロが重い米
カーリングなら私にも出来そうだ
写メールを見せられている孫自慢
まだやれる思ったり駄目と思うたり
若いねと五歳も老けて見られてた

大阪府　野田栄呼

いい試合クリントンでもオバマでも
栗接木百パーセント着く不思議
子は都会実家で空し鯉のぼり
私より遅い車が前走る
ハードルを下げれば幸が溢れてる
病院へ大きく遅刻する満車

八尾市　宮﨑シマ子

後期高齢夫も私もしぶてこい
格差激し中の下段の暮しぶり
五臓六腑にみどりが染みる風五月
なま温い風は魔物を連れてくる
鬼さんをガードしているカゴメの輪
絵手紙に京の柳の優しげな

八尾市　吉村一風

よく笑う妻に元気をもらってる
言い訳を考えながら歯をみがく
雑踏に混じると肩の荷がおりる
好き嫌いなく健やかに老いの箸
眠ってる神様起こす五円玉
友情の言葉が痛いとこを突く

三田市　石原歳子

引き算の貯金通帳すぐ閉じる
煩わしいケータイなどは持たぬ主義
扇風機何がそんなに気に入らぬ
血糖値下げるバナナに飛び付いた
渋しぶと行ってうっとりした絵画
雰囲気で許してくれた気がしてる

京都市　高島啓子

頬骨の高さ妥協をしない顔
した事を正当化する癖がある
丸いのと違うファイトが無いのです
お互いの顔じっと見る同い年
パンジーの顔なめくじに噛られる
さんさんと降りそそぐのは紫外線

大阪市　板東倫子

さいはての薄暑若葉に雪が降る
国産がいいな人間も食べものも
おバカギャルみたいな孫がひとり居る
堅物が暴走老人に変化
国賓のように聖火を警護する
便利だな関係ネェーヨと言う言葉

堺市　志田千代

裁判員の因果なくじに当たりそう
ご近所は爺婆ばかりとジイが言う
アリガトウつい合掌をしてしまう
アリガトウほどゴメンネが出てこない
花ドロボウして野仏に供えてる
のぞき見のお尻をポンと叩かれる

美作市　大石あすなろ

昨日より風が変って来た期待
石ころを蹴っても胸は晴れませぬ
針穴を抜けて噂が旅に出る
ふる里に昔を語る蚕棚
うろこ雲めくれば限りなくブルー
喋らずに笑っているといい男

藤井寺市　髙田美代子

カラカラと笑って支流から逸れる
夢は夢わたしに玉手函ひとつ
波の音聴こえてきそうハワイアン
疲れ残したあいたい人に会った夢
この先は何処でどうなる笹舟よ
コピーして置きたい台詞抱いている

河内長野市　村上直樹

天敵は自分の中に棲む自分
悪友に会えばなんだかほっとする
ライバルにまず一献という撒き餌
恩人の遺影厳しく温かく
うっかりもあってまあるく生きている
八十路なおこんがり恋の紫外線

松山市　古手川光

花菱アチャコの台詞が今も生きている
賞味期限のラベルへ五官退化する
あばら骨とメタボ地球の裏表
なぐり書きのようなサインを喜ばれ
誰でもよかった殺人なんと恐ろしい
変ったのはお前とふる里の山河

大阪市　古今堂蕉子

妻といううるさくぬくい人と居る
二度三度開く日曜の新聞
緑赤黄ピーマンの衣替え
最後の旅あの世でどんなとこやろう
父さんの言うてるギャグや笑うたり
しまい風呂ぬるい少ないさっと出る

黒石市　佐藤古拙

手塩にかけた子が施設をほのめかす
仏壇の夫に毎朝嫁の愚痴
中肉中背とくに取柄はありません
嫁のペットまでわたくしに背を向ける
七十路でまだ逃げ水を追う愚か

黒石市　相馬一花

痴漢出る噂猛犬連れて行く
昔から治らぬものに触り癖
団子鼻嘘をつかないＤＮＡ
混浴でにんまり唸る手長猿
ロッカーでギャルが妖婦に早変り

十和田市　阿部進

何時までも若々しさを保つ日々
普段着で心かよわすいで湯の里
ふかしいも食べた時代がなつかしい
天下り天国未だ健在だ
居酒屋へ並のお酒をのみに行く

平川市　小寺花峯

酒旨し猫と競い合ってるサンマ
酒の出る町会ならば皆勤賞
明日もまた作業ズボンといる軍手
雑念を払うと潜る縄暖簾
酌み交わす言葉に落ちる花雫

弘前市　福士慕情

朝の窓お山へ今日の無事祈る
岩木山何処から見ても岩木山
岩木嶺にウシもツバメも出る五月
雪形が教えてくれる田植え歌
穏やかに沈む陽を見る津軽富士

弘前市　今愁女

連休は土いじりというノルマあり
暖かい春の旅する胡錦涛
かねてからの卓球外交再現す
氷解けかけ日中外交徐徐緩和
使い回し疑ってみる宿の膳

弘前市　櫻庭順風

長期欠席要領を得ない訳
オンリーワンを知り身の毛立つ思いする
少なくも私担任する生徒
おぞましい行為をさせておかれない
何処かしら進駐軍のキャンプ地は

弘前市　髙瀬霜石

先生が飲めというから飲む薬
おかゆよりご飯治ってきた証拠
病院でお久しぶりと褒められる
連れ合いがいないと早く起きる癖
愚痴みんなＢＧＭにして生きる

弘前市　宮崎ヒサ子

カレンダーに予定大きく書いておく
胡蝶蘭部屋馥郁としてくれる
五月晴れ新たまねぎのサラダ盛る
ふとん干し済ませてゆるり長電話
辛子漬ぴりりと辛く上天気

弘前市　相馬銀波

期待した天気で変える予定表
最初から妥協ありきの雑魚でした
助走路の無理が不出来の今日にする
この先も義理には義理を欠かせない
晩霜が続く悲鳴の露地野菜

弘前市　須郷井蛙

欲あって小さな土地にも種を蒔く
合併で村の補助金減ってゆく
何よりも薬しっかり眠ること
お互いにネジ巻きあって夫婦道
女房にはすまぬ三食みなさせて

弘前市　岡本花匠

鳩笛の慈愛に育つ津軽っ子
窓閉じて笑顔忘れた花粉症
今日があるカルテに感謝出る笑顔
4Bで笑いの活路ひねり出す
底辺で迷わず生きる軍手です

さいたま市　星野育子

靖国観て知る歴史の一ページ
思いやり予算基地より高齢者
楢山へ向けて道路を造ります
アンケート見栄もあります丸の数
バス停に待っていたよにはぐれ犬

さいたま市　八田敏

舐めるなよ後期も一票持っている
菊芽挿すもう待つ人はないけれど
ミニ盆栽夢は古木へ五百年
新幹線十年振りは独り旅
あじさいを並べ仏間へ初夏の風

柏市　河野桃葉

誕生の声が転がる電話口
偶然の出合い心に点火する
可能性秘める優しい目に負ける
初物を和紙に包んだお裾わけ
関白も料理洗濯上手くなり

柏市　永峰宣子

かたくりの開花が春を連れて来る
命綱つけて満喫するスリル
平成の子も遊ばせる竹とんぼ
三十年もったミシンを買い換える
震度五に眠ったままであきれられ

東京都　岸野　あやめ

一行詩抱いて何日かは渡る川
悪いけど聖火を誰も喜ばぬ
デパートの九州展へお茶買いに
有り難う御苦労様と捨てる靴
ある決意古い手紙の束焼いて

東京都　清原悦子

準備した言葉が出ない淡い恋
プラタナスのんびり歩く日曜日
忘れたい事が頭の隅にある
家庭科が一生続く主婦の席
向日葵が咲いてる駅の名を覚え

横浜市　菊地政勝

友情に亀裂が走る借用書
責任を果したように桜散る
逆らわず相槍を打つ出世欲
想像にお任せをする隠しごと
定年後おしゃれ音痴と言われ出す

横浜市　小野句多留

連休を家ですごしているも鬱
アナモニ（あなたへMコール）の朝にもらっている色気
洒落っ気はまだ残してる旅支度
入院の延期に焦れる身の置き場（白内障）
嫌ならばよせと絶対あやまらぬ（餃子事件）

富山市　島ひかる

新緑の庭へまっ赤なバラ一つ
一人では行かない所犬となら
器用な娘ははの手付きに似て捌く
円空の手彫に似てる母の笑み
あれもこれも持たせ見送る目に涙

静岡県　薗田漠沓

軍服がぴったり決まる独裁者
ユニホーム死力を尽し砂まみれ
おしゃれ着にポケット無くて不自由し
スパイクを履けば選手の顔になる
諸物価の値上げ米の値そのままに

可児市　板山まみ子

筍が届いて糠を買いに行く
深呼吸生きる不安を落着かせ
みせかけの豊かさばかり目に映る
上辺だけつくり笑いで妥協する
お返しのカタログ迷うものばかり

可児市　鶴留百合

朝夕の温度差上着手離せず
希望した職場残業また残業
暖房を入れた翌日真夏日に
園に慣れ友達の名を言い始め
タラの芽をふんだんに食べ春は過ぎ

犬山市　吉田幸子

山に住み若葉に酔える散歩道
滝開き心経響く水ごもり
耕やせばミミズも精を出している
花咲いて浮かれてる間に虫がつき
やれる事片付け明日の知恵もらう

犬山市　金子美千代

様付けで呼ばれ落ち着かない背中
大あくびしてるだあれもいない昼
軽々と疑似餌にかかる自己嫌悪
中国の土産に思案顔の箸
日本の恥の文化が消えて行く

愛知県　早川遡行

踏切があり間に合わんかも知れん
またひとり昭和を遠くする訃報
月末になると諭吉は留守になる
仙人のような暮しに憧れる
根腐れを起さないよう酒を注ぐ

愛知県　三浦きぬ

意味知らぬまま仏前であげる経
惰性です生かされてます九十年
一日の楽しい時間どこだろう
外出の三種は財布　杖　錠前
薬飲むため夕飯も欠かさない

京都市　三宅満子

定命を感謝ボチボチ坂登る
おばさんもひととき黙るカニツアー
十月十日胎児支える太い足
風呂上がり顔見合わせる美人の湯
はらはらと女の涙武器にする

京都市　桝本宏子

たっぷりの疲れカバンにいやし旅
旅の夜連ドラは見る日曜日
しばらくは負けたふりする山の神
獅子舞に噛ませてからの頭痛持ち
お互いが直せばいいと思う癖

京都市　坪井孝一

過去秘めてじっと我慢は男の背
貸す方が憎まれ者になる不思議
二人して結んだ籤が効く頃だ
ブランコの揺れで二人の仲を見た
究極はお茶漬けになるうまいもん

亀岡市　井上森生

集団催眠のように列島花に酔う
目標を声高らかに四月馬鹿
血が滚る竜馬気取りで司馬を読む
手に足に要点書きを誇る孫（受験勉強）
足りてるかエンドルフィンとドーパミン

長岡京市　山田葉子

おばちゃんが車両乗っ取りよく笑う
アイドルが隣に住んでいるらしい
当分は黙って見てることにする
わだかまり消えて歩調を合わせとく
消し去りたい声残してる耳の奥

八幡市　結城君子

欠点はいくつあろうと薔薇が好き
人間のエゴに泣いてる曼珠沙華
奔放に生きてタンポポ悔いはなし
狭いせまいと身を寄せ合うてつつじ咲く
神さまを恨んでいない薊草

大阪市　伏見雅明

うっかりと一行抜かし祝辞読む
妻の顔立てて近所の草むしり
ひたすらに貯めた諭吉が汗臭い
転居してまずゴミの日を確かめる
銭湯がぬるめになった原油高

大阪市　熊代菜月

物の芽に春が来たよと教えられ
亡き母の小さな歴史写真帳
愚痴一杯つめてとばそう紙風船
医者通い後期高齢春さむし
痛む膝かばって踊る佐渡おけさ

大阪市　平嶋美智子

雨上がり草木の性が燃えさかり
紫陽花の蕾は梅雨を待ちこがれ
淡き青日暮れの空は淋しげで
好きな歌流れて気持入れかわり
鏡の顔微笑に変えて靴を履く

大阪市　中村れんげ

旗を振る人見失い迷路入り
夫婦坂迷路切り抜け今日生きる
波浮の港大正ロマンにひたる夜
シナリオにない夢ばかり追いかける
後期高齢を光輝と読んで翔んでいる

大阪市　西川更紗

預金通帳と相談して生きる
うれしくて勝手に体弾み出す
ストレスがやけ食いさせる体脂肪
ギャル曽根はなんぼ食っても太らない
何事もなかった今日へありがとう

大阪市　中井崩

目に見えぬ力に背中押されてる
昨日まで蝶が止まった花が散る
食べるのも書くのも同じテーブルで
冗談は大阪人のエネルギー
地図ながめ胸踊らせる旅支度

大阪市　榎本　日の出

病んだまま地球静かに回ってる
素っぴんで出かけていますポストまで
年相応皺の数まで愛おしい
読んだはず興味ないので皆忘れ
口答え聞いてびっくり反抗期

大阪市　榎本　舞夢

ぬるま湯につかり明日の策を練る
発表会幕が上がると震え出す
古地図の町をたのしむ一人旅
冗談を言って却って座がシラケ
さわやかに最後の日まで歩きたい

大阪市　升成　好

生きるとは斯く渇くもの大ジョッキ
口下手な奴だ仲間になれそうだ
失敗の数ほどふえぬ護身術
いい人の噂は声を憚からぬ
音たててことさら旨いとろろ汁

大阪市　松尾　柳右子

おとなしい電車の中の乳母車
給食の配分上手にくばる子等
気まぐれな息子の食事一人きり
一走り便箋封筒百均で
ふかし芋お陰で便秘解消し

大阪市　津守　なぎさ

医者はしご白寿めざしている後期
南紀の湯夕日に酔うている至福
食べる事ばかり集中回復期
突然に体調狂う神経痛
青青と生気漲る千枚田

大阪市　渡部　さと美

ミャンマーの軍政腹を立てながら
検査医者相談するに頼りない
楠若葉よう登ったな昔の子
共犯者になりそう耳打ちをとぼけ
毎日の記録血圧下がりだし

大阪市　小谷　集一

ささやかな満足百均の浪費
幸せに年金という常備薬
高齢者これから先が丸儲け
雑学で脳の隙間を詰めている
ハードルを下げると肩の荷が下りる

大阪市　津村　志華子

元気かい只それだけで癒やされる
気楽さの蔭で独りの物思い
他人さん人のタブーに触れたがり
母さんもおんなじ月を見てるかな
丸い背の骨をなだめるマッサージ

大阪市　小糸昭子

世の親がすべて聖母でないんだよ
すぐ噴火する男だが信じてる
一流の芸者は真夏でも汗かかぬ
螺子一つ欠けた位で潰れない
親に似て小さなコピーここにいる

大阪市　神夏磯　典子

紫陽花と菖蒲の青がウツを消す
月光はすべて許してくれるよう
落書きは大空にせよ若者よ
好きなことしてたら腰痛忘れてる
火種ある仲とも知らず油さす

大阪市　小泉ひさ乃

感動する力あるからまだ枯れぬ
生き下手の女に温い風がある
素朴さでイケメンよりも持てている
下下の事情を知らぬまま政治
嫌な呼び方で天引されている

大阪市　鶴田遠野

虚勢張る姿見透かす三面鏡
顔よりも心美白とする写経
携帯のメールはまめな筆無精
休肝日明けに決めてる診察日
赤提灯常連たちにあるモラル

大阪市　井丸昌紀

飲めば飲むほどたまるストレス
煩悩がなくなり僕は死にました
すうどんのプライドだしは澄んでいる
俎板の鯉になりそこなって鬱
くよくよするなよ酒があるじゃないか

大阪市　谷口義

取扱注意わたしの説明書
角が出て来たので面取りをしよう
耳鳴りがすると自分を見失う
顔洗い毎日出直しています
とにもかくにもこの顔で生きてきた

大阪市　池上清治

まだ読まぬ積んどく本を減らさねば
２００８まだまだ先を覗きたい
花愛でるゆとりの心育てたい
橋下が掘れば裏金まだ出そう
ガスコンロ買い換え料理好きになり

大阪市　森田明子

持ち主に合わせ動いている時計
アバウトな妻だと感謝されている
遅れてもいいよ本屋で待ち合わせ
ご近所は犬にも愛想よくしとく
友達の結婚式にばかり行く

大阪市　川端一歩

貧しさは耐えて淋しさ耐えられず
さくら散り若葉行く手を指し示す
欲望の鏡に皺は見つからず
楽しきは二合の酒で酔うはなし
老人一揆小さい山なら動かせる

大阪市　奥村五月

お土産に里の空気も袋詰
すぐ怒鳴る親父孤独で寂しがり
阿呆になり上手くこの世を生きて行く
衰運の時に鍛えて今がある
一坪の庭が命の妻の趣味

大阪市　大川桃花

バッチリと写ってました黒い腹
泣きそうな空が嬉しい花粉症
挫折せぬように発表する決意
地を這って支えた国に裏切られ
駄駄っ子のお尻地べたにすがりつき

大阪市　福岡末吉

ふたり旅想いは巡る皐月波
亡き父母の慈恵の心子に伝え
亡母愛でし花器の在す飾り棚
腕自慢待つもまた佳し普茶料理
奇を衒う己が性に飽き足らず

大阪市　近藤正

物価高お好み焼きもガソリンも
九条と安保がしのぎ削り合う
消費税は年貢だという政治家も
春場所の体育館も売るそうな
彬の樹いつ花咲くか百日紅

大阪市　岩﨑玲子

クラス会幸せの種播きに行く
旧姓を呼ばれ返事が弾んでる
ピュアだった時代の顔にかわれる日
忘れない淡い初恋セピア色
青春が賀茂の水面に満ちている

大阪市　川原章久

回転ずしじわじわ値上げしてきます
葉桜の公園歩く杖二本
珍らしく平凡な日の認知妻
アルバムは皺一つない顔ばかり
鈍行で時間だけにはぜいたくに

大阪市　岡本久峰

参議院廃止をすればよいものを
バーチャンのヌードに三毛も寄りつかず
きばってるときにかぎってベルが鳴る
シベリア帰りダボハゼ並に生き延びる
ごろつき議員無理難題をおしつける

大阪市　岩崎公誠

気宇壮大飲んでる時は天下人
千年紀錦に包む恋想う
色つきの水飲まされた青いバラ
不自由になって自由の値打ち知る
切札を持つと考え甘くなる

池田市　栗田久子

要領の悪さ相手をあわてさす
挑戦の意欲手綱はゆるめない
一人居の老いにやさしい花菖蒲
七夕の曇りは味けなさ過ぎて
幸せをかみしめている旬のハモ

和泉市　西岡洛酔

他人にはいい嫁でした妻の背な
妻の乱無口の一日長い事
欠点のひとつ囲って生き延びる
幾許の金を大事に夫婦傘
フラダンス男の視線二ツ三ツ

和泉市　横山捷也

ゼンマイをしっかり巻いて老いの旅
泥試合になるかもしれぬ遺産分け
迷路にも必ず一つある出口
穏やかに石を磨いて午後の雨
白粉で隠せぬ歳になりました

泉佐野市　山本蛙城

宴会へ朝はお茶漬だけの腹
バイキング何度も取れるとは知らず
ケータイでピコピコ果てに殺されて
テレビ今時代劇よと娘に言われ
忙しいと言って安請合いの癖

大阪狭山市　矢野梓

体調を気遣う友が先に逝き
善し悪しを問わずIT化は進み
それぞれの鈍さを皆で笑い合い
思い出せるとこまで戻る物忘れ
手を貸さぬことも愛だと後で知り

交野市　山川日出子

来日のウイーン少年千の風
とうりゃんせかごめ知らない園児増え
竹の子もよく出る年と駄目な年
絵葉書で結ばれている孫と祖母
空襲が消した親子の木の校舎

交野市　森本弘風

格別の配慮に感謝七十五
高齢者だけで走れと言う保険
保険料取り戻す気の医者通い
白星へ祈りの塩を撒く力士
老夫婦やっと掴んだ阿吽かな

河内長野市　坂上淳司

ご近所と比べんといてボクは僕
近所から産科小児科消えました
テスト明け子ら穏やかな眼にもどる
延命装置外れ優しい顔となる
傲慢な人科マグマの上に棲み

河内長野市　山岡冨美子

愛犬も愛車も後期高齢者
饒舌なナビがハンドル狂わせる
風物詩路地から消えた金魚売り
二世帯の敷居ときどき砂利を噛む
文明の無力地震にサイクロン

河内長野市　井上喜酔

激動に生きても後期高齢者
息切れが怖い八十路の落し穴
低い声そっと背中でアドバイス
ほか弁とメモ走り書き妻は留守
年金で長寿へ挑む丸い背な

河内長野市　水谷正子

ライバルも仲間だ北京近くなる
手土産のパンダでお茶を濁された
譲り合いエレベーターの戸が閉る
情熱も品格もある歌いぶり
さくら見たもみじも見たい欲の皮

河内長野市　植村喜代

もう里も他人ばかりに淋しなり
世の中は春だ春だと皆出掛け
パンクしそうな頭をいつも抱えてる
夫のケータイ私番号知りません
インターホンはいと言ってもすぐ立てず

岸和田市　岩佐ダン吉

ありがとうそして私は終わりたい
三枚目また買って出ていて孤独
振り絞った汗敗戦に悔いはない
正論だ宥めてなんかいりません
戦ゼロの世界九条待っている

岸和田市　堤　楢代

ありがたや気侭に生きてよく眠る
春が来てすこし早起きしています
杖ついておつぎは腕が痛くなり
老病死見ないで育つ現代っ子
八十になっても失せぬ好奇心

岸和田市　雪本珠子

気負わずにそっと弱音を吐いている
幸せは笑顔に惹かれやって来る
幸せを共有してる人が居る
パートナーと同じ呼吸で過ごしてる
好きなのにわたしの心天邪鬼

岸和田市　井伊東吉

種苗を買うは熟年ばかりなり
スーパーにない品を売る荒物屋
商家の子銭勘定に小うるさい
大根の出来栄え違うプロ農家
若者がエスカレーター占拠する

岸和田市　森元ふみよ

粉食の値上りきびし朝和食
判断力低下せぬうち遺言書
せち辛い一世紀など生きられず
戦後すぐ歌声喫茶超満杯
梅雨寒で祖母手造りの甚平きる

岸和田市　土橋房枝

インターネット無名で書いて無責任
つらさ知り人に優しくなれました
新しい友に出逢った嬉しい日
幸せを探すばかりの半世紀
軒並みに介護車止まる町に住み

岸和田市　小島笑司

神棚に孫が供える初給与
産地より舌を信用して食べる
初夏の青足湯の前は道の駅
ギャル曽根は残さないのでお断わり
民主化をきつく促すサイクロン

岸和田市　原さよ子

動物園孫と歩いて孫に負け
それ今とくじゃくの羽根へシャッター切る
明日へ夢つないで夜の歯を磨く
うとまれる事にも馴れて世話が好き
生かされてますますしみる父母の恩（亡父母五十回忌法要）

堺市　矢倉五月

良い妻がいて長生きをしています
今旬の後期高齢者と連む
髪染めてよしと繰り出すボランティア
じっくりと親思い出すバースデー
セクハラじゃないが長風呂のぞきます

堺市　村上玄也

お互いにアホと分かって許し合い
儲けたい気持ではまる落し穴
酒好きの医者は禁酒を命じない
花よりもだんごそれより酒が良い
時々は頭をよぎる癌のこと

堺市　河内月子

満月が迎えてくれた初夏の宿
四人目も産むとじいじを喜ばせ
深追いはしない体力考えて
どっちかと言えば魚の方が好き
迷うたら目刺しを買うことにしてる

鈍行で久しく旅情感じてる
妻と旅少しほこほこ感もって
ビジネスのうちお得意と露天風呂
メールより絵手紙で知る字の力
朝食はパンと御飯と日替りで

堺市　和田　つづや

しなやかに反らせて苦言やりすごす
約束を抱かされているカレンダー
立ち止まる小さな花の手招きで
外灯が付いてやさしくなる夜道
ばあちゃんも来てねと頭数に入れ

堺市　宮本　かりん

出歩いて無駄を買ってる五月晴れ
母さんは忙し忙しと長電話
可愛い目で図太くねだる三歳児
冗談にママはかっかと低気圧
頑としてKY読めず浮いている

堺市　西村　りつえ

星数で和食文化は計れない
お運びを二度で吉兆二度儲け
黙っては聞けない人づての誹謗
昇進の遅れ上司のせいにする
ご近所の方と妻から教えられ

堺市　奥　時雄

判子押すだけの仕事はないかしら
近所からかすみのように立つ噂
僕んちの車庫にもあるよダンボール
遠距離の恋にうれしい夜行バス
目に青葉出会い旅立ち酒の春

堺市　加島由一

不覚にも騒動の目にされていた
万歩計万に満たない日が続く
誘われてすなおに弾む風ぐるま
御夫婦で同じぼやきを言うてはる
手術した目でしげしげと見つめられ

堺市　山本半銭

強がりも弱音に似たり天仰ぐ
ブラインド上げ切って居る五月光
打たれ強いと言われ頭を撫でて見る
花粉症目鼻クシャミとフルコース
ごめんねと言うても返事聞こえない

堺市　石堂潤子

疲れ目を柿の若葉に癒される
五月晴れジャーマンイリス咲き誇る
ピンク色着せられやっと女の子
背くらべ負けたが目方勝っている
裁かされ責めを負いそう普通人

堺市　源田八千代

四條畷市　吉岡　修

燃えててもふん別という邪魔もある
日本でも会えない人に会うローマ
首の皮一枚で来た定年日
薄い胸あれから苦労したらしい
わかるかなニンニク食べて貼る切手

吹田市　穴吹尚士

腹決めて引き返せない橋渡る
この歳になって五欲にまだ狂う
痩せ馬の手綱を妻は放さない
ただ酒を飲んだらロクな事がない
手が触れただけで痴漢と睨まれる

吹田市　木下敏子

携帯のメール孫から誉められる
誉められてやる気になった指の先
いつまでも若いつもりで踏むペダル
健康法わかっていても続かない
目標があるから早く起きられる

吹田市　大谷篤子

ひっこみがつかなくなって約束し
ひかえてるつもりうっかり孫自慢
何となく許せる人がそばに居る
目を閉じてわたしの好きな色さがす
治癒力のあるときめきを抱いている

吹田市　太田　昭

バスタオル妻の肥満を知り尽くす
四面楚歌外反母趾が泣きじゃくる
もう一本線香ともし父と会う
広辞苑第六版に見る世相
人間味丸出しにして欠伸する

吹田市　山本希久子

傘の花咲きあじさいも夏の彩
至らない私帽子を深くする
ゆっくりと下降余生の観覧車
了簡の狭さは等身大である
夕食の支度へ主婦に戻らねば

吹田市　須磨活恵

駄々こねる子供をとんと見かけない
財産は無いがお宝孫五人
春サラダ大地の恵みたっぷりと
ドクダミの花の白さは自負である
躓いて痛みを越えて脱皮する

吹田市　野下之男

有料のパンダを借りて恩に着る
人がこけそれで開ける運もある
帰省した息子の嫁に気を遣い
花びらと廊下で遊ぶ春の風
猫だって帽子かぶれば駅長さ

吹田市　瀬戸まさよ

私の鬼門体調くずす春
花の蜜吸う子の笑顔ここも春
味気ない前期後期の年齢差
豊饒の海に囲まれても輸入
量減らしメニューは同じ値にします

高石市　浅野房子

印伝の財布せんせの形見です
手の鳴る方へ銭の匂いのする方へ
足腰の機嫌取りつつ坂上る
神経痛三叉と腰に持っている
掘らぬのに出るわ出るわの裏の金

高槻市　佐甲昭二

懸命に趣味を耕す定年後
裏話聞けないままに終る鍋
あっさりと逝ったあなたは勝手です
ご近所の絆会釈でつながれる
俄か雨立ち食いそばでやり過す

高槻市　執行稲子

相槌を心の鬼がそっと言い
うろうろと迂回重ねる物忘れ
本意ではないのびのびの謝罪です
はて誰方会釈一先ずしたものの
帰り途マークしておく曲り角

高槻市　西谷治三郎

メタボまで政府が面倒見てくれる
高齢者後期おびえて生きてます
バカ笑いしてるテレビがやたら増え
昼酒をこっそり飲みたいとき元気
放課後のほうが金要る塾通い

高槻市　左右田泰雄

絵手紙に遊び心をにじませる
セーターも干支に因んでねずみ色
あの虹がなんで虫へんなんやろか
嫌なこと忘れて今を強く生き
スーパーの開店を待つ特売日

高槻市　生田義一

同期会軍歌いつしかわらべ歌
亡母法事集まる縁者も代替り
朝昼晩デザートのよう薬飲み
老いぼれは早く失せろと言う檄か
太郎君何処へ行くのくいだおれ

高槻市　峯村勲弘

後期高齢せめてネクタイ赤色で
脳トレにはまり仲良い老夫婦
七十路スローライフへ舵を切る
同級会話題花咲く病気歴
いじめられ大きくなった僕だって

焦るまい次のチャンスは逃すまい
赤飯をひとり淋しき誕生日
借景の山並み隠すビルの群
今更に聞けないことが多過ぎる
旬の味知らず冷凍食に生き

高槻市　傍島克治

勝負の日真っ赤なシャツに賭けてみる
褒められて昔の誤解溶けてゆく
ライバルの出方を試す褒め言葉
光ってるきみの素顔に惚れました
茜色遠回りする散歩道

高槻市　杉本義昭

手土産にパンダ懸案先送り
長生きも逆縁に遇う憂きさだめ
もったいない事で吉兆恥晒す
食べ残しもったいないが太るもと
ポイ捨てのゴミ並み後期高齢者

高槻市　乙倉武史

点滴が生きろと意欲けしかける
的ひとつ極楽行きを狙うだけ
メタボとや食べて太らぬ不公平
脱メタボいま気にしたり無視したり
罠や闇ほど良い位置に待ち構え

高槻市　富田美義

ココア飲みゆっくり心あたためる
あちこちとまた訪ねたい旅の夢
お金では買えないゆとり身につける
一日をじっくり感謝するゆとり
カーテン取り替えござ出して立夏なり

高槻市　指宿千枝子

後ろ指さされぬように歩く道
妥協する度量に欠けるお偉方
鉢に水優しく声をかけてやる
落ち椿恋しいひとが胸に居る
結局は娘の世話になる時が来る

高槻市　井上照子

自己批判まあええがなで終るなり
何や何や私好奇心高齢者
焦したり捨てたり気楽に食べている
認知症予防教室申し込む
アタマからあんたいくつと言われたり

豊中市　安藤寿美子

電車来る音で駅そばすすり終え
芽生え来る生命へ地球荷が重い
また逢えるさよならだから別れられ
ひと味を加え即席から逃れ
握手して相手の意志の強さ知り

豊中市　江見見清

豊中市　山門タミ

親子でも守る一線わきまえて
桜散り季節の花が目白押し
ぎっちらこしっかり漕いであの世まで
電話器に間違いました頭下げ
父母夫没年齢をとうに越え

豊中市　藤井則彦

まだ子供なのに空気を読みたがり
穏やかになったと言われ拍子抜け
定年のあとも戻らぬ前屈み
初対面に心が和む泥臭さ
ゴミ出しがせめて妻への恩返し

豊中市　水野黒兎

細身でも意地張り通す唐辛子
逃げ道を残し怒ってくれたボス
しっぽだけ隠し車内で化けるギャル
口げんか妻を攻めても勝ち目なし
お互いを屋号で呼んで道修町

豊中市　坂上高栄

ああ無情いずれは土に皆かえる
日銀の総裁二党白熱戦
人類の発展聖火がきな臭い
野も山も今年の桜目を奪う
ダライラマ国を愁える平和主義

豊中市　吉田あずき

おもたせもお茶請けもみな柏餅
鯉のぼり空にはためくのは祈り
探しもの疲れ果てたるポケットに
肩書がついて笑わぬ人となる
落城の紅炎思う夕茜

富田林市　稲川恵勇

新札をやたら透かして釣りを呉れ
カルチャーの欲張り息が切れてくる
欲の皮張ってる妻にぶらさがる
古希ですがアイラブユーは遅くない
五欲七癖抱いてしっかり生きている

富田林市　大橋鐘造

欲の無い素手で掴んだ生きる知恵
土砂降りに胸のつかえを丸洗い
夢だけを抱いて別れる朧月
矢印を曲げて己の道を行く
競わせておこう何時かは出る答

富田林市　片岡智恵子

泥舟に乗ってしまった心電図
決断が遅すぎ損をしてしまう
愛犬のガンしめやかに家族葬
何もないから何か見つかる無人駅
血糖値メタボ気にして焼く目刺し

ころころと少女が笑う春の駅
ひと言に一喜一憂してひとり
頂上にあの日の想い埋めてある
ゆるゆるの脳とクイズをして遊ぶ
文芸論熱い男と飲んでいる

富田林市　中井アキ

こだわりが凍てつく夏の真ッ盛り
手がなくて杖もつけない髭ダルマ
旨いもん食べる無口がウッハッハ
食い倒れ食べておかなきゃ損みたい
催しの絶える間もない古都の街

寝屋川市　太田とし子

朝どりの筍で幸せな春よ
頂いた愛お返しを少しずつ
家で食べるだけの野菜を植えました
幸せを夢みた老後砕かれる
同じ趣味同じ病で仲が良い

寝屋川市　冨山ルイ子

アメリカの事で臍繰り減りました
怒っても遅い天引きされている
保湿剤塗って労る足の裏
いつまでも自力で歩みたい祈り
胆管の石に心配させられた

寝屋川市　平松かすみ

電動自転車で筍とどけられ
正直に歳を重ねている疲れ
お会計しっかり握るお世話好き
れんげ畑音ひびかせて刈られていく
青虫はメタボ羽化する日も近い

寝屋川市　森茜

見届けるように春おち葉がハラリ
ご近所の葬儀もしらず日は流れ
退屈な午後念入りに爪を切る
友達が出来ないようと鬼あざみ
親離れしてないタンポポの綿毛

寝屋川市　籠島恵子

金借りて返して愛想ない息子
平穏な暮らしに募る風の旅
のほほんと愚問愚答をして夫婦
持ち歌は一つで世間渡り切る
煮物そえ借りた醤油を返す路地

羽曳野市　吉村久仁雄

気管支鏡をドクターがみた地獄
洗濯機の中で絆が絡み合う
今ならば笑って許すことなのに
言いそびれた一言胃の腑にうずくまる
楷書しか書けぬ夫の怒り肩

羽曳野市　吉川寿美

羽曳野市　安芸田　泰子

新調に命のことを考える
高級の言葉に弱い虚栄心
気にしなやと気になることを言うて去ぬ
来年も生きるつもりの梅漬ける
豆ごはん母の確かな塩加減

羽曳野市　永田　章司

聖火リレー国の威信の裏を見せ
KYは大人社会も嫌われる
鉄人も人間でした二千本
テレビからメタボのニュースバンド撫で
種のある葡萄に孫が首傾げ

羽曳野市　徳山　みつこ

裏みんな知ってる口は一文字
隣席の愛の囁き耳障り
妻長けてしたたか太い線となり
長生きをせねばと意地が湧いてきた
地雷など踏まなかったきょう有難う

羽曳野市　酒井　一壺

カルチャーへ一番前で欠伸出る
時どきは刺激の欲しい枯れ落ち葉
殺伐な事件その都度ショック受け
加齢などわれ関せずの好奇心
試されてあげくの果ては捨てられる

羽曳野市　三好　専平

ベトナムも汚職に悩む国になり
車だけ走れる道に血道あげ
鰐(がにまた)も乱獲されて姿消し
温暖化エコ産業をふとらせる
○×のほかに△□あり

東大阪市　笠井　欣子

ポケットが浅すぎ本音ついポロリ
解るのに時間のかかる年になり
移り香の沁みた半纏冬を越す
ドッコイショ今日の元気をたしかめる
ダイヤ婚愛と辛抱織りまぜて

東大阪市　安永　春

わたくしにも逆転がある小宇宙
つり皮で背伸びしている低い靴
落日染める水平線の茜雲
たこ焼を食べにおいでとラブコール
願い籠め鐘を撞きます寒山寺

東大阪市　米田　水昇

着流しにロマンの匂う男の背
コンビニの煮上がるおでん春の息
腹八分母の口ぐせ愛こもる
石舞台ロマンの風が撫でて行く
つつじ咲く蜜吸う孫は蜂になる

東大阪市　久米奈良子

往診の心をつなぐ聴診器
巻き爪も医師のハサミに助けられ
母の日のヘルパーさんに感謝する
ヘルパーの献立生きる箸休め
八十の大人になれぬ頬を染め

東大阪市　北村賢子

なんだかんだ言って一度きりの赤い糸
翼をくださいふらふら千の風になる
心ない噂が命まで奪う時
ふらふらになってのめり込みたい亡母の胸
もっとふらふら自分らしく生きたかった

東大阪市　佐々木満作

図書館はオアシスなのか春朧
春うらら読書もペンも中だるみ
ばあちゃんの吹き出すようなEメール
その顔は真に反省していない
気まぐれな金が人間狂わせる

枚方市　寺川弘一

女の子ブラジャー買って脱皮する
化粧品加齢に比例して増える
祈る時神の都合は聞いてない
当方の都合は聞かぬ督促状
曼珠沙華許しを乞うて葉を付けぬ

枚方市　海老池洋

生命力舗装の隙にでるみどり
共白髪騒動なかった訳でなし
毒のある顔とは見せぬ花あせび
握手しただけで負けそうだと思う
裏切りはお互い様という握手

枚方市　二宮山久

葉桜へ花見のがした手弁当
病む我へ看病疲れの妻の顔
連休へガソリン値上げの車列
好天気不景気忘れの小旅行
年金へ病んでる右手じっと見る

枚方市　丹後屋肇

強風に中折れ帽がしがみつく
マンションに垂れる留守居の鯉のぼり
ヘルパーと落花を浴びる車椅子
姿見をのぞいている自己嫌悪
春雷に息を殺しているベッド

枚方市　伊達郁夫

嫁ぐ娘のチャペルの鐘が胸を突く
不器用な愛でいつでも叱る父
するするとひとり芝居の幕が開く
一合の酒で己を飼い慣らす
まだ見ない孫の箸買う旅土産

枚方市　森本節子

レース編のように芽吹いた樫の下
夕食に庭の木の芽がかかせない
燃えきった西日出窓に反射する
インド式ひき算にいま挑戦す
手作りの店の帽子で旅支度

藤井寺市　若松雅枝

母の背をなぞって母の年を越え
削減に脅かされる高齢者
菖蒲湯に浸り老化の足を撫で
欠席でポストへ重い足運ぶ
赤ちゃんの笑顔大人を和ませる

藤井寺市　鈴木いさお

まな板の上で遅すぎる懺悔
舵取りを妻に委ねてから平和
遠出して捨てたい過去を置いてくる
人情も義理もその内死語となる
善人の列の後尾にいるサタン

藤井寺市　鴨谷瑠美子

ひらかなの手紙を書いてちょっと燃え
コーヒーの割勘ちょうどよい財布
ユーモアをごはんに混ぜて炊いている
合鍵は万にひとつの隠し場所
言い訳の下手な時計で気に入らぬ

箕面市　出口セツ子

子の夢へ何もできないけどエール
子の幸を祈るしかない無力感
忙しい方が考えなくて済む
心配で眠れぬ夜も子の未来
頬ゆるむ子のプレゼント初給与

箕面市　広島巴子

七夕の淡い思い出空に秘め
短冊の願いきいたと流れ星
虹の橋かけて彦星会いたかろ
海開き人魚になってピチピチと
プレゼントできる幸せ母卒寿

守口市　井上桂作

花の下あきず毎年通り抜け
リレー路を赤旗に染め聖火行く
外国の主権侵して聖火行く
五星紅旗力誇示して聖火行く
騒乱を世界にひろげ聖火行く

八尾市　村上ミツ子

聖火が走る妨害に遭いながら
肝心なことうやむやにしてパンダ
わたしにも来たねんきん特別便
ご近所の骨折他人事じゃないぞ
早起きへとっても長い一日だ

迷子札お守りにして春の町
聞き上手忘れ上手でマイペース
何もかも千切りにして老いの箸
休まずに歩けと影法師揺れる
自販機の酒に酔ってる花の下

八尾市　髙杉千歩

鳥語にも愛の囁き聖五月
うっかりと病気になれぬ高齢期
神がかりかもよタイガースの強さ
何もかも値上り世相鬱になる
難関の聖火ようやくチョモランマ

大阪府　桑田ゆきの

明日ひらく蕾にキスをしてしまう
生返事本気で話きいてない
生きる欲すててないから大丈夫
肩書きが外れて人に戻る鬼
そのうちに値上げに暮らし慣らされる

大阪府　澤田和重

花の里柳友に会う通り抜け
神さまは歳に線引きなさらない
しがらみについつい財布丸裸
オイと呼ぶハイのひびきにない濁り
抜け殻の戦力外のユニフォーム

大阪府　籾山隆盛

平和な空に泳いでほしい鯉のぼり
薫る風あぶない恋をそそのかす
あれこれとインターネット世を乱す
見切り発車で天引き後期保険料
スレンダーになってくパンも年金も

大阪府　米澤俶子

良心をこっそり捨てるゴミ袋
カツ丼を食って出番を待っている
愛少し怠けて嘘が吹き溜る
ストローが二本になって仲直り
シャワー全開甘い誘惑には負けぬ

神戸市　両川無限

言い負けた沈黙挑戦状となる
雨の朝コーヒーは濃く甘くする
五月雨はみどりのシャワー露天風呂
インターホン鳴って長電話を終える
美容院私に似てる婆がいる

神戸市　山口美穂

黒ネクタイ出番ですよと喪の電話
朝ドラに癒やされ夫婦動き出す
輪の中で筋を通してハジかれる
願い叶えば神様すぐに忘れられ
古希過ぎて五十肩だと自慢する

神戸市　伊勢田毅

左遷地へ居着かせたのは田舎味噌
路地裏に亡母似の地蔵ちょこなんと
晴れ着よりジーンズ似合う娘に育ち
国際色ゆたかになった大家族
なまじっか同情心が溝つくる

神戸市　山口光久

惚け防止毎日広辞苑を引く
気の強い姑も可愛くなる加齢
天引が多くて通帳苦しがり
値上げ値上げスーパー回って買う卵
メタボ腹夫と歩幅を合わせ生き

神戸市　山田婦美子

旅先の金庫に指輪置いてきた
イソップを時に残酷だと思う
立ち上がる貴方の杖になりましょう
綾取りは老化防止によさそうだ
孫を得て娘との距離近くなる

神戸市　田中章子

高齢に後期をつけるとは何ぞ
針を持つ妻は女になっている
口は達者老人会のハイキング
手入れせぬ庭にも春の花が咲き
古里は心ゆるしてくれる酒

相生市　中塚礎石

煙出ず深いところにある火種
楽しくて煩わしくもある絆
酔うほどに大きな声になるビール
干からびぬようたっぷりと水を飲む
響き合う人との話面白い

芦屋市　黒田能子

団体のお手本でしょう蟻の列
へそまがり後部の隅に席をとり
鳥歌い小川も笑い我も生き
冬の陽が遠慮会釈もなく沈む
不況風町の銀座の灯が消える

尼崎市　林昭三

五月一日母の忌兄の誕生日
母の歳無事こえました抹茶碗
連休の渋滞さけてビデオ漬け
男独りマンガとコインランドリー
風邪の子を待つ軒下の一輪車

尼崎市　長浜美籠

ぴったりのあだ名のままのクラス会
この入歯たかかったのと見せられる
ハンガーにしたぶらさがり健康器
判だけを押してもらえばよいと言い
解決にならぬ相談して悔いる

尼崎市　山田耕治

尼崎市　春城年代

家事多忙五月の風が振り向かす
思いよう取りよで余生耀やかす
冬物の片付かぬまま五月晴
布団干す若奥サンに見とれている
母の日にたっぷりの愛贈られる

尼崎市　春城武庫坊

花はよかったが若葉の緑更によし
水温み鯉も機敏に動き出す
何するでなく新聞散らしよう溜り
春愁の夜明けに夢の続き見る
あざやかな緑を野山が着飾って

尼崎市　軸丸勝巳

八十路坂通院記録めく日記
大病院待合室にない雑誌
百薬の長は一合あとは妻
カタカナの花は名札を添えて植え
洗面所リフォームに顔若返る

伊丹市　山崎君子

聖火リレー無事に終れと祈る朝
天気予報あたってショック待ち合せ
朝ドラに遠い初恋ほのぼのと
母の日は仏にケーキ亡母憶う
娘の脛を今年もかじる八十路ゆく

川西市　米原雪子

運ばれた黄砂で車薄化粧
セールスのうまい計算飲まされる
選択肢無数にあって悩まされ
値上げせず小さくなったパンの顔
奥の手を出さずにすんでほっとする

川西市　西内朋月

醒めた目で見ている僕が別にいる
胃がなくて三度の飯はみんな食べ
夕方にようやく醒めた二日酔い
冤罪になってしまった朝帰り
反論を抑えきれない歳になり

三田市　北野哲男

予報士が雲動かして雨降らす
父の影踏むほど息子近寄らぬ
狛犬の阿形あくびに見えた孫
回虫や虱の話クラス会
体型が崩れかけたら正念場

三田市　久保田千代

母送る覚悟は出来ていたつもり
子は親を選べず同じ色で咲く
澄んだ子の瞳に約束破れない
全快を祝うビールに喉が鳴る
期待せずおのれの分をわきまえる

三田市　堀　正和

上客と見抜かれている宿浴衣
ボーナスの緊張感よもう一度
よく貯る一円玉の貯金箱
迷ってるうちにバーゲン売り切れる
栄転も左遷も乗せて汽車は出る

三田市　臼井二英

頑なにならぬ程度に自己主張
信号のサバを読んだら意味がない
別れない理由の一つ金らしい
石段を登る心を空にして
好結果神のおかげと決めている

三田市　上垣キヨミ

水やると花はお礼の香を放つ
受け入れが出来たか救急車の行方
計算機要らぬ三ケタで日々暮れる
灯を消して五体を伸ばし遠慮ない
浮き浮きと出掛ける足は痛まない

西宮市　井上松煙

学園へまだ行ける足感謝する
好きにしてなすべきことは先送り
片足で立ってズボンがまだ穿ける
メタボリになっても摘む食いしん坊
お年でもおしゃれしなされ紳士物

西宮市　緒方美津子

花回廊順路逆行警備員
人生再構築也総入歯
準備万端余裕綽綽駅饂飩
住む街にチラリホラリと日章旗
デパートに夫とゆくとせからしい

西宮市　牧渕富喜子

サイクロン苦しみいつも弱者から
雨止んでぬれた新緑うれしそう
格差温度差どこかで蛙鳴いている
早く母亡くした影が今もある
肉料理めっきり減った豆ごはん

西宮市　山本義子

三度目の正直時効らしいです
指五本いつもお世話になってます
腹八分いまさらなりと思うだけ
九曜星み仏の加護祈るのみ
十年定期もう必要はおませんな

西宮市　菊池トミヱ

野が萌える歩きなさいと呼んでいる
人生は往路しかない長い旅
道一ツ隔てただけの運不運
親心敷いたレールに子が背く
寄り道が過ぎた人生今楽し

花が散る亡き子を土に還す朝
納骨へ舞い散る花が後を追う
満開の桜だ涙は似合わない
おひとり様に馴れて自ら指一本
ほどほどに生きて死ぬのは難かしい

西宮市　秋元てる

白椿ひとすじの紅忌が巡る
卓袱台の頃にはあった家族の輪
ぼろくそに言うてまたねと寄る姉妹
森閑とゴーストタウン連休日
プレゼント届いてかぼちゃ焦げつかす

西宮市　亀岡哲子

何もせずビール冷えたかチェックする
権力にへつらう癖が似る親子
ばれたから消え入りそうになる夫
家計簿に酒を減らせと書いてある
ちょっとでも触ると怒る妻と居る

西宮市　片山忠

天才児世間の空気読み取れず
湯上りに飛鳥美人を真似てみる
店仕舞いわんさと寄ったくいだおれ
物臭がしゃべりだしたら止まらない
子ども服マネキンまでもアニメ調

西脇市　七反田順子

菜種梅雨生垣活気初夏の色
菜園は雑草萌えて人を呼ぶ
今日中に宿題熟すボルテージ
鯉のぼり生地に仕立てたアロハシャツ
母の日に輪になって切るカステーラ

姫路市　古川奮水

つきあい下手言うてみっちり貯めてはる
ミニスカートこれ見よがしの脚線美
威勢よく諸肌脱いでも灸の痕
三面鏡女の偽装幇助罪
孔子の国で詫びず認めず改めぬ

奈良市　米田恭昌

沈下橋川の流れに逆らわず
嘘ばれてあっけらかんとする女
錆びた釘しかと持ってる自己主張
長い爪見れば身ぶるいとまらない
それなりにみんなてつ学持っている

奈良市　天正千梢

新緑のざわめき滝は無心なり
狂うほど恋の炎がはためかず
目標がしんぼう心を掻き立てる
庭のさつき今年も無事に会えました
花弁にもおはよう届くウォーキング

生駒市　飛永ふりこ

香芝市　大内朝子

ババシャツを脱いでスリムになる季節
娘のくれた小遣いためる娘の名義
愛憎の起伏も凪いで生き仏
世渡りの笑顔がふっと寒い時
欲しいものなくなって来たどうしよう

橿原市　安土理恵

老いたかなとかく近ごろ愚痴っぽい
未練たらたら毎日入っているメール
共犯者だから守っているひとつ
似てるよね未練男と踏んだガム
逃げ水の向こうの影を追う愚か

橿原市　居谷真理子

胸の庭小さな花が今咲いた
鮮やかに朱唇が捌く会議室
芯のある人で静かに立つ座る
脇役はいつも少うし意地悪い
傲慢を着て王様の丸裸

大和郡山市　坊農柳弘

四万十の清流鮎の立ち泳ぎ
ライバルと競う生甲斐第二章
シナリオは貴方任せのフルムーン
人間の脆さを包み込む媚薬
誘われてモカの香りに口説かれる

奈良県　渡辺富子

ガラクタを積んで崩して生き延びる
駅裏で肩書はらり脱ぎ捨てる
君からの古風な愛を温める
盧舎那仏へこころ傾く失意の日
興亡の歴史偲んで仰ぐ塔

和歌山市　古久保和子

無農薬されど私の虫嫌い
窓付きの封書で金の居る知らせ
いつ見ても何か食べてる妻と象
飼い主と見比べなるほどと思う
山笑う一面椎の花盛り

和歌山市　喜田准一

結論が見えて来たからティータイム
ぐうたらに見せてめり張りつけてくる
揺さ振りに耐える男の縦社会
繕うて生きても蛍火のいのち
少し間を置いて空気を丸くする

和歌山市　武本碧

指揮棒も弾んで春のアンダンテ
重箱の隅をつついてきれい好き
咲けるだけ咲いてぽとりと花の意地
好きな子へわざと意地悪ちさな恋
生き方を草書に変えて煮くずれる

和歌山市　福本英子

暫くは傍観しよう子の脱皮
マンションへ移ろか草を抜きながら
慇懃無礼に対応された京料理
この辺が無難と線を引く心
久し振り病気自慢のクラス会

和歌山市　堀畑靖子

キッチンに愚痴があふれる物価高
イベントに老人力も駆り出され
ポップコーンのにおい平和な行楽地
経験が落ちた視力をカバーする
腰痛に一日へこむ万歩計

和歌山市　玉置当代

通天閣のお上りさんになり候
天王寺界隈人も忙がしく
二度付け禁止串カツに舌鼓
スニーカー弾む姫路のお菓子博
どっこいしょメタボリックが邪魔になり

和歌山市　田中みね

年金もピンからキリへある格差
これからの夏は嫌だよヘビ百足
度の過ぎた謙遜実にうとましい
食べかけたらそれこそ意地に落花生
活気ある妻へと戻る句会の日

和歌山市　松尾和香

捨てる事も大事になった身の回り
リセットの頭脳鋭い風分ける
気まぐれな人生ひとり生きられる
行き詰り女神の誘う道標
母の日の花束亡夫と分かち合う

和歌山市　宮本三喜夫

高速で品質試験嘘がばれ
新年度年金減らし物価上げ
擦り合うみっともないです党首たち
役所では娯楽用品税金で
国会はおとなしそうで野次飛ばす

海南市　堂上泰女

廃校のメタセコイヤに森を見る
ふわふわの雲から学ぶ生きる知恵
なごり雪の歌切々と君想う
デパートの合併劇に酔う女
ときめいてやがて別れる桜月

鳥取市　植田一京

花が咲き花が散ったと歌うたう
うろうろとしてケイタイを持たされる
マークした君がちっとも振り向かぬ
夢ばかり追ってうかうか歳重ね
メリハリをつけて進もう明日のため

鳥取市　倉益一瑶

風渡る過去の傷などつれて逃げ
化石のように日がな眠っている老母
ほろほろと夢はらはらと散るサクラ
スーパーマンがそっとドリンク飲んでいる
からみ合う視線どちらも負けてない

鳥取市　宮脇道子

恋をして生きた人生悔いはない
恋もよし白い眼で見る友も好き
うれしいね米を自由に買ってます
波乗りで遊ぶ若者親は汗
超うれし人の優しさ沁みてくる

鳥取市　田村邦昭

老いてなお進むべき道探してる
宴には嫉妬が少し見え隠れ
がむしゃらに泳ぎつかれて岸深し
悔いのない人生だったとは言えず
巣立ちゆく先には嵐待っている

鳥取市　奥谷彩子

恙なく夫婦茶碗に食進む
夕陽に砂丘夫婦二つの影落とす
喜寿傘寿幕あいに取る小休止
水溜まり月を跨いでまだ跳べる
おはように元気を貰いいい笑顔

鳥取市　加藤茶人

腹の立つ時思い切り鍬を振り
孝行のニュアンス親と子との距離
ここ掘れと言っても欲しい暮し向き
孝行という付加価値が要る世相
趣味仕事死ぬまで仕事性恨む

鳥取市　土橋睦子

川端でザワザワ騒ぐ猫と蟹
田舎にも砂利道はない峠越え
頼られて私の予定こなせない
お喋りに夢中電話も過熱ぎみ
オリンピック民族の血を流すなよ

鳥取市　土橋はるお

どの社にも名ばかり管理職がいる
友達の右に美人が来て座る
地蔵さんは一つも悪いことしない
あぶく銭るんるん使い切っちまう
火葬場がホテルのようにお出迎え

鳥取市　平尾菜美

ありがとう嫁に言われて白くなり
逃げ水にからむ忍耐強い人
高飛車なプライド散らす花の芯
一本気女おとこの顔で立ち
おば捨てを抱いて仄仄する話題

一つずつ植えて緑になる棚田
ただ歩くだけで健康取り戻す
マイバッグ持って行かねば恥ずかしい
姥捨てと思える税をかけてくる
生きている仏に出会うことがある

鳥取市　福永ひかり

バイキング三食分を皿に盛る
姑に似てくる夫にうろたえる
わたくしはワタシたまには放っといて
物価高中国産で生きている
おみやげのアロハを着ては歩けない

鳥取市　福西茶子

草の芽を一気にのばす菜種梅雨
芸能人午後もおはようございます
親しさはほどよい距離が長つづき
踊ったり唄えるうちが華ですね
米寿でも免許更新する意欲

鳥取市　太田幸枝

共稼ぎそれぞれ車で行く職場
ノーマイカー自給自足で間に合わす
母の日に好きに使えとのし袋
母の日は回転ずしに誘われる
胃も老化一人前を食べ残す

鳥取市　西川和子

日本は平和今年も花に酔う
温暖化地球の未来暗示する
休耕田でかい顔する外来種
汗かいた先祖が嘆く休耕田
脇見などしない盲導犬の自負

鳥取市　永原昌鼓

白勝て赤勝て国会の運動会
敬遠をして屈辱の四番打者
墨付けて目が四つあるプロ野球
葬式の裏方腰に鉈を差し
うぐいすと二人連れなり菊を挿す

鳥取市　武田帆雀

かげ口で吐いた言葉が降りかかる
私を私にする保険証
お医者さんごっこした子も皺だらけ
幸せを両手に受ける年金日
酒呑めぬようになったら逝くらしい

鳥取市　中宇地秀四

大臣の答弁真似る妬み節
院展の値札の価値に武者震い
臨機応変母にお婆に忙がしい
記憶力テストまとめて日記書く
腰痛を案じてくれぬ畑の草

鳥取市　吉田弘子

鳥取市　中村金祥

満タンになった地球もメタボです
再就職したが我慢の日が続く
支持率を下げても盃は離さない
保険料拠出金ではないはずだ
ブーメランきっと私に幸が来る

鳥取市　春木圭一郎

ポイントは逃げないことと言い聞かす
人は人自分は自分比較せず
大切なひとのためだけ時間割く
失えば代わりに何か与えられ
結果より過程大事と悟った日

鳥取市　夏目一粋

風止んで残り火右往左往する
トウモロコシもう食い納めエタノール
一呼吸おいたお蔭で今がある
加齢するたびに神様信じだす
ほどほどの欲が明日の糧となる

鳥取市　池原天馬

レジの人にポイントカード教えられ
敬老会去年の元気嘘みたい
過疎の村とむらいの日は賑やかだ
難民に九条の意義を教えられ
けいたいを喜寿でもたされ苦労する

鳥取市　有沢せつ子

送り仮名辞書に自信をもらい書く
お礼状こころの熱い内に出す
新しいスーツを脱いでほっとする
母の彩庭にむらさき多く咲く
気丈さも瞬発力も弱くなり

鳥取市　岸本孝子

金庫にはいろんな欲をつめている
毎日が連休なのに待つ休み
普段着にならぬスーツが邪魔になる
誇らしく男の子だと鯉泳ぐ
珍らしく夫が化粧ほめてくれ

鳥取市　岸本宏章

さまざまの出会い別れも付いている
保釈金とても年金では出せぬ
判を押すときはしっかり口も出す
伸びきってゴムは満足して果てる
金のある人が結局詐欺に遇う

鳥取市　下田茂登子

母の日に届けてくれる嫁がない
大臣のずるさこの頃目にあまる
ホテルから出て行く妻はまぼろしか
目を据えてからんで来ます老体で
品格が何処にも見えぬ絡む癖

長らえて花も実もあるおじいさん
迂闊にも仏心が詐欺にあい
面倒を買って小じわが増えて来た
日めくりが机上プランのまま瘠せる
頑固さも凄みも消えて好々爺

倉吉市　野口節子

冷静さ欠く売り言葉買い言葉
押して引き少年の胸開かせる
瓦礫道坂道駆けてきた八十路
ぽちぽちと刻を知らせる腹時計
胃も腸も切除しながらよく食べる

倉吉市　最上和枝

灸すえて五臓の叫び誘導す
欠点をチョイ見せしては上手くやる
ハート奥に鍵の効かない部屋を持つ
非常食入れ替え食事する日決め
値上げせぬ商品見付けチョイ嬉し

倉吉市　猪川由美子

物指しで測ったような日が暮れる
ひやひやと鳥取弁を聞いている
仏壇に酒を置いたら父の影
古里は笑顔ばかりと限らない
芋虫は芋虫のまま美しい

倉吉市　牧野芳光

パズル解くうつろな頭振りながら
梟の声もうつろに独りの夜
わが町のホテル一〇〇〇円バイキング
去年まで届いた棚に背伸びする
手も足も口も元気と置いとかれ

倉吉市　松本よしえ

お互いに忘れ上手で恙ない
幾星霜えにしを語る座り胼胝
断崖で鈍感力を取りもどす
旅先の妻がメールで火の用心
ゴマほどの話巨大にする女傑

倉吉市　山本玲子

万物の霊長ごみにしたくない
言い過ぎてひやひやだのにあっけらかん
孫たちがあっさり切ったもつれ糸
これという取り得もないが苦労性
ライバルへ泪をのんでおめでとう

倉吉市　山中康子

こっそりとなんて老いには老いの恋
踏み台も人もふんばる正念場
名も知らぬ種が見事な花咲かす
拍手を浴びて鼻がかすかに動いてる
仏の気配するから石を積む河原

米子市　政岡日枝子

米子市　中井ゆき

花達に日々はげまされ生きのびる
はげましてくれる花への御礼肥
好きすきと犬が顔中なめに来る
にこにこと笑顔やさしい人が好き
私が選んだ道だへこたれぬ

米子市　野坂なみ

ラッキーな話に仕立て丸い風
まだ出来るつもりの見栄に付けがくる
遠ざかるロマンに疎く草を刈る
繭の中ロマンが芽生えかけている
コンビニ・フーズとっさに慣れて手放せぬ

米子市　光井玲子

孫たちの選んだ道に口出せぬ
人は好きずきいらぬ事言えないな
こころの通じない人には線を引く
ここからも呆けないように努力する
この頃はうなぎにお目にかかれない

米子市　白根ふみ

ブランコが揺れる桜が散り急ぐ
青嵐を浴びて少年無限大
うなぎパワー老姑をしっかり抱きかかえ
だいこんの花片隅で主張する
気遣いをしなくなってもライバルだ

米子市　青戸田鶴

けんめいに炎えているのは柿若葉
日光月光菩薩二人で東京へ
うたかたの恋の続きのジューンブライド
登らねばならぬ坂道まだ残す
種いっぱい運んだだろう綿毛たち

米子市　門脇晶子

露天風呂月と一緒に湯を浴びる
風に吹かれて花粉あちこち旅をする
快い友に出会えば明日が見え
玄関でうわさをきいた猫がいる
次郎の鯉は太郎の鯉を追越せぬ

鳥取県　細田裕花

あざやかに妹春の川を跳び
雑草の緑立ち直りが早い
総会の議事に隠れている火薬
電池交換しながら明日へひた走る
投げやりな言葉の奥にあるうつろ

鳥取県　竹信照彦

農業を潰した日本の政治
食糧の増産とても無理なこと
菜園にせめて苗物植え自給
隠岐ノ島行き七類港は満車
隠岐汽船降りて渡船で磯へ行く

鳥取県　盛田夢路

ブランド米育つ田圃に愛を込め
情に触れやっと人間らしくなる
酒好きなあなたと生きる薮小路
親切が嫌いな人はないだろう
生きざまを映す往生際の貌

鳥取県　石谷美恵子

満タンの胃袋いのち脅かす
貸し借りのけじめを甘く見た疎遠
戸を閉めて私ひとりのファッションショー
華やいで踊ろう限りある余命
薄情でケチと女がずばり言い

鳥取県　佐伯やえ

無人駅のゴミ気になり今朝もいってみる
ボタンに礼肥ようこそよこそたっぷりと
父母大好きなエビネランつみ墓参り
逃げ出せずむずかしい役引き受ける
ひ孫が帰りちょっと奴隷になってやる

鳥取県　北村稔

核心をずばりつかれてねむれない
冷蔵庫過信禁物ひややっこ
がむしゃらに走った若さなつかしい
あのむすめいつも出しゃばり彼出来ぬ
暗示など私のボケにききません

鳥取県　山下節子

うれしさも夢も満タンランドセル
地球儀にやがては記す宇宙基地
衛星もやがて化石になる宇宙
マンモスの化石が証す地質の図
ちゃんちゃんこ母の温もり着て徹夜

鳥取県　松川行男

待ち合いで春の衣裳を語り合い
総会も準備したほど集まらず
転任の挨拶コピー読んでいる
転任五　退職三の春だより
会長になって出費が嵩み出し

松江市　三島淞丘

大夕日神のデザインだと思う
二度と来ぬ今日一日をどう生きる
旬の味添えてお酒の瓶が空く
虫籠の中には夏の息づかい
世間とはそんなものよと酒交す

松江市　松本知恵子

海の幸山の幸食べ活気出す
夏向きに私デザインエステサロン
鯉のぼり上がって俄然活気づく
太陽へ向くコスモスの小さな芽
明るい絵介護病棟照らしてる

松江市　小川注湖

男と女いるからそこに活気あり
ちびちびと盃小で二合決め
暖簾からうなぎが匂う丑の日か
夜店ではメタボ金魚が悠々と
後期医療年寄り旗で仕分けされ

松江市　安食友子

度忘れを勿忘草に問うて見る
雨上がるピュアな緑に肖ろう
筋のない夢に遊ばされてる悩み
セーラーもパレットも来たこの丘だ
人生もそれぞれの在る迷路だね

松江市　銭山昌枝

ぴんぴんのわたしも少しずつ凋む
イケメンがうじゃうじゃみんな同じ貌
眉と紅引く時おんな勝負する
物置に母の涙つぼがある
中国のうなぎは安うても買わん

松江市　津川紫晃

平凡な歩幅で明日を追っかける
飛ばされた任地情けの酒がある
握手して疑い深い指となる
聞き上手になって平和な灯を守る
菜の花の向こうで笑顔待っている

松江市　川本畔

ひとときの朝の静けさ目をつむる
素直な朝だ少し尖った主なのに
よく喋る客は潮どきくじかれる
つつじ咲くピンクと白と咲きずれて
緑がワッとワワッと騒ぎ戯れる

出雲市　竹治ちかし

晒しても私は最後までわたし
主婦の目に期限産地がさらされる
粋は粋やぼはやぼなり世を渡る
女偏付きややこしくなる話
メードインジャパンが持っている力

出雲市　森茂美

百歳の重みが語る人の道
便利になり要らない物が増えてきた
九条がやっと物言う裁判所
農作業理屈はいらぬ鍬を持つ
四方の窓開けて迎える初夏の風

出雲市　吉岡きみえ

竹の子のつぶやききいて鍬を当て
むずむずとするのは春のせいだろう
炎えかすがくすぶりつづけ発火する
ほろ酔いの影とふたりの月夜みち
やけくそだ今夜のビールほろにがい

一服の緑茶夫婦の骨やすめ
マタニティーゆっくり初夏の風が押す
手植する子等に薫風地の匂い
牧の風子牛と朝を対話する
春夏秋冬五百羅漢は川を見る

出雲市　小白金　房子

歳月は元にもどれぬ走馬灯
自立して地産地消の農に生き
高齢の安否気になる闘病中
何も彼も善意と信じ丸く住む
裏木戸に我が家の歴史大銀杏

出雲市　持田　多輝子

ガソリンに右往左往の日が暮れる
日本一の高殿登って神座みる
うなぎでも土用がくるとノイローゼ
洞窟は密会場所と決めている
大輪のボタンに逢える年一度

出雲市　富田　蘭水

嬉しくてふくみ笑いが止まらない
やあやあと木の芽花の芽春の使者
祝い事続き財布もぺっしゃんこ
パンくずを撒いて小鳥を笑わせる
味気ない夫選んだのは私

出雲市　佐藤　治代

やわらかい緑の中の竹の秋
約束を果した鳥が戻らない
迂回して小さい鳥の群に会う
愛いっぱい受けて椿が実を残す
愛少し入れた手籠が温い

出雲市　小豆澤　歌子

カーネーション二人の母に感謝する
着膨れを春の小川に笑われる
大輪のボタンにパワーもらう老い
迷いつつ六十路の坂を登ってる
夏野菜恵みの雨にホッとする

出雲市　多久和　敬子

半端でない先頭を行く風の圧
投げられた言葉見ぬ振り聞かぬ振り
さらさらと蟠り捨て砂になる
春うららエプロン外し鳥になる
ガス灯に浮かんだ藤の淑やかさ

出雲市　伊藤　玲子

山菜を美食にあきた舌がほめ
約束をいっぱいもっている時計
まじないのように点滴効いてくる
水田に月が遊びに来る五月
川柳が好きでいくさがまだ続く

出雲市　岸　桂子

鼻声で甘える女に顔が向く
人情を投げて返して味を知る
いざこざのその後が何故か気にかかる
にこにこと作り笑いでゴマをする
ぴんぴんとしながら医者によく通う

雲南市　毛利　幸

光っていた頃の亡夫（あなた）を忘れない
通帳に年金暮らしの句読点
孔子の国に道徳心の有るや無し
着飾っても寒い心は寒いまま
カラヤン百年BSで見るコンサート

島根県　伊藤寿美

過ちを許し許され夫婦道
平坦な道につまずく苦笑い
減反の政策に泣き輸入米
閉店のシャッター重い倉の街
読み方で感じの変る女郎花

倉敷市　撰喜子

捨て石となっても主張守りぬく
こんなにも裁きがうまいのは他人
仏の膳供えて動く日課です
艶のある声です母さんまだ元気
塩壺を嫁に譲って凪いでいる

美作市　福原悦子

その時が来るまで心磨かねば
幸せを掴めと青い背なを押す
大木にもつれからんでつたかずら
もう少し何かが足りぬ青りんご
一言がチクリ刺さったまま今日も

美作市　山本玉恵

故里の風に素顔を覗かれる
風薫る少子化の鯉空に舞う
運命の出合いとなった雨やどり
好い出合い今日最高の酒の味
出合いから一ヶ月後のことでした

真庭市　国米きくゑ

年金の愚痴も忘れた山登り
頂上へ励まし合って登る老い
私にも完走出来たハイキング
年金の目減り姥捨てかも知れず
故里の訛懐かしクラス会

真庭市　福嶋智恵子

試練とや今年も手術台にのり
くり抜いたガンは私の一部です
夢少し下さい乳房切った夜
靴ヒモを結び直していざ散歩
十一連休家事に休みはありません

竹原市　岩本笑子

竹原市　時広一路

元気元気と言わねば元気逃げそうな
字に自信無くて私の筆不精
もう欲は無くてライバルなど居ない
重宝をさせます地図に無い小道
適量の目盛を齢が下げさせる

宇部市　平田実男

老いて子に従い楢山行きへ乗る
全没を選者のせいにしてる自負
美人より十人並が早う嫁き
整形はマスターベーションかも知れぬ
心では舌を出してててする土下座

美祢市　安平次弘道

腕まくり婦長の処理が頼もしい
手術台もうあきらめがつきました
ジョークです弱音なんかは吐けません
理屈ではわかるが本音など出せぬ
コーヒーはブラック妥協などしない

東かがわ市　清川玲子

石ころの一つ一つが持つ個性
雨風に耐え石仏のいいお顔
金物屋の店番猫は鍋の中
菜の花を褥にねむる蝶の果て
一一九呼ぶ時きっととちるだろう

東かがわ市　原賢

逆らった流れにいつか妥協する
夢百態夫婦茶碗に盛って春
柱にも杖にもなって妻は老い
あわてずに歩調合わせてくれる妻
見栄ひとつ捨てて世間を広く住む

東かがわ市　伊勢八重子

山笑う始発の駅にあるドラマ
花絨緞この世の極楽通りゃんせ
お日様に抱かれて眠る布団干す
さりげ無くしても本音が顔に出る
親の手をするりと抜けた反抗期

東かがわ市　川崎ひかり

最初だけ敬語で徐じょに讃岐弁
吉兆もタッパーどうぞと言えばいい
何事も目の黒い内黒い内
缶や瓶拾う事から田ごしらえ
こだわれば金もかかるし暇もいる

東かがわ市　神保坊太郎

三本の矢が一束になり切れぬ
くるしくて三日と猫はかぶれない
置去りにしたき暑さよ影法師
中古品なれど耳など良くきこえ
舌先で転がしている口ぐるま

満を持すスタートひそかなる助走
完全無欠誰も近くへ寄って来ず
麦秋という感性をいとおしむ
気を抜いた脇の甘さへ来た刺客
ささやかにポイント券を溜めて主婦

松山市　宮尾　みのり

お茶を摘む時期にはお茶を摘む農家
都忘れを咲かせて一人山家住み
酔うて候焦点が合ってない
春には春の秋には秋の旬を食う
茶飲み友くらいは欲しいなと余生

大洲市　中居　善信

枯れ山水うねる砂紋の波の音
枯れ山水石山になり島になり
枯れ山水砂紋の描く海無限
枯れ山水砂紋の渦の大宇宙
悟れぬまま砂紋の渦に佇ち尽くす

西予市　黒田　茂代

百寿万歳空も心も晴れ渡る
床間に映えてうれしい母百寿
百歳を囲む宴が盛り上がる
風みどり背骨がしゃんとなってくる
カー免許ない分歩くのは得意

高知市　小川　てるみ

蛍かと思えばわびし団地の灯
傷ついた蛍はどこへ飛んでゆく
一日の疲れをいやす涼み台
悪政にまた溜息の庶民たち
道草をせめた教師が寄るお店

高知県　小澤　幸泉

園児らの目玉が光る泥だんご
孫が去り脚投げ出している二人
ぶかぶかの靴履かされた少年期
正論を吐きもがいてる泥の中
土が降るでかい領土のお裾分け

唐津市　坂本　蜂朗

竹の花咲いて天変地異真近
祝詞読む代理が名刺撒いていく
ビル街の歩道に鉢や人が降る
すんなりとお顔浮ぶが名が出ない
迷惑な貌で愛犬服を着る

唐津市　山口　高明

のんびりと今日を楽しむ老いの日々
腐葉土になり損なった濡れ落ち葉
土要らずサプリメントで育つ瓜
階段を昇って広い視野を知り
階段をやっと上がった課長椅子

唐津市　樋口　輝夫

還暦の初心に還るはずでした
善人らしい嫁遠慮せず大欠伸
軍配は性悪側によく挙がる
だんだんに眠気を誘う木魚の音
関白をたてて財布は妻が持ち

唐津市　井上勝視

休日をやたら増やして疲れてる
天引きの残り六十で割る暮し
朝夕の祈り支える座り胼胝
温暖化地球が投げる変化球
口数と度忘れ増えた老い二人

唐津市　市丸晴翠

旧友とのショッピングは若返る
歩くほどに痛みが消える事もある
世が荒び父式護身術思う
島民の派手な出迎え喜界島（クラス会）
期待した入り日霞に邪魔される

熊本県　岩切康子

ささやかな年金まっすぐ生きた自負
のびのびと一寸寂しい老妻の留守
ニュースではますます荒む日本人
枕元眠るお守りぺんとメモ
ゆきずりの会釈にシャンとなる散歩

熊本県　髙野宵草

花粉症きれいな名前で苦しめる
嘘少し書けばかすれるボールペン
ありがたや杖に車が避けてくれ
ご馳走にときめく老いのあさましさ
長生きだけが私の取り柄ありがとう

熊本市　永田俊子

今日もチャレンジ一日がまた始まった
赤土に生える樹で知る地下資源
アリ塚をけずると資源見えるらし
膝が今革命起し掛けている
しそセロリ思いがけないこぼれ種

シドニー　坂上のり子

過去みんな捨ててこようと旅に出る
無為無策ただぼんやりと空を見る
この舌に巻き込んでいる嘘の数
ちぎれ雲故郷の話長くなる
弱点が運命線に居据わられ

砂川市　大橋政良

第107回
大阪川柳の会

日　時　**8月4日**(月)　17時開場　18時締切（席題なし）
会　場　梅田駅前第2ビル5F　生涯学習センター
宿題と選者（2句）△白・矢沢和女△見事・前田咲二△頼る・山本希久子△歌・磯野いさむ
会　費　千円　欠席投句　8月2日まで　本田智彦宛
〒532-0025　大阪市淀川区新北野1―3―4―706

川柳塔の川柳讃歌 ㊸

木津川　計

友人はいるが親友いない僕

岩崎　公誠

広辞苑は〈友人〉を説明して「ともだち。朋友」とそっけないのです。〈親友〉は「信頼できる親しい友。仲のよい友人」ですから両者の違いは鮮明です。で、僕の分け方です。

友人とは酒を飲んでも喋らねばなりませんが、親友とは黙って飲んでも満足です。友人の友人は他人ですが、親友の親友は友人です。友人に貸した金は忘れませんが、親友には使ってもらえた喜びです。「親友が女であってなぜ悪い」、深尾吉則さんのけだし名句です。

敬具から追伸までにある吐息

水野　黒兎

〈ランプ引き寄せ故郷へ／書いてまた消す湖畔の便り、は高峰三枝子の哀傷でした。胸の痛みや金の無心は言いにくくて書き出せず、敬具と締めくくって、やはりねばならず、追伸で本音を吐露するのです。

それならいっそ作家の斎藤緑雨を見習ってはどうでしょう。国文学者・上田万年に送った「拝啓　草々」だけの手紙を見るや、万年は夫人に「斎藤に金を送ってやってくれ」と言ったのです。粋なやりとりの見本です。

誰も彼も炎えるものあり始発駅

野口　節子

ただに燃えているのではありません。炎上していると節子さんは言うのです。まことに始発駅を発つ人の群れは全身ゴッホみたいな〝炎の人〟になっているということなのでしょう。だから終着駅に辿りついたら誰も彼も〝燃えつき症候群〟に陥っているのです。

ま、始発駅の炎上はオーバーにしても「改札を出るも先駆者たらんとす」（路郎）の気概は「少年よ大志を抱け」の明治の始発時点で炎え上り、火の車になったのは確かです。

老いるとは悲し優しくなる夫

佐藤　治代

体力は衰え、気力も失せる老後です。かつて気短かで行動的で怒鳴り倒した夫君が、いまはおだやかで優しい人間に変わったのです。いいではありませんか、治代さん、悲しまず、よろこびましょう。年をとると、大方の人は、優しく寛容になるのです。老人が相手を構わず、たけだけしく乱暴なのを見ると、この人は年齢につれ成長していない、と僕は悲しくなるのです。許せないのは老いた政治家がこの国の老人を痛めつけることです。

焼酎の芋よ口惜しくはないか

居谷　真理子

収穫期、丸々と肥った芋は芋のまま、芋らしく芋として人間に食われたかったのです。

それがあろうことか発酵させられ、蒸留の憂き目まで見て、焼酎にさせられたのです。うれしい訳がないではありませんか。真理子さんは焼酎の芋に今日の人間の悲哀を見たのです。人間は人間として尊重され、人間らしくその生を終えたいのに姥捨ての悲劇が現実になろうとは。子供と老人が大切にされない国はロクな国ではないのです。

哀愁か戦のためかラッパ吹く

髙橋　宏臣

「新兵さんは可愛やなー、また寝て泣くのかえー」、帝国陸軍の消灯ラッパに涙した世代は、高齢化につれ少数派になりました。あのラッパは確かに哀調でした。

ですがラッパはこの際、戦いのために鳴っていると思いたいのです。「歩調とれーっ！」の号令と共に鳴る進軍ラッパに、いまは老いた兵たちが進軍し始めたのです。お役御免で静かな余生を、の筈が「早う死ねェーっ」と遇されて黙っておられましょうか。

（『上方芸能』誌発行人）

麻生路郎句抄

（句集『旅人とその後の作品』から）

人生の雑音

総辞職犬も一緒に引き揚げる
総辞職再び松の風を聴き
春の日は寝巻きのままで暮れてゆく
子が死んで葱や菜っ葉の乳母車
本復をして辛辣な口をきき
云うだけは云へ云へ若さ失ふな
銀行のお世辞も気の腐るものの一つ
この腕を見よと脱税して居たり

二・二六事変

春寒し拾ひ手のない首二つ
身代わりの緋縅しぐらゐ着てて欲し
翻へる文字は帰順の外になし
煉瓦の下のみみずの如く生きるのみ
桜かねと落ちついてゐる年になり
落人の刺身に箸もつけざりき
くびをつれとの兵児帯にはあらず
春の艸代議士などに踏まれるな
突撃で別れたまんまそのまんま
幸福は金庫の中になかりけり
トランクはダークサイドも知っている
鉄が錆びたと同様に扱はれ
臨月へ電話番号書いて出る
太を弾くその健康をみつめられ
エキストラ雲を見てゐるのもまじり
失恋が彼を日曜画家にさせ

自選集

太陽の下で無意味な戦する
明暗を分けて人生わかれ道
挨拶がやっと終った箸袋
視界みな緑男に湧く元気
餌があるから鳩が来る蜂が来る

恒松町紅

早起きもいとわぬ旅のスケジュール
夕日にもおおきに感謝恙無し
くいだおれ太郎婿入り水面下
バスツアー後期高齢ハイパワー
奥深い味あまおうもとよのかも

津守柳伸

ドッコイショ前も後ろもドッコイショ
ぐずぐずの尻叩かれる天気報
成仏が出来ずちょいちょい夢に出る
百名山それぞれ富士を真ん中に
余生一歩老大生のペンを購う

遠山可住

音たててスープが旨いログハウス
気分いい日には目につく花屋さん
無理頼む言葉やさしく無理たのむ
満場の拍手へ水を差すくしゃみ
鯖寿司が祭の宵をとりしきる

都倉求芽

煩悩が何でも独り占めにする
体臭を森に残して逝った友
洞窟の中から呻き声がする
良心が忘れたことを思いだす
走ってはいけない後期高齢者

土橋螢

母の日や桜桃の実に枇杷の実に
母の日や花にケーキにマイランチ
母の日や負けず嫌いの高糖値
母の日や九十九坂ゆく杖のおと
母の日や白壽に百壽それからも

中原諷人

わたくしの心入居者募集中
呵々大笑脳の空気を入れ替える
おにぎりが好き丹田に力持つ
ウォーキングサプリ此岸にまだ未練
楔打つ場所を違えてばかりいる

西出楓楽

税金の種類がふえて近代化
近代化漢字が憶えやすくなり
デパートでメダカ売り出す近代化
名月へ孫と行くのが近代化
お白洲をテレビ中継近代化

仁部四郎

昏れるのに少し間がある葱の花
面目がつぶれ月夜の道をゆく
花散りぬ極みの風を身に受けて
無言電話別れ話が出て来ない
日が燦々笑う羅漢に泣く羅漢

波多野五楽庵

森羅万象頼るは自分だけと識る
能弁の友と旅して鳩となる
雑学のパワー育む森の精
玉の汗流す素敵な夏帽子
ひらめきの弱音は吐かぬ鬼を抱く

林瑞枝

今も日本脱出したいが金がいり
整形外科に現役終えた戦士たち
金融資本汗かく者はよう貯めぬ
医者代にポイントつけてくれんかな
癌夫婦真実黒い夜の闇

早川清生

穏やかに迎えてくれる紀州富士
ガキ大将見舞えば昔転げ出す
もう一度太郎に逢いにくいだおれ
育ての母見送りやっと母と呼ぶ
しみじみと健康思う歳になり

前たもつ

別腹をいくつも持って少女羽化
天辺に上り心を見失う
一病とたたかいまーるくなって来る
さよならを越えて度胸が強くなる
無に還れかえれと椿潔よし

宮西弥生

春風にそっと押されてひとり旅
春風の明暗酷しい桜散る
碧空へ一寸口笛吹いてみる
去る冬を追うすべもなく芽の息吹き
楢山の虹に近づく心練る

森下愛論

恥かかぬようにと妻の火打石
変身のわけは聞くまい酒を注ぐ
老い集いみんな食後の薬出す
苦手だな体面飾る標準語
セールスの努力が光る注文書

八十田　洞庵

入札の皿に談合盛ってある
淋しい日土鈴の温み買いに行く
妻の手に帰る行き場のない僕よ
思い出の一つ一つに火を放つ
心地よい風だ癌ではないと言う

両川　洋々

温暖化とハウスで旬のない野菜
ストレスとは別腹ムシャムシャよく食べる
のほほんと暮していても肩が凝る
ベテランと煽て口出しさせぬ椅子
考えが甘いと妻に突込まれ

阿萬　萬的

太陽を盗んで逢いに来たのです
恋をして処刑されそな白い風
戯れに情死はしない薔薇の棘
置き処わるくて拗ねる白い皿
千年を経て告ぐ源氏物語

板尾　岳人

可憐な花さがす楽しみ路地歩く
娘と孫の悩みそれぞれ聞く破目に
出来ること数えまだまだ大丈夫
ほどほどの幸せでよしかすみ草
風みどり緑まとって風になる

奥田　みつ子

受け流す柳に生きる術を知る
明日生かす今日の無駄骨厭わない
挨拶は人の和保つ潤滑油
妥協して次の打つ手を視野に入れ
練りに練り正攻法と腹に決め

河井　庸佑

歯車が合わず国会空回り
残り物食べてカアさんよく太り
夏旱胡瓜怒ってヘソ曲げる
南風に乗り椰子の実はるばる泳ぎ着く
石地蔵暑さにめげず佇っている

木村　あきら

結婚記念日ふたりで塔を見ています
結婚記念日せめてすき焼きでもするか
長女からの電話に孫の声がある
勝負服には父よ真っ赤なネクタイを
長電話だった胸の問えがおりていた

小島　蘭幸

水無月へ晴れも曇りも雲雀鳴く
物欲が減って不安になるも歳
よく笑うライバル声が掛けられぬ
爪を研ぎ強い女が増えてきた
退院へ感触のいいマイベッド

小西雄々

この黒い土に偽装はありませぬ
少年のままの音だなハーモニカ
鍬を持つ姿賢治に似てきたな
大輪を咲かせてくれたのは根っこ
仲良しが上手寒立馬の親子

斉藤姦

母の日に孫ばあちゃんに花贈る
加齢とか鼻風邪を引く春であり
一坪の庭に糸瓜の棚を吊りました
鶴彬句碑建立の日がまぢか
中国五輪聖火　地震と忙しない

塩満敏

新緑の山ほめながら蕨採り
地鎮祭ヒバリのねぐら取り上げて
水を飲むときには悪事考えぬ
機嫌の悪い日は鏡など見ない
人の名を覚えて忘れ旅続く

新家完司

無口な人へ無口なままのお付き合い
何にもないが自然をたんと召し上がれ
これからが勝負さっきも言うた筈
レンジでチンすると私が蘇る
私にも余分三兄弟がある

川上大輪

だんだんとノルマが甘い万歩計
お目当ては先ず宮城と大鳥居
般若経なぞって無からまだ遠い
もどかしい視力積ん読ふえてくる
ストレスの火種を持ってきた絆

玉置重人

番傘川柳本社８月句会（水府忌）

日　時　**８月６日（水）**18時
会　場　大阪市港区弁天１―２―１
　地下鉄中央線弁天町駅すぐ
　JR環状線弁天町駅すぐ
　ホテル大阪ベイタワー
　☎６５７７―１１１１
お　話　「人間水府」岩井　三窓
宿　題　「焙　　る」吉道航太郎　選
　「全　　然」足立　淑子　選
　「戎　　橋」竹森　雀舎　選
　「ことさら」三宅　保州　選
　「もったいない」森中惠美子　選
ほかに　席題　１題（各題２句）
締　切　１８時５０分
会　費　１０００円

西出楓楽選

父の日は特に変った事も無し
まだ夢を追って生きたい七十五
立ち止まり花見る人はやさしげに
一発芸これで笑えと言われても
定年の友に船出の絵を贈る
あきらめず嘆かず生きるもう少し

西宮市　藤本　直

春雷が連休呆けに喝を入れ
何のその三人乗りの母強し
二ツ三ツ若返ります理髪店
関節も頭の螺子も弛む春
買物は百均店を先ず覗き
支持率の谷間に揺れる主義主張

東京都　井上　つよし

曽孫の不思議は爺の総入歯
同じ穴の狢が餌の喧嘩する
無農薬がこびりついてる山野菜
語り部も引退をする歳になり
連休のない百姓で悔いはない
花冷えか炬燵が一寸だけほしい

美作市　小林　妻子

納屋の戸を燕にそっと開けておく
毒舌の友の弱気が気に掛かる
生命線よろよろ伸ばし生きている
猫ちゃんの仕事御近所一回り
断われば語調の変る電話口
子への夢孫に繋いで駄斗袋

三木市　広瀬　房江

サングラス外せば意外癒し系
老いてなお煩悩だけは達者です
古希過ぎてまだ青年の夢捨てず
この杖は石橋叩くのに便利
まだともう気の持ちようで晴れと雨
混乱の聖火世界を駆け巡る

奈良市　岩本　浩二

さまざまの事消え浮かぶ旅の窓
五月雨に思いを馳せて舟下り
愚直さは昔尊敬されていた
冬の芽に背中押されて一万歩
平穏より悲喜こもごもが良い薬
朝市の笑顔ばあちゃん美しい

大阪市　田浦　實

奈良観光ぽっくり寺に足がむく
柳生の峠一期一会の葛の餅
藤の花みどりの芝生にぎりめし
君が代を曽孫と唄う日向ぼこ
かきつばた今年も亡母の立ち姿
孫とあう薄く口紅引いてゆく

篠山市　谷田　多美子

寝ない孫抱いて悲鳴をあげた腕
川柳が教えてくれた語彙不足
ケーキ屋で医師の言葉と葛藤し
車椅子押せる立場を感謝する
良いところ見つけて暮そ共白髪
この財布諭吉の居心地悪そうだ

羽曳野市　宇都宮　ちづる

その歳になって分かった姑の愚痴
子供のため家をおもってきらわれる
夫につかえ子供夫婦にまた仕え

大阪府　小栢　こずえ

ぼんやりは呆けるとノルマかけて生き
植える場所無いがあれこれ苗を買う
草元気試練のように伸びてくる

吹田市　中村　十八娘

来る来ない一人占い春時雨
五月晴やっと馴染んだランドセル
玄関に元気印の靴跳ねる
競わずに添うて映えてるかすみ草
不器用を皿のプリンが笑ってる
おくれ毛に遊びの好きな風が来る

八尾市　西川　義明

兄弟で黒髪白髪薄い髪
待望の後継ぎ生まれ鯉幟
ただただに普通に育て宮参り
笑い声弾む貧乏苦にならず
ふたくちめ香り楽しむ蓬餅
五月晴れ散歩の足もつい伸びる

奈良市　尾畑　なを江

曖昧な返事がまたも罪つくり
生まれ来てこの世のことは神まかせ
心地良い話になって身構える
生きるとは生かされてると悟ること
少子化で足りないものと余るもの
忘れたいことが次々湧いてくる

奈良市　阿部茶々

桜咲き孫が同窓生になり
ウォーキングとたんに転び手首折り
やおよろずの神で良かったこの日本
英伍氏の余りに若い死を悼む
宇宙ツアー月のうさぎに会いたいな

奈良市　乾　春雄

幾星霜経ても碑の文字生きている
借る方も断る方も嘘づくめ
ブランコに揺れて寿命を考える
未来図をえがく米寿の目が燃える
まだ余力残して独楽は首を振る

奈良市　田中賢治

健保から姥捨山へ背を押され
痛みなど知らぬ議員の二世増え
漆塗り五感磨いて艶を継ぐ
艶の有る観音さんに手を合わせ
府の予算本音と欲の洗い張り

奈良市　矢野良一

欠点があるから人は付き合える
またどうぞやさしいママの手が温い
濃口で甘いだしまき亡母の味
目玉焼黄味は最後のお楽しみ
堰き止めて棚田に初夏の水の音

和歌山市　坂部かずみ

蜜蜂も遊び疲れた五月晴
明日のため老眼鏡でパンを焼く
携帯の三日も鳴らず閑古鳥
携帯に頼るうれしい待ち合せ
流れ行く時の流れに躓いて

和歌山市　田中すず

諭すように諌めるように風厳し
尖ってる心をつつむ桜餅
言いたいこと半分にして流される
実に至るまでの修羅場は避けられず
バランスとして鬼も一匹入れておく

和歌山市　土屋起世子

そら豆が莢の寝床で背くらべ
コンビニの弁当嫌と孫自炊
強がりも言い訳もせぬ老い二人
倖せと思うメタボでない私
小半時鉢の花褒め立ち話

和歌山市　根田よしこ

いい訳を聞いている振り妻の顔
聞きたくもない話だけよく聴こえ
連休は家に居たってくたびれる
セレナード切なく歌う夢の中
とにかくは今日をいっぱい楽しもう

和歌山市　福井菜摘

驕慢が見え隠れする机上論
重ね塗りしたのに過去が浮いてくる
這いあがる勇気を神は見逃さず
どん底の汗がゆっくり開花する
女ごころ小さな嘘にくすぐられ

和歌山市　堀冨美子

聞く耳を鍛えて丸く輪に溶ける
ちっぽけなプライド一歩踏み出せぬ
旗色をみる目日増しにたけて来る
ぞんざいな言葉が温い友がいる
新緑に生きる指針を示される

紀の川市　吉村幸

高原に立てばハイジの声がする
高原のキャベツに僕の灰汁流す
私彩に染める一人の昼下り
なるほどと一つ覚えて辞書撫でる
嬉しい日思わず弾む募金箱

海南市　小谷小雪

毎日を母の日にして介護する
大海へ誘う風に帆を上げて
諸事情でもて余してる五月晴れ
ヨン様もお元気ですかおぼろ月
ほどほどの上目遣いで風を読む

紀の川市　宇野幹子

親の敷くレールはみ出た子の電車
主義主張通した後のにわか雨
さよならが辛いと愚図る小糠雨
一円を拾うにしてもいる勇気
本心が漏れないように蓋をする

紀の川市　北山絹子

フライパンだけに頼っているレシピ
一粒の種に発芽の意地がある
医者の門叩いた母の不養生
今時の男の眉が細すぎる
前向きに生きて行こうと決意する

紀の川市　木村徑子

スマイルの火種母さんからもらう
時はマジック胸の痛みが消えている
ファッションへ目眩している井の蛙
天寿全うするまで走る一輪車
頬杖のわたしをみてる砂時計

紀の川市　辻内次根

影付けた途端に活きる人の顔
老いていく私に欲しい理由付け
自分とも時々起こす仲違い
パソコンの横で万年筆乾く
褒められたことがあるから回り道

田辺市　大峠可動

愚かさを問うて五体と妥協する
前向きに走って老いて捨てられる
改革も破壊も民の声を無視
花ひらき花散り友の訃報かな
格言をヒントに打算捨てて来た

和歌山県　森下よりこ

飛行機の旅雲海を掻き分けて
もうこんな季節を刻む鬼あざみ
春闌ける風がけだるいチューリップ
気晴らしにおいしいものを食べに行く
損したとは思わぬ安心料だった

鳥取市　近藤秋星

母の日に比べ父の日影薄い
世が世なら俺も一旗挙げたのに
森林浴森の呼吸が聞こえそう
老夫婦だけの田植えの世を嘆く
風薫る五月満喫して置こう

鳥取市　津村律子

異常気象に仕舞った火燵出して来る
ここち良い風に耕す老夫婦
ギャロギャロと生演奏で急かされる
広すぎる空めでたく村に鯉幟
惚けるなよおっちょこちょいは笑うだけ

鳥取市　松岡照美

庭の蟻汗もかかずによく動く
もう少し地に足着かせ頑張ろう
はやる医者袋一杯下げ帰る
メモしたはずがメモがない夢の中
ゴム付ベルト加減する食事時

鳥取市　山岡紀子

わたくしにハッパをかけて生きている
悪い所遺伝のせいにしてしまう
本当の事は知らないふりをする
もうけ話に縁のないまま生きている
ライバルの後でゆっくりくじを引く

倉吉市　酒井芙美子

スーパーで安くなるまで粘ってる
背比べ柱の傷がなつかしい
ザワザワと憲法論が騒がしい
食って寝てテレビ見ている至福時
見るだけで買わずにしまうブランド品

境港市　遠藤那珂子

素ッピンで今日一日はゆっくりと
ブランドの種だカラスに取られまい
こっそりと母が私にくれた愛
非難浴び目線変えたら生きられた
うなぎ大好きメタボなんか気にしない

春眠の老いが幼い夢を見る
途中下車見知らぬ街の花に酔う
春に咲き伸びて夏風受ける藤
幸不幸基準がなくて個人の差
飲む酒と心通わす独り酒

境港市　中井虎尾

種蒔いた覚えはないが咲いた花
種蒔いて間引かれる苗育つ苗
鯉のぼり見上げて金魚ひとりごと
正直の心をゆずる子に孫に
鬼太郎がすっくと立って町おこし

米子市　猪森スミエ

同窓会校歌を歌う八十歳
食欲が無いと手抜きの品並ぶ
欲張った趣味に前脳めまいする
深呼吸三回しての血圧計
北京用水着に泳ぎ期待する

米子市　小塩智加恵

はてさてなメタボに好かれ難儀だな
返済を迫ればずるい涙見せ
子沢山下になるほどずるくなる
からむ糸上手に孫が解いていく
嫁いだ娘は手土産下げて客で来る

米子市　見山温子

おだやかな挨拶かわす花の道
忘れたい事忘れてるいい日和
居眠りの金魚をじっと見続ける
ゆさゆさと豊満過ぎるアジサイよ
もう岸が見えて来たので急がない

米子市　吉田陽子

面の皮厚くなっても気付かない
カーテンを少し揺らして春の風
笑い声揺れて仲間も若返る
久しぶり友にもやはり老いを見る
温めて帰り待ってるおでん鍋

鳥取県　飯野菖子

巻き戻し出来ぬ柱の古時計
誤字脱字赤線ふえて恥をかく
芽吹くのが少し遅れて間引かれる
空箱も欲と未練で捨てられず
バイキング此処ぞとばかり食いあさる

鳥取県　大塚美代子

森林浴させてくれない杉花粉
ライバルが意欲とろとろ燃えさせる
美しく老いるすべとは辞書を友
障害児労わるクラス美しい
がやがやと袋のくすりたちの自負

鳥取県　岡本幸枝

右拳上げておろさぬ父の愛
困ったらずるい考え顔を出す
月もよい昇る地球はなおきれい
はっとする真っ赤な月が山に浮く
早とちり無駄骨ばかり折っている

鳥取県　岡村孝明

ウォーキング出鼻をくじく朝の雨
母の日に孫の笑顔が贈られる
借り物の言葉で自分励まして
プラス思考自分に甘いだけのよう
街角にエコのチラシが風に舞う

鳥取県　斉尾くにこ

ポイントを貯めたいばかりに無駄遣い
春祭り獅子舞連も少子化で
後期高齢者医療制度の乱攻勢
老いてなお天気情報気にかかる
花香る伝える思い推し量る

鳥取県　田口清帆

優しさになびく心に風が吹く
生まれ変わってまたこの場所に集まろう
どうせ行くならデコボコの道を行く
半分に分けて相手に選ばせる
明らかに影が重なる君と僕

松江市　相見柳歩

新緑に元気をもらう一人旅
人生は生きてることがラララララ
母の日にしびれをきらす前　届き
句が浮かぶまでの時間で往復し
痩せたいが痩せるときっと心配し

松江市　松浦登志子

年重ね人間だんだん好きになる
努力してやっと築いたマイホーム
春霞みどりの森の鼓動聞く
梵鐘の心に染みる朝の風
立話夕餉の支度心急く

出雲市　川島和歌子

百歳を生きて猫背のやさしさよ
気まずさへ孫が入って場が和み
青い空風と浮気をしています
満ち足りた顔で咲いてるチューリップ
途中からどなたですかと言えもせず

雲南市　菅田かつ子

私の大事業です日記かく
家計簿が泣いております議員さま
戦争の話相手が居なくなり
誕生日よくぞここまで生きました
自分史は五七五で花をそえ

雲南市　福間博利

リーダーをおいてけぼりにした雀
幸せをどこまでとする蟻の道
散歩道今日もやさしい風が吹く
崖っぷち立った二人の手が温い
よき日本昭和生れはよく語り

雲南市　渡部好榮

親展と書いた封書にある重み
私の枠を出費に揺さぶられ
使い道次第で金は惜しまない
お隣りの声が聞こえて安堵する
置き薬断り切れず積んでおく

雲南市　武島ちよえ

今が旬年を取るのはおもしろい
ケセラセラあしたの事は明日聞く
悔いなんて無いッと言えば少し嘘
誕生日孫にお祝い貰う齢
五月晴れ暗い話は似合わない

府中市　藤岡ヒデコ

反論の意思表示する咳一ツ
風向きを問わぬ男の広い肩
お喋りが終ってからが忙しい
出しゃばって視線の縄にしばられる
流行を追えば個性が置いてかれ

宇部市　高山清子

十人十色持ち味あってみんな良し
伸びやかな人柄にじむ筆遣い
控え目に生きて支えて来た誇り
神様に届く奇蹟を待っている
生かされる命信心怠らず

阿波市　三浦千津子

余白には心を映す鏡あり
迷いなど微塵も見えぬ墨絵松
神の気配が余白の中に湧いてくる
人間の知恵では出せぬ墨の色
灯を消してよりひそやかに雪の声

今治市　渡邊伊津志

肩書きを外せば楽になるだろう
代読をうんざり聞いて式終る
無為無職生きるテーマが見えて来ぬ
名水の里に電車もバスもない
隠し玉投げるチャンスは一度きり

大洲市　花岡順子

夏祭り神がビールを所望する
神様をダシにしてとは罰当たり
酒飲みの烙印消えぬまま老いる
酒付きの誘いは総てお受けする
酒という魔もの虜囚の辱め

香南市　桑名孝雄

香南市　近森　功

こぼす愚痴笑顔で拾う嫁があり
まだ翔べる羽を繕う白髪染め
余り物もったいないと妻の箸
割勘の女美事な箸さばき
何時からが余生か後期高齢者

北九州市　岡田幸生

薫風がわたしを旅に誘いだす
なるほどと父が腕組む子の異論
休肝日父の背中が寂しいね
私学の子二人に脛が音を上げる
引き止めておけばよかった雨の音

福岡県　林　さだき

聞き役にまわる私の処世術
新しい視野が夜明けに訪れる
約款の細かい文字を読み忘れ
愛犬も好き嫌いある散歩道
度が過ぎるＮＨＫのコマーシャル

唐津市　岩崎　實

つながりを大事にちょっと声をかけ
だんどりをたてて起き出す畑仕事
それなりのものをもってる人に寄る
疲れてる言葉がとげを含んでる
最高の治療をせよと息子から

唐津市　北村松風

喜寿祝い教育勅語暗誦す
変わらない笑顔の亡母がいる仏間
投票はせぬが笑顔で握手する
みえみえの嘘をすまして言う度胸
釣竿は飾りか呑んで昼寝中

札幌市　小沢　淳

遠まわしだけど急所を突いている
騙されて騙し世間に溶けていく
運だけは待ってくれない逃げて行く
オブラート包めば嘘も通りよく
手を出せず眺めているも辛いこと

札幌市　三浦強一

足並は妻に合わせる老いの坂
リハビリで妻と初めて手をつなぐ
年金日髭剃って行くマイバンク
真面目よりちょい悪なのがもてている
エリートじゃないが負けない人間味

青森県　松山芳生

吹雪く日は北の余韻と語り合う
ライバルが出来たわたしが発芽する
ひとり居の私語がこびつく皿洗う
新顔に教えてあげる津軽弁
七色の口紅引いて生き延びる

から揚げがゆうべの顔で弁当に
日曜日すし屋の出前妻の留守
踊り子草へっぴり腰の安来節
我慢出来るところまで聞く妻の愚痴
井戸端に裁判員の居る日本

取出市　葛西　清

頑なに大地に父の無農薬
帰省子の視野を労るそばの花
五時から男ストレス吐くのれん
お日様と土に賢治の歌がある
脱線が好きな教師に出る人気

日立市　加藤　権悟

水枯れて廃村が浮くダムの底
贅沢を戻す力はすでになし
出直しの足が都会へ向いている
弾丸のような言葉に目が醒める
この愛を冷凍保存しておこう

栃木県　岡野　すみれ

民宿の風呂も料理もお気に入り
戦争の弾をくぐった人も減り
一生を汗で築いた今の地位
年寄りに金が頼りとなる時代
情熱があるから明治若く見え

草加市　飯土井　健翁

値上がりの波に年金削られる
年金と医療で首を締める国
帰るたび小さくなった母は百
機嫌よい妻は眉毛を丸く引き
ライバルも定年やっと握手する

昭島市　野口　忠

御家芸相撲柔道どこへ行く
相互扶助口で言うのはたやすいが
ふんばって一升餅を背負う孫
娘も母も私も貰う赤い花
八十五きれいですねに嬉しそう

横浜市　巌田　かず枝

漕ぐ舟の行く手遮る年の波
目に映る里の山波春霞
花手折る暗いニュースの淋しい日
やさしい孫の嫁に行く日が近くなる
散る桜雨の舗道に花の地図

藤沢市　加藤　スズコ

米作る汗を忘れて米を買う
買って食う米は忽ち底が見え
アカサタナから言い出して電子辞書
政治家も天気も狂って来た五月
金と命どちらが先に失くなるか

佐渡市　髙野　不二

定年後ねじれ現象出たわが家
敵の敵だから味方と限らない
森を出たヒト科躓くこと多し
乱雑な机は僕の小宇宙
強運の顔が並んだくじ売場

岐阜市　平野　あずま

パリの春はさぞやと鉢のライラック
老人をいじめる国に未来なし
うぐいすの歌上手くなり春は逝く
熱すぎる愛国心に鼻白む
古寺巡る緑雨緑風柔らかく

京都市　清水　英旺

勧められ盛りつけすぎた欲の皿
行き先はサイフ中身で決まる旅
助言したがばかりに遠くなった友
うんうんと頷く母に好事だけ
散り際良き桜にも似て兄は逝く

京都市　藤井　文代

目の覚める美人がドスの効いた声
美男子のレジで所持金不足する
惜しむとは昔の心と書きますね
ガソリンで庶民のストレス燃え上る
根付って今で言うたらストラップ

大阪市　安藤　なつこ

蚊と蜂があっと言うまに湧いて出る
朝ごはん目刺があれば最高や
結局はおんぶに抱っこ嫁がせる
よくもったアナログテレビ十四年
基地よりも後期に回せ思いやり

大阪市　江島谷　勝弘

喜寿傘寿米寿川柳離れない
実直な男にあった隠し芸
黄と赤が好きなわたしの絵具皿
孫に似ていた席を譲ってくれた子よ
帝大出東大出との違いかな

大阪市　尾崎　黄紅

独り居て家族を思う昼下り
友が来て悩み半分分けてやる
それぞれに思いがあって歩く道
枠をはめ世間切り取るいやな癖
欅道緑のシャワー心地よい

大阪市　坂　裕之

お土産も旅の楽しみ店めぐり
篤姫の江戸へ旅立ちもらい泣き
診察券身分証明してくれる
体力も気力も落ちて歩み寄る
地価公示狭い我家を試算する

大阪市　澤田　定子

体重計そっと乗ってるメタボパパ
内部告発企業の倫理問いかける
新しい恋でうすれた古い傷
ときめきの心失くして老いてゆき
餌禁止お池の鯉もメタボ気味

大阪市　寺井弘子

バスに乗れ別れが辛くなる前に
別れ来て街の灯影が目に染みる
待たされて時計の針の遅いこと
嫁ぐ娘に料理ノートの助け船
いくたびも修羅場くぐった深い皺

大阪市　萩原大朔

矢印を信じ迷路へ入り込む
生きていて良かったひとつ今日の虹
自分だけいい子ぶりして苦いお茶
自分なら出来たろうかと胸に問う
いい顔をしすぎて自分見失う

大阪市　原田すみ子

子供には躾しないで犬にする
ゆとりある服着てメタボ気にならず
やることがまだまだあって種を蒔く
人並みに幸せならばもうけもん
飽食の付けがいつかはくる怖さ

大阪市　山本加お里

豆飯の色に引かれて椀重ね
しあわせを育てる如く花咲かす
戸車の不機嫌つづく走り梅雨
懸命に生きた証の父の靴
つめを研ぐしぐさを子猫もうおぼえ

大阪市　吉田富美

何もかも水に流して風みどり
夏立ちぬ野心そろりと動き出す
自給率どこ吹く風のグルメ旅
ケータイを操る指の握り箸
テーブルマナーちっとも食べた気がしない

池田市　上嶋幸雀

したたかなおしん見習う外国人
猫の手を借りる奥の手あるやんか
山登り標高百とあるところ
楽しみは明日がくれると髪洗う
医者の言うよい睡眠は取れぬ日々

池田市　多田契子

かわいそうそれは国民です総理
孫と祖母値上げしないで紙オムツ
ただいまと花びら連れてランドセル
低気圧覚悟で帰る午前様
ヘルパー来る週一回の笑顔の日

泉大津市　助川和美

泉佐野市　稲葉　洋

四月から高齢向けのネタ頻り
それならばとことん後期続けたろ
乾杯を生きてる僕に捧げよう
菜種梅雨筍梅雨と歌ごころ
ブレーキが効かぬよ老化へのドミノ

泉佐野市　備後　三代子

落椿掌に受け亡夫を恋う
リハビリのおかげわたしも一歩二歩
酢の効いた大根おろしの一人膳
食すすむお多福豆のうすみどり
ベビーカー降りて押す児のしたり顔

茨木市　島田　誠一

のせられて後で気の付くお人好し
子も犬も躾早めと聞いたはず
上役のコピーで部下にする説諭
コピー機に写経の心分からない
胃を忘れあれもこれもとバイキング

門真市　矢阪　英雄

鮎はいま苔をむさぼる石の下
沈黙し夏待つ鮎の群れと群れ
苔を食べ香りたくわえ向かう夏
料理技京の野菜がフレンチに
魯山人いただきますよ鮎の香を

河内長野市　木太久　正一

エステしたように新緑燃えている
愛車捨てタクシー利用憂いなし
徳山村村ごと移転ムダなダム
今年また庭のスズラン増えつづけ
診察は暦通りと看護師さん

河内長野市　黒岩　靖博

忙しく座る暇ない主婦の椅子
鈍感でストレスなんて感じない
来年の約束なんか出来かねる
喧嘩して冷めたスープで食事する
誘惑に負けて今夜もはしご酒

河内長野市　針生　和代

夕焼けに今日のいのちを噛みしめる
飛行雲ひとすじ平和噛みしめる
糠床を守りエステに遠く居る
地産地消夕餉の膳と万歩計
少年に譲られた席温かい

堺市　大久保　伸子

忘れたらあかん空気のありがた味
聞きながしまあるく生きる年となる
足向けて寝られぬなんて口先で
歌謡曲身につまされる恋である
お世辞ではないとお世辞を積み上げる

ふと思う孫が頼りになる齢
目の手術して驚いている鏡
生きてきた証織り成す顔の皺
よく聞けば自慢話が寄るゴルフ
老農の親睦畦で盛り上り

堺市　荻野　像山

飲み込んだ一言腹であばれだし
名水を飲んで細胞浄められ
バリウムを飲んで遊泳させられる
主婦のわざ野菜の命使い切り
主婦の友時代の波にさらわれる

堺市　近藤　治子

納得のいかぬ判子は横向きに
笑顔には笑顔で返す散歩道
返す言葉いつもおんなじ老いふたり
花植える土地の代わりに土を買う
遊んでる金と長らく会ってない

堺市　羽田野　洋介

ポーカーフェイス横目で見てはカード抜く
顔見知り目礼だけで通り過ぎ
長年の心が刻む顔かたち
私のＤＮＡを子が見せる
句読点どこかで打って自己主張

吹田市　藏田　光子

聞かれるが決めているのはいつも妻
ケータイにあれもこれもと妻の指示
六月はそうとうつとの交差点
さりげない粋なジョークにお人柄
病気とは思わない僕メタボ症

吹田市　早泉　早人

のほほんの暮らしに呆けが寄ってくる
伸ばす羽根持ってる妻に嫉妬する
紳士でしょと言われ思案の手の置き場
老いたのを忘れて生きる老いの知恵
紅一点とはいうもののご年輩

高槻市　片山　かずお

美女四人旅の計画いろはにほ
花柄の浴衣にはしゃぐ美女四人
お餅つき少女になった旅の宿
もう既に歴史になった昭和の日
突然に俺と言い出す三歳児

高槻市　安田　忠子

年重ね秋より春が好きになる
桜餅花冷えの中買いにゆく
周りみな年下となり桜舞う
春まだき母の訃報の電話鳴る
あやまちの一つ二つや三つ四つ

豊中市　荒巻　夢

絞るだけ絞って年金やせ細る
冷血の官僚ばかり出世する
せめてもの六甲おろしうさ晴し
ガソリンで値下げ値上げの火遊びか
窮屈なズボンがメタボと騒ぎ立て

豊中市　源田啓生

雑草は少し見ぬ間によく伸びる
残そうか抜こうか迷う母子草
よく見るとなずなはこべらほとけのざ
どの草も精一杯に生きている
掛け声に助けてもらう登り坂

豊中市　松尾美智代

老夫婦一つの席をゆずり合い
あの人と会うと緊張愛だろう
同期の桜歌うと浮かぶ知覧の碑
地図にない道自己流に生きている
趣味の数増えて歳など忘れてる

寝屋川市　岡本勲

次々と災害続く地球号
動機なき無差別殺人心冷え
物価高買い控えにて対抗し
桜散り藤も終って花水木
柳友逝きて残された句を胸に秘め

寝屋川市　小嶋みさと

市場かご今ファッションのエコバッグ
飽食で雑穀米を食べている
握手してハグした孫がもう帰る
ジョギングは今日で止めますサロンパス
百均で片付けられた台所

寝屋川市　森田麗

くいだおれミナミの顔がまた消える
火種中北京五輪できるかな
顔パスで飲める居酒屋ひとつある
卵好きコレステロール気にかかる
メタボだよ言われて急にやせられぬ

羽曳野市　仲谷真一

春うらら太子の里を歩こうか
此の春もおかしな事件ばかりある
葉桜のトンネル抜けてショッピング
上手な字下敷にして書く習字
厚焼の卵は母の味でした

羽曳野市　松本静子

長生きに備え倹約欠かせない
手が荒れる家事を憶えた定年後
若武者が自信を掴むお立ち台
フラッシュの数がゴシップ追い掛ける
マジシャンのネタに仕掛けるめしの種

羽曳野市　森下一知

枚方市　小川良吉

喜寿過ぎて健保の加重気が重い
つらいこと忘れるうちは生きられる
ゆけるうち中学の孫誘う旅
囲炉裏火で老婆がかたる旅の宿
旅先で市場の活気里ごころ

枚方市　小林わこ

火を付けてあなたはずるい風ですね
とんでもない話を風がプレゼント
向かい風素直に受ける年になり
露天風呂に祭り太鼓を運ぶ風
素晴らしい出会いでしたね祭りの夜

枚方市　二宮紫鳳

病む夫に元気をくれた孫パワー
新緑のシャワーを浴びてツーリング
幸せは両手に孫とショッピング
五月晴れ孫と合作柏餅
新緑にパワーもらって癒し旅

藤井寺市　伊藤アヤ子

自家製のイチゴ母さんに供える
あれこれと夢を詰め込む旅支度
書道展和服姿が良く似合い
老い二人生きてる意味を考える
年金の骨の髄までしぼられる

藤井寺市　増井ヨシ枝

強面の人がかわいい犬を連れ
ふる里のせせらぎ今は音もなく
気がつけば笑い袋に紐がない
花筏風漕ぎ堀の水うごく
後期高齢障害者にも死ねと言う

藤井寺市　俣野登志子

茶道華道わたしのどこかで生きている
食卓でノート広げる投句前
美食家の行き着く先にメタボあり
のら猫と鉢合わせする勝手口
五月晴れ今日もお出掛け家事溜めて

藤井寺市　吉田喜代子

開け放し五月の風と会話する
くじ運は欲深すぎて外される
我が足で退院したと弾む声
満足げに魚拓を終えた太い指
限り有るを尽し合ってる老い二人

箕面市　寺井柳童

あと僅かメタボの仲間入りしそう
花より団子梅林素通りし
雪囲い取り去る松に黄砂降る
見張り役立ててカラスがゴミの番
花冷えに伸ばした背筋また縮む

八尾市　赤木妙子

天引きの残りで生きる灯をともす
守るものがあって女は美しい
不況の煽り小銭で済ますお献立
空の巣で猫が添い寝をしてくれる
八方美人空気を読んでする揉み手

八尾市　笹倉ひろし

温泉にどっぷり浸かり命ろ過
古希過ぎて末は地獄か極楽か
思いやり要らぬと削る若い知事
百均のノートも文字は崩れない
温暖化四季の区別も狂わせる

八尾市　田邊浩三

結び目が絡んで解けぬ知恵袋
春霞花粉と黄砂仲間入り
車庫の中積まれた箱にマルサの目
寝る真似がうまい優先座席の娘
霞かな杉花粉かな黄砂かな

八尾市　寺川はじむ

ピカピカの四月諭吉がよく跳ねる
喉元を過ぎて忘れる人の恩
東にし妻のお供で行く花見
また会おうなんて調子のいい話
明日光るように今から子を磨く

八尾市　中島春江

赤子泣く家高だかと鯉幟
鯉の居ぬ川面におよぐ鯉のぼり
老いたとて小さなおしゃれ春日傘
しゃぼん玉見えぬ風見せふわふわと
餌をもらうにも生存競争燕の子

八尾市　前田紀雄

検査前年に一度の休肝日
近頃は鏡の中に父を見る
あっさりと謝る事も護身術
金よりも脂肪が絡む歳になり
情けない儲ければ良い勝てば良い

八尾市　松葉君江

豊かさの陰で失う思いやり
物価高年金杖に知恵絞る
豊かさに馴れて命を軽く見る
百歳のパワー我が家の生き字引
老いてなお心に花の種を蒔く

八尾市　脇　俊子

ポケットに入り切れない欲の種子
旅の後心休まる家の椅子
大欠伸気合を入れる老いふたり
悩み事まるめて投げる勇気なし
終止符を打つ前だから揺れている

出演者同士でふざけあうテレビ
中味ない言葉で国が動かされ
夕焼けがドラマチックにするデート
とりあえず浮いて凌いでいる波間
目と口がそれぞれ違うことを言い

大阪府　神野千恵子

雁首を揃え車内でメール打つ
オブラートに包めば本音届かない
明日がある明日こそはで黄昏れる
稜線をさらりと梳いた風届く
昨日よりちょっと弾んだ若葉風

大阪府　高木道子

新緑のお山ふくれて押し迫る
水平線越えていか釣り船あかり
幸せも噛みしめている花弁当
苗が酔うほどに発酵エコ肥料
砂丘すべり梨の新緑眼裏に

大阪府　西川冷子

芝桜気のむくままに庭飾る
田植え終え元気ほめ合う老い二人
竹の子と背くらべする孫破顔
空元気老いの自分を置き忘れ
連休の渋滞笑うトラクター

大阪府　畑中節子

尻に火が付かぬとやらぬことが増え
弁当を買って我が家でミニ花見
うちに来る野鳥大事なお客さま
留守番を頼まれテレビの番もする
ぼけ防止しっかり頭マッサージ

神戸市　木村忠義

気付かないふりをするのも思いやり
妻の嘘にわたしも嘘で応じてる
下心見透かされそう目が泳ぐ
恋かしらえくぼの余韻覚めやらず
うっかりと万愚節に妻を褒め

神戸市　山崎武彦

ふらふらと覗くヘボ碁に刻とられ
強がった背を夕日がなだめてる
血を分けて友となった蚊叩けない
映画後も主役のままでいる私
どうせなら流れを変える捨て石に

明石市　糀谷和郎

音立てず地球を回す神がいる
ざわわざわわ風の足音聞いている
酔うてても上手にはずす鮎の骨
寺の亀鐘と読経で起こされる
スイートピー蝶が縺れるように咲く

尼崎市　加川靖鬼

苦にしない陽気な所作の彼が好き
緑の櫛心まで梳くハイキング
つむじまで二つ揃ったへそ曲り
へそ曲り同士が揃い馬が合い
眉ひそめきき耳立てたスキャンダル

尼崎市　河津正治

チューリップ入学児見て綻びる
翔ぶ花粉卯月迎えるファンファーレ
大空を飛びたく歌う千の風
模索して個性を伸ばす趣味の会
君が代に姿勢を正す戦中派

尼崎市　桑原東園

我と見栄を下げりゃ人生楽になる
亡き母へ募る思いのカーネーション
自給率低い日本に赤信号
閉店で太郎人気のくいだおれ
思い込みひと桁値札見間違え

尼崎市　小池幸子

クラシック誘われ昼寝して帰る
誘われてついて行ったら払わされ
約束事あれば早起き出来るもの
無防備の受話器思わず騙される
まな板の鯉ににらまれ深呼吸

尼崎市　藤岡りこ

短冊に家内安全星まつり
善人の仮面はずして自然体
透きとおるたまねぎの白初夏の色
成り行きに任せることも時に良し
はなみずき大空むかい大あくび

西宮市　石野照代

ガソリンへ高い安いと出る話題
菓子博の入場待ちの人の列
一応の覚悟吹き飛ぶ人の波
キオスクに菓子博なみのみやげもの
イモヅルも雨を待ってた活気づく

加東市　黒崎美紗子

外出着初夏という語に惑わされ
定年の後にもあった五月病
権利証がだんだん軽くなってきた
自画像のように亡父の顔になり
放鳥で自由謳歌のコウノトリ

三田市　阪本藤朗

汗かいてこれが命の涙かも
伝言メモ増えて女房は今日も留守
子が巣立ち小犬が繋ぐ夫婦綱
マニフェスト選挙日までの飾り物
カウベルと牛の声聴くスイスの地

宝塚市　丸山孔一

保険証変り血圧高くなり
後期から末期高齢嗚呼寿命
料理見て頭をよぎる回しかな
中流の自負がゆらいで知る格差

横浜市　金森徳三

深呼吸してますストレス吐いてます
初節句末は大臣かもしれぬ
左手と右手器用に使い分け
軽快なリズムで今日を生きていく

横浜市　川島良子

作業帽とれば美人の女とは
知らなかった事ばっかりの八十歳
友が来てイコジ ガンコと夫のぐち
つくしんぼつみて見舞のみやげ出来

静岡市　渡辺芳子

後期高齢家も車も犬猫も
忘れたらいったん戻る元の位置
給食費払わぬ人も市民です
バストでは負けてるけれどヒップでは

大阪市　太田としお

少し強引な背中を信じよう
正確な地図を無くした濡れ落葉
美しい人美しく気ままに言う
今日もまた往生際の悪い酒

大阪市　尾崎ゆめ

朝顔の種買ってみるなんとなく
西瓜の紅もう店先を飾ってる
急逝の訃報大正また終る
この日だけメロスも休み桜桃忌

大阪市　田中滋郎

ゴミの日はカラス集りお喋りを
探し物欲しい時には隠れてる
連休で一息入れる新社員
人の事容赦もしない長話

大阪市　橋村容子

管理職管理されてて出ぬ手当
護衛つき聖火は走る意味がない
安いのもあると薬局言うてます
道路より大事な生命忘れとる

大阪市　平井露芳

タンポポも綿実まあるく風を待つ
五月晴れそっと蛙が鳴いて出る
肉親に尽くした父をみて育つ
物寂し使い回しを食べさされ

大阪市　吉内タカ子

寝袋で夢の夜空に流れ星
ひまわりに暑いですネと夕立が
冷や奴喉ごしやっぱり熱燗で
夏祭り夜空に咲いた遠花火

大阪市　吉川弘泰

河内長野市　内海綾乃

早朝よりウグイスの声を床の中
玄関にところせましと芝桜
淋しいな生家の周りたんぽなし
肉じゃがは牛か豚かともめてます

岸和田市　中岡香代

読み終える頃に成りきる主人公
一日を過ごす栄養だけで良い
格安の国産野菜疑われ
借金に拝んで後は舌を出す

岸和田市　米富淳風

濃い味が好きで女房困らせる
旅ツアー若者がいるうれしさよ
捨てられず空いたお部屋がまた詰まり
時は夢時は残酷誰にでも

吹田市　二宮栄子

里帰り亡母と潮騒聞いて寝る
思い出に母と歌った童歌
手弁当にこにこ顔の亡夫が居る
老いの足思い通りに歩けない

高槻市　笠原乃りこ

ロボットに墨書の辞表叩き付け
スワ四人目産科で恥をかくメタボ
ガソリン店しぶしぶ値下げ即値上げ
まだ独り布団の下にキノコ生え

枚方市　坂本ミヨノ

資金繰り妻のへそくり安く借り
安売りにあれもこれもと買い過ぎた
葉桜が今年はうまき桜餅
手作り本自慢の川柳和とじする

藤井寺市　津田シルク

杉桧終れば稲科待ちかまえ
蝉の声に溜息が出る朝餉どき
太っちょ体操すれば増々食進み
触れてみて造花らしいが嗅いでみる

大阪府　若月裕作

遊び人スーツの裏に棘をもち
老い二人春の日長を連れ立って
新駅の感きわまってファンファーレ（JR島本　二句）
新駅は楠公父子の別れの地

神戸市　武田恵美子

目にあおば母の世話して暮れてゆく
数多い健康本に迷わされ
点滴がお友達だと母笑う
ふたりとも後期高齢車おす

加西市　金川宣子

菜箸でコロリころりと転がされ
五十年阿吽で歩く老夫婦
家族間無料と聞いて持たされる
着く早々帰る予定を聞いてくる

久々に筆の力量試される
求めるは嫁との絆太かれと
大正生れ国旗揚げよう青い空
腸調整忘れぬための朝の水

加東市　岩本　美緒子

苗植えてよい雨もらい安堵する
この健康何時まで続くふと不安
する事が山ほどあって楽しい日
よもぎ餅母の味には届かない

篠山市　永井　かほる

ピカピカが年金減らすでもうれし
サクラサクああ年金が減ってゆく
週末に孫の顔なく寂しい夜
オブラート包みすぎての介護する

三田市　辻　開子

電線で喋るツバメの外来語
百歳の通夜賑やかに歌も出る
女子ゴルフ顔みてへそみて球をみる
正論に涙を添えて責めて来る

三田市　福田　好文

鯉のぼり今年も元気に泳いでる
五月晴ぼたんの花の全盛期
年金でたのしく暮らす八十路です
山歩き口笛を吹き野鳥呼び

三木市　山口　久子

大志抱く政治家今は一握り
新聞は見出しの文字で読んだ気に
同窓会ロマンを語る友若し
政局は迷路どころか出口ない

奈良市　辻内　げんえい

年寄の遅い動作の真似はせぬ
遅咲きの花を求めて山歩き
生きる欲大事に育て健康に
コピーでも持つ人により格がつく

生駒市　小西　稔

天引きに遇って年金やせて来る
一日に一度は夫婦で笑いたい
考えの視点変えると楽になり
介護する母が菩薩に見える日も

岩出市　村中　悦男

思いやり風化されてくおつき合い
母の口今日もよかったくり返す
語らねば母の旅路も風になる
亡母の風筋を通してやわらかい

鳥取市　大前　安子

独り者料理手抜きの玉子飯
九十坂まだ生きる気の服選ぶ
分からないことわかったような顔で聞く
役所から来る封書にはドキッとし

鳥取市　山口　千代子

筍掘り見つけた孫に伝授する
一本の縫針追って眼が皿に
ケータイで流れるニュース先取りする
野球狂画面だけでは終らない

倉吉市　福光京子

鳥取の顔はきれいな大砂丘
がむしゃらになれぬ子供に覇気がない
風薫る三輪車の子とんと見ず
美しい老後の夢がきびしすぎ

倉吉市　前田喜美子

たより書くランプの明り歌になる
嬉しさは胸のカランを少し開け
相撲取る闘志を秘めて塩を撒く
煮豆には塩ひとつまみ味生きる

鳥取県　岩崎和子

ゆるやかに変化続ける森の風
菜の花の絨毯ヒラリ蝶が舞う
嫁ぐ春一歩一歩が新しい
大樹から芽吹く命をもらってる

鳥取県　坂本智子

純真にもどらせ給う城の花
大画面オバマと握手したような
長身の子等を撫でてはハシャグ藤
葉桜のこころが好きになる歩幅

松江市　柏井日出子

与野党共国民不在の春の陣
水子らに詫び入れもして諷誦寺
高徳は幹　宣長は散るさくら
広過ぎるロシア二頭立て政治

安来市　原煩悩児

草刈りの安眠蛇と亀起こす
まだ序曲真夏の草の伸び放題
自給率守る畦道草刈機
戦中派鎌で草刈る句読点

尾道市　木曽一徳

八十八夜新茶の香り風に乗り
旅土産大風呂敷でドラマあり
初夏の風ひと雨ごとに衣替え
サングラス掛けて茶摘みにリズム付け

府中市　岩本雅代

生きている手ごたえ日々の忙しさ
冴える夜に遠く住む子へ便りかく
あやめの彩どり山河は風さやか
ドレスにも言いわけがある試着室

府中市　馬場利子

亡夫からの遺産はひとつ寡婦控除
前向きに生きる遺伝子くれた親
仲直りせぬまま千の風になる
寄せ植えの花にも恋をする自由

高知市　松尾憲子

高知県　いの　静草

あがいてももう借金のできぬ歳
睨め付ける虫をまだ飼う半端者
エンゲルも驚きそうなわが暮らし
覚悟していたより土佐は強い雨

唐津市　吉冨節子

金欠を妻は笑って受け流す
七癖の二つ位は子が似てる
外来に負けじと稔る麦の秋
無農薬虫食いの葉が証拠です

山鹿市　阿部ミツ子

ほこり咲く椿散り行く春の雨
新聞紙色鮮かなカブト出来
子犬来て我家の春も賑やかに
子犬さま本と首引きどう育つ

シドニー　三谷たん吉

チベットはどうでもよくてリレー行く
ぎょうざとかパンダのあとはピンポンよ
応援がないと燃えぬかスポーツマン
解説の声消してみて腹立たず

お願い

最近の郵便事情により、事務所への郵便の配達が遅れることがあります。事務所への郵便物は、締切日までに余裕を以て発送されるようお願い致します。

川柳塔事務所

温故知新

大阪市　北川春巣

ゴールデンウイーク太陽の光りよう
折詰を貰いステッキ忘れて来

岡山県　本田恵二朗

病気にも間接税がかかっとり
遺産分け憲法だけで割り切れず

西宮市　岩本多久志

春雨じゃぬれて行こうとよい機嫌
すばらしい天気になった月曜日

倉敷市　野田素身郎

捨身もう事の成否は考えず
背かれた人の写真が捨てきれず

大阪市　西田柳宏子

母の日に母忙しく気疲れし
花よりも人の流れを通り抜け

「川柳雑誌」麻生路郎主宰
三五〇号（昭和三十一年七月号）から

愛染帖

新家　完司　選

初孫をロールキャベツのように抱く

（評）ようやく授かった宝物。産着でくるみ、身体でくるみ、心でくるむ。どこからも誰からも、絶対に危害を加えられないように。

黒石市　相馬　一花

わが書いたメモをクイズの様に解く

（評）走り書きの言葉の断片。わずか数時間前のことなのに、はて何のこと？　ボケではないが記憶回路が弱くなっているのは確か。

豊中市　吉田あずき

風切って幸せそうねサイドカー

（評）もちろんオートバイに跨がっているのは男。サイドカーで微笑んでいるのは女。その組み合わせでないと、幸せな絵にならない。

羽曳野市　徳山みつこ

万緑の真っ只中へ救急車

（評）緑あふれる季節。生きとし生けるものすべて溌剌と躍動するときにも、苦しんでいるいのち、消えそうないのちがある。

大阪府　高木　道子

座っても立ってもボクは目立たない

（評）目立ちたがりは寂しがりで、独りになると脆い。目立たない人は芯が強く、独りになっても動ずることなく平然としている。

大阪市　岩崎　公誠

骨折をして年寄りの仲間入り

（評）まだまだ元気！　と思っていたのであるが、骨折をして動きが取れなくなった途端。年寄りの見本のようになってしまった。

高知市　松尾　憲子

雨の午後ブラームスでは重すぎる

（評）ただでさえ心が沈む雨の午後。重たい曲で自殺願望など芽生えたら大変。ワルツかマーチに切り替えて鬱を吹き飛ばそう。

大阪市　森田　明子

日の丸の白地は後期高齢者

（評）真ん中で赤々と輝いているのは若者と壮年。バックで白けているのは高齢者。特に七十五歳以上は、白地の隅でいじけている。

羽曳野市　吉村久仁雄

喪が明けて仏の寝具ゴミに出る

（評）葬式が済んですぐゴミにするのは仏様に失礼。四十九日が済んで、仏様があちらへ行かれたぐらいが丁度いいのではないか。

弘前市　福士　慕情

妹の老いてゆくのを見たくない
水飲んで乾かぬように生きている

香芝市　大内　朝子

空気みたいな人も時には息詰まる
望み通り桜の頃に逝った母
楠が病んでる何が効くのやら

京都市　三宅　満子

喧嘩する度に女房若くなる
人間は贅沢だよとポチが吠え
百までも君は生きると皆が言う

鳥取市　中宇地秀四

ゴム鞠のようなナースに頼り切る
さあお行きと綿毛に息を吹きかける

大阪市　大川　桃花

パソコンで来た母の日のカーネーション
篤姫のテレビを週に三度見る

寝屋川市　冨山ルイ子

北国の春よつららのひとしずく
清濁を思い出してる昭和の日

横浜市　金森　徳三

コンビニのカメラに足取りを残す
あんぱんをほうばりながら余生など

寝屋川市　籠島　恵子

三世代通し柱のおばあちゃん
定年や尺取虫の次の枝

豊中市　谷川　勇治

大好きな嘘だ首を突っ込もう
空気を読んで挨拶だけをして帰る

米子市　政岡日枝子

小国のやけくその策悔れず

堺市　奥　時雄

凛としてその日暮らしを楽しまん　和歌山市　木本　朱夏
羽化を待つ春の兆しを食べながら　枚方市　丹後屋　肇
登山帽炭酸ガスの息を吐く　橿原市　居谷真理子
新聞を引き裂くほどの憂さばらし
今に羽根はえるはえると崖っぷち
国訛り出して舞妓は叱られる　豊中市　水野　黒兎
満場の一致はどこか焦げ臭い
お日さまを絞ったジュース夏香る　和歌山市　古久保和子
早く寝る早く明日が来ますよう
指先の余る軍手で草むしり　奈良市　岩本　浩一
混浴は足湯だったと大笑い
食文化変わって下がる自給率　八王子市　播本　充子
一本勝ちがいい日本人だもの
わいわいガヤガヤ温暖化が進む　唐津市　仁部　四郎
辛抱でシャッター街が救えるか
辛抱を諭して月は満ちてゆく　藤井寺市　高田美代子
ボールペン握ったままで約五分
さまざまな夢を見ました古稀宵広　鳥取市　夏目　一粋

綺麗事だけじゃ便秘は治らない　大和郡山市　坊農　柳弘
球根に芽が出て猫と話してる　吹田市　大谷　篤子
ご近所へはペットの方が顔なじみ　堺　市　羽田野洋介
わっと泣き別れた人ももう他人　和歌山市　根田よしこ
家来から見れば目立ちたがりの殿　大阪市　谷口　義
棺に伏す母のほつれ毛手ぐしさす　豊中市　荒巻　夢
母逝ける赤子のように湯灌受け
お背中も昭和天皇似の陛下　海南市　三宅　保州
ヒロインが遥かに見えたエキストラ
富士見えて新幹線の値を思う　三田市　上垣キヨミ
荷物よりお金が良いと嫁が言う　弘前市　高瀬　霜石
背水の陣に茶漬けは似合わない
長いながい芽の出るまでの物語　八尾市　高杉　千歩
大声で笑っていない五、六年
あちこちに仕残しばかり喉渇く　八尾市　宮崎シマ子
仕残しがこの世にあって旅立てず
狭いお堂に心の広い地蔵様

男と女むかし話になりました　鳥取市　吉田　弘子
豆ご飯ふっくら炊いて妻は留守　京都市　都倉　求芽
だんだんにひなびた町が出来上がり　栃木県　岡野すみれ
老化とは悲しきものよ荒れ野行く　札幌市　三浦　強一
安売りの米十キロを持て余す　米子市　小塩智加恵
店の品毎日チェックだけの客　大阪市　岩崎　玲子
初めてのお泊り保育ママが泣く
便りより声が欲しくて電話する　羽曳野市　酒井　一壺
近所まで来ても家へは寄らないで
掃除するひまもないほど忙しい　東大阪市　笠井　欣子
ときめきもないのに起こる不整脈　枚方市　海老池　洋
寝たきりは困ると使う桑の箸
表題につられて買うた新刊書　池田市　栗田　久子
生きている喜び食べ物が旨い
慰める気ならなんにも言わぬこと　浜松市　岡田　史郎
はりつけの仕草でしのぐ歯の治療
愛読書病院毎に決めてある

四條畷市　吉岡　修
咲いて飲む散ったから飲むいつも飲む

藤井寺市　鈴木いさお
酒の燗だけは妻には任せない

三田市　堀　正和
晩酌でオーバーチャージしてしまい

和歌山市　喜田　准一
志低く悪酔いしています

八尾市　吉村　一風
年寄りにティッシュくれない駅の前

海南市　堂上　泰女
ふわふわの雲に教わる生きる術

西宮市　片山　忠
達筆の手紙へ返しとく電話

箕面市　広島　巴子
冷めた目で株と妻とを見比べる

加東市　中上千代子
マネキンを片っ端から脱がす妻

熊本県　高野　宵草
夏に向け庭木バサッと五分刈りに

神戸市　田中　章子
良いニュース探して今日も元気出す

紀の川市　木村　徑子
連休の中の命日帰りよい

鳥取県　細田　裕花
連休が済んで一息つく故郷

海南市　小谷　小雪
見られなや今の貧しい吾が心

吹田市　穴吹　尚士
今僕が八十路に立って居る不思議

寝屋川市　太田とし子
ゴールには始まりという旗が待つ

池田市　上嶋　幸雀
ガス灯を記憶の底で知っている

大和高田市　鍛原　千里
美しいもの分けてもらっている画廊

尼崎市　春城武庫坊
推敲の果てに旅立つ一行詩

大阪市　古今堂蕉子
飴ひとつ弱気な脳へ放り込む

鳥取市　福西　茶子
どっちの言い分も正しくてけんか

奈良市　矢野　良一
仲なおりしたらどうかと古時計

岸和田市　雪本　珠子
どれほどのもんか自分を知っている

堺　市　村上　玄也
物価高ダイエットには丁度よい

青森県　松山　芳生
長生きで摩擦が続く三世代

京都市　高島　啓子
狼のいたころ秩序あった森

堺　市　矢倉　五月
行くまでに疲れてしまう旅支度

東大阪市　北村　賢子
もう厭と言うて三度の飯を炊く

鳥取市　武田　帆雀
自助努力せずに税金上げてくる

八尾市　中島　春江
新茶淹れ来し方思うひとり膳

高知県　いの　静草
妻よりも先に逝かねば面倒だ

加東市　黒崎美紗子
デイサービス晴れの席です少し紅

唐津市　井上　勝視
副食の多さに馴れぬ戦中派

和歌山市　武本　碧
ワンマンの社長も五月病らしい

唐津市　樋口　輝夫
古稀仲間ホップステップ肉離れ

藤井寺市　太田扶美代
聞き役も笑わせ役もする介護

鳥取市　岸本　宏章
地域間格差地方がまた沈む

松江市　松浦登志子
バイキング氏も育ちも隠せない

癖になり子の赴任地の天気みる　三田市　石原　歳子

波高くなれと歌った海ゆかば　鳥取市　土橋　螢

大海に出たくて鼻を打つ金魚　富田林市　片岡智恵子

朝風呂の妻にジュースをはいどうぞ　堺市　加島　由一

雑草の中に私を見ています　豊中市　松尾美智代

喜寿過ぎて皺がないのも気味悪い　宇部市　平田　実男

沖漬で今夜の酒の相手する　境港市　遠藤那珂子

達筆のノートに惚れて今夫婦　大阪市　萩原　大朔

美しい日本語聞くとほっとする　鳥取県　岩崎　和子

讃美歌が転げ落ちてく坂の町　唐津市　山口　高明

現役を威張る家宝の古い鍋　シドニー　坂上のり子

ぶらさがりの背広の似合う標準派　吹田市　太田　昭

今日からは予定表などない暮らし　八尾市　村上ミツ子

額縁に納まりきれぬ枝伸ばす　大阪市　坂　裕之

お互いに確かめているガス電気　松原市　玉置　重人

月が出た出たと唄って踊ってた　豊中市　安藤寿美子

口ゲンカもうやらないと死んだ振り　亀岡市　井上　森生

交差点の向こう他人めく貴方　大洲市　花岡　順子

いつの間にバス停の椅子消えている　福岡県　林　さだき

立ち読みで昨日の続き読み終える　羽曳野市　吉川　寿美

雨下駄の向きがきれいな女客　松江市　津川　紫晃

向かい風とむき合いながら来た命　美作市　山本　玉恵

レンタル屋重機ごろねという不況　弘前市　相馬　銀波

頼まれて出掛けていける手足持つ　加西市　金川　宣子

野心家は沖へ沖へと舟を漕ぐ　高槻市　佐甲　昭二

五十肩右の役目をせぬ左　鳥取市　倉益　一瑶

メタボから逃れるためにペダル漕ぐ　明石市　糀谷　和郎

美術館目ききの人について行く　西脇市　七反田順子

遺書などは書かぬが日記つけており　唐津市　岩崎　實

引き潮にさらわれたのか友一人　米子市　青戸　田鶴

猫飯を食わなくなったマイペット　神戸市　山口　光久

少し暇花の種蒔き雨を待つ　鳥取市　土橋　睦子

補聴器の音量下げて愚痴を聞く　八尾市　田邊　浩三

腰痛で苦しんでるが足達者　和歌山市　森下よりこ

ひと言に妻の返しは機関銃　大阪市　伏見　雅明

食欲の無くなるニュース聞かされる　芦屋市　黒田　能子

七十四浮かぬ顔した俺がいる　西宮市　藤本　直

一病が暴れぬようにお賽銭　堺市　西村りつえ

バラエティー見てる心配事抱いて　堺市　和田つづや

割り勘でケーキセットの午後である　藤井寺市　鴨谷瑠美子

鉛筆が何度も折れる乱気流　砂川市　大橋　政良

入院の向かいはなんと公益社　大阪市　太田としお

誹風柳多留一一篇研究 35

山口由昭・小栗清吾
伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦
清博美

252 **入むこをあわれと思へ山さくら**

山口 三井寺平等院の僧正、行尊の歌「もろともにあはれとおもへ山桜花よりほかにしる人もなし」の文句取りの句である。この歌は百人一首で有名であるが、川柳になると入り婿の哀れを詠った句に化けてしまう。

ご承知のように入り婿は行動の自由がきかず、とくに仲間が花見や紅葉見物の後吉原に行こうなどと言うときにはいつも仲間に外れ家に帰らなければならない。

角田川是から聟の道ハなし　二六14
むこ壱人り向ふの土手をかへるなり　安九梅1

花見のあとで一人で家に帰る入り婿の身の上を皆が哀れんでいるのである。本歌も「もろともにあわれとおもへ」を裏に利かせて、同行が仲間の大一座であることを暗示している。

全員 賛。

253 **東北を一ト声うなつてはよろけ**

山口 『東北』は別名『軒端梅』と言う謡曲で、和泉式部が植えて愛でた梅にまつわる曲である。「トーボク」と読む。正月三日江戸城恒例の謡初式にも『老松』、『高砂』と共に必ず演じられる三番の一つで、初春にふさわしい曲である。従ってこれを一声唸ってはよろけているのは、年始の振る舞い酒に酔って良い気持ちで居る武士ではなかろうか。正月の街角風景と推測する以上に考える資料を持たない。

東北へだは、のまじる風呂の内　一二9
東北にげいこ三ミせんあわせてる　安七智7

伊吹 賛。余談ながら、和泉式部遺愛の軒端の梅があった法成寺東北院は、以前は御所の東北の地にあり、現在は新京極蛸薬師の地に華嶽山東北寺誠心院としてある。

254 **三味せんハ外事ころり〳〵也**

山口 ほかごと【外事】は、専心・熱中する何か一つ以外の物事。その他のこと。(『日国』)

俗に「転び芸者」という言葉があるが、三味線や踊りなどの芸事は二の次、客と寝ることを第一と考えている芸者のことである。ここでは日本橋橋町のそんな踊り子のことを「ころり〳〵」と形容したのである。

ころぶからそれてはやるとげい仲間　明五宮1
おとり子ハねたりおきたり弐分シメ　明七智3
弐分出スとねん〳〵ころり〳〵なり　安七義2

全員 賛。

255 **雨でも雪でも居つゝけさ〳〵**

山口　どうしようもない御仁である。おおかた大家の道楽息子であろうが、登楼して雨が降ったと言っては居続け、雪が降ったと言っては居続けるのである。理由はとにあれ、「居続け居続け」と座敷で言っているせりふである。勘定の方は大丈夫なのだろうか。

居つゞけのばか〳〵敷もよいてんき　明二桜3

居つゝけハ白たへ様の御客なり　天八12 15

居つゝけのめつたに物をのみこんで　宝10桜2

全員　賛。

256 **判取を小刀たずね〳〵よび**

山口　はんとり【判取】は、大きな呉服店などで、店で売った品物の代金と売上帳を持って帳場へ行き、番頭に判をもらう役（丁稚）（『江戸語の辞典』）。

「判取り」については教養文庫「誹風柳多留二編」に鈴木倉之助氏の明快な解説があるので引用させていただく。

当時の大呉服店（越後屋・大丸など）では、売り場の手代が客から代金の支払いを受けると、半切紙（杉原紙を横に半切にしたもので、手紙を書くに用いる）に売り上げ高を記し、小刀でそれを切り、「判取りー」と丁稚を呼ぶ。すると丁稚は「ア、イー」と長い返事をして代金と売り上げ伝票を帳場へ運び、番頭から判を貰ってくる。これを判取りといった。

主題句はまさに右の情景に相当するもので、客から代金を受け取った手代が置き忘れた小刀を探すと同時に判取りの丁稚を呼んでいるのである。

判ンとりハうり上ゲを切ル時によび　宝13礼1

ごふくやハはん取り斗りよくしれる　天八10 15

はん取りの壱丁かけるはんじやうさ　明八義2

全員　賛。

257 **あれ斗女かと母ちや〳〵を付**

山口　「ちゃちゃを付ける」は「ちゃちゃを入れる」に同じで、「文句を付ける。邪魔をする」（『日国』）の意である。

ある女に夢中になっている息子に対して「あればかりが女ではない」と母親がたしなめているのである。川柳の息子は吉原の遊女に入れあげるのが約束事であるから、これも遊女であろうが、素人の女の場合もあり得る。

あれ斗女かと伯父いきどをり　一八23

有ふれた娘ハむすこ不同心　傍四17

地はなれのした娘むすこ呼気也　傍四23

全員　賛。

258 **衣さへ行に入むこむこい事**

山口　252句と同じようにこれも入り婿哀歌である。一般の人間はもとより僧（衣で表現）までも遊郭に通うのに、入り婿だけが禁止されているのは酷いことである。

不屈な命衣へつゝむなり　傍三1

正洞寺婿ハ門前はらひなり　二〇36

どつとわらハれ渡し場でむこわかれ　一九2

伊吹　賛。僧が禁止されていて、入婿は自粛だと思います。

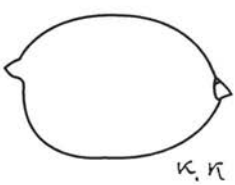
いずれにしても、当時の婿は人権を侵害され、散々な目にあっていたようです。

入りむこと間男迄にあなとられ　安元仁5

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）



「ふらふら」　鈴木公弘選

夜の街ふらふら出来る平和だね　大洲市　中居　善信
良いことがあって飲む酒すぐに酔い　奈良市　岩本　浩二
ふらふらと出歩く春の猫になる　和歌山市　坂部かずみ
宴会のトリはいつものフラダンス　日高市　根岸　方子
ふらふらとなって聖火がたどり着き　鳥取市　中村　金祥
世の中をふらふら渡る一輪車　松江市　三島　淞丘
ふらふらになって隣へ朝帰り　大阪市　太田としお
禁煙の文字を書いたり破ったり　岐阜市　平野あずま
主義主張なくてふらふら揺れる旗　鳥取市　倉益　一瑶
ふらふらと壁を支えにトイレまで　熊本県　岩切　康子
独り居の自分自身を介護する　青森県　松山　芳生
愛憎のはざまで揺れる月見草　弘前市　岡本　花匠
無人駅ふらふらと蚊が寄って来る　東京都　清原　悦子
ぬかるみに足を取られた若作り　八王子市　川名　洋子
ふらふらっとした瞬間が運のつき　倉吉市　野口　節子
ふらふらと貴女まかせの半世紀　神戸市　山口　光久

「ふらふら」　西口いわる選

ふらふらと出れば青葉の真っ盛り　神戸市　山田婦美子
ふらふらと聖火がやっとたどり着く　神戸市　伊勢田　毅
温暖化地球ふらふらなる兆し　札幌市　小沢　淳
ふらふらと食べ残しまで客に出し　羽曳野市　三好　専平
蝶番ひとつ足りない僕の脳　弘前市　高瀬　霜石
ふらふらと現れ風を巻き起こす　芦屋市　黒田　能子
後期高齢言われてからの立ちくらみ　札幌市　三浦　強一
ふらふらと裸にされた印ひとつ　富田林市　片岡智恵子
世の中をふらふら渡る一輪車　松江市　三島　淞丘
千鳥足ちゃんと美人のそばに寄る　橿原市　居谷真理子
百本の薔薇にふらふらした不覚　弘前市　斉藤　劦
擬餌鉤にふらふらと寄る軽い僕　大阪市　岩崎　公誠
覚束かぬ足で裸の孫逃げる　三田市　北野　哲男
ふらふらと口ついて出た嘘一つ　倉吉市　最上　和枝
ふらふらになる日もあって今がある　西宮市　牧渕富喜子
初心者の写経筆先定まらず　日高市　根岸　方子

ペアルックふらふら歩くおぼろ月　松原市　玉置　重人
姥捨山目指しふらふら老いの群れ　大阪府　米澤　俶子
膨らむとふらふらしたくなる財布　枚方市　海老池　洋
追い風にふらふら自分見失う　吹田市　大谷　篤子
ふらふらになっても酒はこぼさない　尼崎市　加川　靖鬼
寅さんを真似る息子を持て余す　横浜市　菊地　政勝
ふらふらと出れば青葉の真っ盛り　神戸市　山田婦美子
あなたなんか嫌いと言ったたちくらみ　京都市　高島　啓子
万歩計つけてふらふら喫茶店　鳥取市　吉田　弘子
桃の里歩き回ったよい疲れ　寝屋川市　森　茜
ふらふらは見せまいグッと水をのむ　出雲市　伊藤　玲子
駐在と馴染みになった認知症　弘前市　福士　慕情
ふらふらと老いの樹海へ迷い込む　奈良県　渡辺　富子
竜馬出よふらふらしてる今の世に　岸和田市　井伊　東吉
ふらふらと浮いて噂をきく金魚　美作市　山本　玉恵
ふらふらと食糧危機がやって来る　鳥取県　竹信　照彦
お金さえあればふらふらするもんか　大阪市　柴本ばっは
ひさびさのキッスふらふらする眩暈　香芝市　大内　朝子
一分は守るふらふらしながらも　堺　市　矢倉　五月

秀　句

かげろうとふらふら歩く残り旅　米子市　青戸　田鶴
たんぽぽの綿毛油断はしていない　河内長野市　山岡冨美子
優先席前でふらふらして見せる　大阪市　古今堂蕉子

軸　吟

葉桜の下をふらふらして帰る

ふらふらになって名ばかり管理職　鳥取市　岸本　宏章
見るだけよフラフラと寄るニューモード　犬山市　吉田　幸子
ふらふらが母の涙に目をさまし　熊本市　永田　俊子
決心がふらふらするぞ振り向くな　鳥取市　佐伯　やえ
君の目の中で泳いでいる私　堺　市　加島　由一
膨らむとふらふらしたくなる財布　枚方市　海老池　洋
ふらふらにさせたあなたの春のドア　八尾市　宮西　弥生
ふらふらと一本残るボーリング　枚方市　寺川　弘一
ふらふらはしてるが策は立ててある　藤井寺市　太田扶美代
もうふらふらです庶民の台所　和歌山市　古久保和子
介護するほうもふらふらしてる足　宇部市　平田　実男
達人は波を味方に浮いている　大阪市　古今堂蕉子
ふらふらと初夏の音譜に踊ってる　京都市　坪井　孝一
はいあがる勇者は誰も見捨てない　鳥取市　田村　邦昭
定年が男の魂を奪う　寝屋川市　籠島　恵子
かげろうとふらふら歩く残り旅　米子市　青戸　田鶴
ふらふらとつい来てしもた君の街　尼崎市　春城　年代
バージンロードふらついているお父さん　紀の川市　木村　徑子
ふらふらの足も夕日に立ち止まる　鳥取県　飯野　葛子

秀　句

機嫌よく酔ってこの世の千鳥足　愛知県　早川　遡行
ふらふらとしながら要の火を掴む　篠山市　二階　幸子
丸腰になってふらふらしなくなる　八尾市　髙杉　千歩

軸　吟

ふらふらを支えてくれる男傘

とんぼ

時広　一路選

とんぼめがねかけたら夏の顔になる　葉子
一人っ子極楽とんぼと言うニート　恭昌
蝶よりも今も昔もとんぼ好き　歳子
Uターン迎えてくれぬ赤とんぼ　美義
所在無げとんぼが遊ぶ無人駅　みのり
出張はとんぼ返りのイエスマン　柳弘
糸とんぼどっこい生きていた棚田　正和
歪んでるとんぼめがねで見る世界　喜子
暁光にやごよ脱皮を急がねば　権悟
アイドル似とんぼ眼鏡が闊歩する　俶子
極楽とんぼひもじくなると来るメール　徑子
とんぼ取り知らぬ良い子の塾通い　(久)千代
糸とんぼだけに残った柳腰　美津子
赤とんぼ何時でも僕の応援歌　(稲)洋
じいちゃんと昔話に来るとんぼ　可住
開発のニュースが怖い糸とんぼ　重人
孫の目にヤゴがとんぼになる不思議　(安)泰子
不器用に飛ぶ父さんの竹とんぼ　幸雀
負の戦史その一コマに赤トンボ　四郎
とんぼ返りやっとありつく機内食　茂代
竹とんぼ作るナイフへやかましい　像山
飛ぶことを忘れた亡夫の竹とんぼ　英子
とんぼ見る眼は少年になっている　遠野
ヤゴの日の記憶が呼んでいる水辺　明子
じいちゃんを見る目が変る竹とんぼ　雅枝
赤トンボ諦めきれぬ赤トンボ　奮水
赤とんぼ戦の話もうしない　ちかし
百花繚乱とんぼ返りがしたくなり　菜摘
絵手紙のとんぼ帰って来いという　遡行
竹とんぼ飛ばした友は千の風　北朗
殺人鬼の肩にも止まる赤とんぼ　霜石
夕焼けと同化していく赤とんぼ　(花)順子
赤とんぼ嬉しい噂もってくる　輝夫
オニヤンマの眼と岡本太郎の眼　充子
引力に負けたくはない竹トンボ　幹子
中国のトンボはどんな空見てる　藤朗
父と子の距離を縮める竹トンボ　岳水

佳

人のいい私の肩に来たトンボ　一粋
ふる里へとんぼ返りの道がつき　一知
リモコンを横目に飛ばす竹とんぼ　正己
赤とんぼスイスイ宿題はしたか　みつこ
安らぎの方角を恋う竹とんぼ　典子

人

眼の中で虹をいくつも見るとんぼ　照彦

地

手の平で生きて飛び出す竹とんぼ　勝

天

少し威張ったとんぼ来ている亡父かしら　政岡日枝子

軸

故郷の水辺忘れはせぬトンボ

噂

清川　玲子選

へえそんな噂がぼくにあったのか　強一
良いことは噂にならず消えるだけ　あやめ
お節介と噂が好きな路地雀　志華子
都市砂漠乾いた噂ばかり聞く　茂代
アンテナは嬉しい噂だけ受ける　茶子
一杯のコーヒーで聞く噂です　(矢)五月
先生の噂が先に赴任する　岳水
お先にと言えぬ噂が恐いから　英子
黒い噂意気込む男の鼻を折る　武庫坊
お噂は聞いていますと上手い世辞　輝夫
パソコンの噂勝手に世界中　公誠

勝

悪くても噂されてるうちが華　賢子
帰った後きっと私の噂に花が咲く　准一
無視をした噂に足を掬われる　像山
生甲斐のように女房は噂好き　黒兎
いい噂だけを聞き取る耳を持つ　ルイ子
噂する輪の中そっと抜けて出る　すず
角曲ったあたりで尾鰭つく噂　(花)順子
噂にもならぬ私の片思い　智加恵
噂から見放されている背の曲り　淳司
顔出すとぴたりと止んだ笑い声　寿美
手垢まみれの噂を風が弄ぶ

空の青噂話を消してくれ　洛酔
聞きたくもないのにここだけの話　幸雀
チャックした口がうずうずする噂　美千代
井戸端の噂は羽根がよく生える　妻子
艶のある噂で偲ぶ通夜の席　朝子
銭湯に噂の種が落ちている　絹子
コスモスが夏のうわさに揺れ動く　隆盛
噂いつも口にくわえている雀　典子
善い噂悪い噂も通り抜け　螢
火元は消えているのに噂だけが飛ぶ　日枝子
一服のお茶の中にもある噂　一粋
ちっぽけな噂で愛が痩せてゆく　忠
髪染めて噂の渦に溺れそう　北朗
葉桜になっても噂褪せぬまま　ふみ
義理人情枯れてぱさぱさする噂　霜石

佳

葬った噂時々発火する　幹子
フライパン上手に噂裏返す　慕情
噂みな知って素知らぬ地蔵さん　みつこ
髪カット待つ間に噂仕入れとく　俶子
年齢不詳風が噂を膨らませ　充子

人

松の木に止まったままのいい噂　彩子

地

膨んだ噂は針で突いておく　碧

天

カフェテラス噂を掬うティースプーン　北野哲男

軸

本当の歳は噂に任かすママ

ポスト

喜田　准一選

頂点のポストへ据える駒がない　(安)泰子
マイホームパパでポストに遠く居る　セツ子
蹴落してポストに就いたのは女　みのり
責任の重さと酒が増えていく　裕之
食いきれぬチラシ突っ込まれるポスト　像山
行き付けのポスト毎度の声がする　みね
街角に丸いポストのある昭和　弘風
正も邪も全部飲み込む赤ポスト　茶々
ポストから飛び込んで来た青い鳥　泰女
不器用が掴むポストの遠回り　一知
今日もまたポストのお客より分ける　(岩)玲子
敗者復活ポストに今を賭けてみる　すず
ポストまで着ていく服が決まらない　遡行
暑中お見舞ポストマンにも申しあげ　みつこ
お気に入りポストでひとり舟を漕ぐ　徑子
名ばかりのポストで肩を叩かれる　(川)洋子
器量のない上司にいつも泣かされる　光久
取り返すだけの魅力のないポスト　忠
重要なポスト謝罪の仕方から　慕情
栄転のポストに重い枷が待つ　妻子
リストラの噂に青くなるポスト　菜摘
大臣のポストマンガでよく知られ　愛論
右腕に俄然ポストを揺すられる　幹子
歳月の重みを抱いているポスト　婦美子
仕事よりうまい謝罪で来たポスト　遠野
ポストまで宿の下駄はく旅便り　黒兎
ポスト未だポーカーフェイス崩さない　柳弘
ポストには手を離すまで迷ってる　日の出
愚痴みんなポストへ入れて楽になる　典子
有望なポストを退いて老母介護　朝子
抜擢のポストへ飛んで来る吹き矢　岳水
消印有効またもポストに笑われる　(矢)五月
ライバルも同じポストに投げた憂さ　公誠
ポストまで駆けた青春ものがたり　霜石
運のいいポストはここと決めて出す　修
自選組ポストA氏へ背くらべ　四郎
ポストには入れぬ手紙を書いている　扶美代

佳

独り居に手書きの文が来ぬポスト　哲男
過労死をするポストなら空いている　美智代
憧れのポストへ女神振り返る　碧
このポスト蹴ると保証のない明日　(久)千代
昇りつめたポストに落ちていた画鋲　彩子

人

抜擢のポストが浴びる嫉妬の目　玄也

地

老兵が死んでも離さないポスト　充子

天

実力があるのでポストはずされる　志田千代

軸

甘い脇ついたポストの荷が重い

初歩教室

題 ― 安い

三宅保州

時事吟の是非

今回は題の特性からか、時事吟的な句を多くいただきました。時事吟は否定論と肯定論が今もかまびすしいところです。否定派は、作句から歳月を経ると句意が分からなくなり、何といっても新聞の見だし的な文芸性に欠ける句が多く、批判の多いサラリーマン川柳も時事吟もどきが多いなどと言われます。

一方、肯定派は、時代を鋭く斬って読む時事川柳こそ、川柳の真髄である風刺と批判精神が溢れており、川柳の醍醐味だとまで言う論もあります。

私は、時事吟は川柳に非ずという極論でなく、川柳の中の一つのジャンルとして認知されるように、佳句の条件を備えたレベルの高い川柳としての時事吟が、どんどん生まれることを期待したいと思います。

【添削・批評句】

原 淋しがりだまし安いと狙われる（名を伏す）

だまし易いです。字引で確かめる習慣を。

［百均を詠んだ句］

原 百均で孫一ぱいのお買いもの　きぬ子

原 百均で間に合わせてる時もあり　光子

原 安くても百均鋏よく切れる　治子

原 百均に折りたたみ傘まで並ぶ　堅坊

百均にこんな物までとか、安いけど良いというような発想は多いものです。

次の四句は比較的佳い句です。

原 百均の老眼鏡を磨いてる　房江

原 百円の顔はしている腕時計　正己

原 百均で落ち合っている共稼ぎ　昇

原 百均で作った人の涙見る　好文

［安請け合いを詠んだ句］

原 安うけしあとで後悔人が良い　正二

原 お人好しお安い御用と引き受ける　節子

原 お人好し安請け合いして四苦八苦　靖博

原 調子者安請合いで四苦八苦　ちづる

右の四句は「安請け合いまたしてしまうお人好し」的な同想句です。それを超えたい。

原 縫い直し安受けしたが四苦八苦　雅代

添 四苦八苦安請け合いの縫い直し

原 安請け合いあんまり当にしてません　周子

原 安請け合い気付くはいつも途中から　文代

原 つい釣られ話に乗った安請合い　道子

添 気が付くと安請け合いに乗っていた

原 煽てられ安請け合いをしてしまう　かずお

原 安物を着ても優雅に見える女性（ひと）　弥生

女性をひとと読むのは無理。ひとでよい。

原 一人居の安い晩菜ちと「淋し」　俊子

淋しすぎます。かぎ括弧も不要です。

添 一人居に安いおかずを少し買い

原 ポケットの中に転がるバイト料　菜摘

題の「安い」がより分かるようにしたい。

添 ポケットの底にちょっぴりバイト料

原 安いですおまけもつける買いなはれ　孝明

添 バーゲンでそのうえおまけつきと言う

原 安いからいらぬものまで買うみじめ　美紗子

添 安すぎてついつい要らぬ物も買い

原 バーゲン品見れば血潮がさわぎ出す　みち代

添 バーゲンのチラシに血湧き肉踊る

原 子育て中デパバーゲンで値を比べ　弘泰

添 デパートのバーゲン品も値を比べ　久子

原 我先に安物買うて銭なくす

添 われ先に安物買って無駄遣い

原 安売日開店並び買い漁る　智加恵

添 開店の安さにやはり買い漁る

原 安売りの広告乗せて隣り町　ヒロ

添 安売りのチラシに隣り町までも

原 一円の安いガソリン買い走る　律子

添 ガソリンを使って安い店探し

原 安売りの靴下はいたらすぐ破れ　こずえ

添 安売りの靴下やはりすぐ破れ
原 安く買い押入れに眠る服　弘子
添 買いすぎた安物押し入れに眠る
原 格安のツアー頭数で稼ぐ　かずみ
添 格安のツアー成り立つ頭数
原 安いはず正味期限のあいまいさ　稔
添 安いはず賞味期限は今日限り
原 牛より豚食費を安くがんばってる　綾乃
添 牛肉を横目に今日も豚を買う
原 安売りのバナナ毎日ジュース責め　麗
添 安売りのバナナで今日もジュース攻め
原 身に付けてやっと気に入る特売日　吉比古
添 特売品でも身に付けてみて確かめる
原 酒たばこ嗜まぬので安くつき　千代子
添 禁酒禁煙安くついてるはずなのに
原 割り安になったら行こう月旅行　徑子
添 割安になるまで待とう月旅行
原 安い家だけど天使が住んでいる　柳歩
添 安普請だけど天使が住んでいる

【少し工夫すると佳くなる句】

原 改修のたびに古城は安っぽく　たん吉
添 改修をして安っぽくなる古城
原 買う方が安くつきます言われても　洋子
添 買う方が安いと言われてる修理
原 プライドをかなぐり捨てた五割引き　幹子
添 プライドをかなぐり捨てる五割引
原 安価より飽きずに持てる物を買い　幸
添 安さより飽かずに持てる物を買う
原 格安のツアーにほれて旅予約　利子
添 格安のツアーにつられ予約する
原 懲りもせず今日も手が出る安いもの　ポン吉
添 また懲りもせずに安物買い漁り
原 安いけど使い回しは致しません　紀雄
添 安いけど使い回しはしない自負
原 中国製を買って年金への補てん　次根
添 中国製買って年金補てんする
原 安ければ中国製になりますよ　真一
添 安いのは中国製になると言う
原 安いとてもう一度見る原産地　孔一
添 安すぎて確かめてみる原産地
原 安売りの砂糖親子で並んでる　賢治
添 お一人さまひとつ親子で並んでる
原 資金繰り妻にへそくり安く借る　ミヨノ
添 資金繰り妻のへそくり安く借る
原 買う方が安いと息子直さない　清
添 買う方が安いと直さない息子
原 プレゼント安い物でも母涙　宏造
添 安物でも母は涙のプレゼント
原 高くても安く買ったと自慢する　武
添 安くても高く買ったと自慢する
原 安すぎて売れへん時もあるのです　としお
添 安すぎて売れないこともあるのです

【佳　句】

安くても母を泣かせたプレゼント　大朔
安売りに釣られ買いすぎ期限切れ　瑛子
安酒とホルモン焼で酔った日々　滋郎
安売り日運び屋さんのお父さん　勇治
安い店探し回ってガス欠に　乃りこ
ガソリンが安くついたと遠出する　武彦
プロポーズ安い指輪で逃げられる　浩二
安売りへ才女も並ぶエコバッグ　健柳
安売りになるまで福を待っている　那珂子
安物の靴に馴染んできた歩幅　絹子
安請け合いしてから続く不眠症　イセ
安普請だけどわたしの根っこです　夢

【今月の推せん句】

売り尽くし裏を返せば売れ残り　荻野像山
言われて納得、風刺がよく利いています。

デパートで探す一番安いもの　小林わこ
デパートで安いものという二律背反の好例。

硫化水素命そんなに安くない　土屋起世子
硫化水素死を詠んだ時事吟の佳句。

【私の句】

安かった金魚長生きしています
二千円札の大安売りをしませんか

（登載漏れの方は役員が添削して返送します）

秀句鑑賞

同人吟　早川清生

―6月号から

七月七日は路郎忌です。私は路郎師から直接指導を頂戴することはまずなかったのですが、先生が書いておられた「新川柳鑑賞」などにしばしば例句として採り上げて頂き、勉強にもなったし、励みにもなりました。私は句評に育てられたのです。

その後、川柳塔社に帰参を許されて、当時に比べ飛躍的な発展をみせている本社に瞠目の思いでした。ただ気になったのは、全体的に句に滔々たる傾向のようなものがあって、個性的な、創造的な句が出にくいのでないかと思うのと、世事を詠んでマスコミと同じ内容、同じレベルのことを言うのなら、ご自分の句日記までにして頂きたいということです。

一年がめぐる桜を軸にして

近藤佳子

六月号からということで、桜の句がたくさんありました。作者個人にとって感動的な事柄も、桜となればどうしても類想の山に埋もれます。そこから抜け出すには、かなり斬新な発想か表現が必要になります。同人吟、いい句もありましたが、この句を代表にさせて頂きました。桜の咲くのはおおむね四月、ちょうど年度始めで世の中も離合集散の時期です。学校も始まるし、新しい社会人としての出発もあります。この作者の思い出では、桜を基点として一年が始まるのです。作者にこの時期とか桜への思い入れがあるのでしょう。でも、みなが寒さにいじけている一月より、万物の成育が始まる四月を一年の始めとすることに、私も拍手して賛成します。人生経験に裏打ちされたさすがの着眼です。

七十五歳酷寿と名付けでもするか

近藤正

四月から後期高齢者医療制度が実施されて、世間は喧々囂々、高齢者はみな憤慨しています。それも始めは後期高齢者という言い方とか、保険料天引きへの反発が主でしたが、だんだん莫大な保険料を年寄りに押しつけ、逆に給付は切り捨てる策略が見えてきました。これでは収入の乏しい高齢者は生きていけません。七十五歳は地獄への入口です。でもわが国の高齢化が早い速度で進んでいる以上、今後膨大な医療費を必要とするのも事実なのです。年寄りは年寄りどうしで面倒を見合えというのもひどい話ですが、野党もマスコミもだからと言って対案を提示できていません。この国に住めばまさに酷寿なのです。同人吟、国民年金への不信も含めて、憤懣の思いをこめた句がたくさんありました。時事吟には鮮度が大切ですが、この問題早々に解決されそうにありません。この作品、諦観の句ながら決して現実から逃げていません。

ヒトはロボット化ロボットはヒト化

古手川光

ロボットについては、せいぜい手塚治虫の鉄腕アトムや、時々テレビのニュースに出てくる駅などの案内ロボットと警備ロボット、学生による競技大会ぐらいしか知らないのですが、きっと私どもの目にふれないところで、産業ロボットなど長足の進歩を示しているでしょう。医療関係とか災害対策には有用ですが、軍事用にも絶対研究が進められていると思います。ヒト化どころかどんどんヒトの能力を超えた開発が進んでいるはずです。一方、資本にとって労働力は利益を生み出す手段にすぎないわけですから、ヒトは物言わぬ忠実なロボットであることが望ましいのです。ヒ

トを必ずしも労働者と限定することはないわけですが、この句、七七形式によって対比が明確になり、一種のリフレイン効果もあって鮮烈な印象を与えています。

ナマケモノぶら下がるのは大仕事

井上森生

言われてみて、なるほどそうだろうなと気がつきました。私どもは自分の目線でしか物を見ようとはせず、他人も自分と同じ判断をすると無意識に思っています。妻に言わせれば、私など家の用はなにもしない勝手気ままな男なのですが、自分ではそれでも一生懸命やっているつもりなのです。ひと様がどう見ようと、ぶら下がるのは大仕事なのです。私は川柳はおもしろくなければならないと思っていますが、その中で何か肺腑を衝くものがあれば、まさに上乗のことといえるでしょう。

賞味期限切れたくらいでうろたえる

牧野芳光

日本の食についてはたくさんの赤信号、黄信号が点滅しています。どれも改善される見通しは少く、このまま破滅の渕に突入していくのでしょうか。保護者たちはみな神経質になっています。私らの子供の頃は産地不詳、加工日不詳の食べ物ばかり、母親が「匂いがしたら食べたらあかんで」と毎度大声でした。農水省、厚労省の新聞広告によると、賞味期限とはおいしく食べられる期限で、期限を表示した食品は傷みにくく、期限を過ぎてもすぐに捨てる必要はないとあります。ところで、保護者たちが神経質に育て上げた学生どもの車内などでの無神経さ、他への配慮や節度のあまりのなさに私はハラを立てています。

さよならを大切に言う癖が付く

森田明子

長寿と祝われても、加齢から生じる人生孤独の切実さを痛切に感じます。作者を存じ上げないので、わが身のこととして鑑賞させて頂きました。私の場合、今日より明日が明るいという状況が完全に絶たれていますので、さよならはまったく儀礼的でなく、全身全霊、いろいろと思いのこもった言葉なのです。他の掲載句から察して、作者は決してそんな深刻な場におられるのでなく、現在を楽しみながら、鋭い感性でこのような句を生み出されたと思っています。句の結び、終止形なのも適切でしょう。

一葉か諭吉で迷うのし袋

川崎ひかり

緩慢ながら持続的確実に物価高が進行しています。ちょっとした間柄の慶弔費は五千円という相場がかなり続いていたのですが、いつか五千円は形式的なおつき合いということになってきたようですな。それでも毎度必ず迷います。うちの姉など、今年は孫たちがいっせいに入学、進学、卒業したので、僅かな年金、目を白黒させていました。

夢いっぱいあった戦後のミカン箱

小川てるみ

私もミカン箱に紙を張って机代わりに使っていました。戦災と敗戦、あんな惨憺たる時代でも、夢があれば、愛があればばら色に輝いて見えるのでしょう。あの頃を振り返ると食う物がない、着る物がない、ヤミ市、停電、インフレ、引揚げ、駅にあふれる家のない子供たち、私には虚脱感はあっても夢など感じられない時代でした。それなのにいま一種の郷愁を覚えています。この句、久しぶりにそんなことを思い出させてくれました。長かった昭和ですから、後半はめざましい経済発展があり、平和で、国際的にも確固たる地位を占めます。しかしそうした華々しい昭和は私の意識にありません。私の昭和は戦争と貧しさです。だからひとさまと話をしている時、知らず知らずに昭和を私流に話し、後悔することがあります。でも世の中、そんな誤解もあって成り立っています。本稿数々のご無礼もそういうことでどうかお許し下さい。

—水煙抄

秀句鑑賞

—6月号から

森村美花

ストレスを溜めない妻のカレンダー

森田　麗

健康で人生を楽しんでいる人は友人も多く予定表もいっぱい。いそいそと出かけてストレスも溜まらず家庭も円満……。

惜しみなくありがとう言うことにする

木村忠義

ありがとうと言えば円くおさまるものが、なかなか素直に言えません。惜しみなくという大きな気持がストンと届きました。

しっとりと雨もまた良し吉野山

矢野良一

千本桜で賑わっている時とまた違って新緑が雨にうたれて癒しをくれる。心豊かな句。

昼寝する後ろめたさと心地よさ

神野千恵子

いいのかな昼寝なんかして。と思う女性の真面目な気持がユーモラスに伝わる実感句。

若作りしても座席を譲られる

針生和代

自分では若い感じの服を着てるつもりでも学生から見れば年相応。いえ私は……と言いながらせっかくのご好意ありがとう！

考えの視点を変えて雲が晴れ

村中悦男

少し視点を変えると悩んでいた問題も案外すっきりするもの。前向きに明るく明るく。

優しさをいっぱい持って怒り肩

葛西　清

ちょっと見は恐そうに見えて、とっても優しい人に出合うとほっとして嬉しくなります。

塩ふって怒りあしたへ眠らせる

宇野幹子

頭にきて腹の虫が治まらない事も一晩眠ると治まっています。「塩をふる」に脱帽です。

ずっしりと税の重荷が丸い背に

岩本雅代

後期高齢者医療制度で年金から天引き、消費税のアップも浮上しています。丸い背にという表現に現実の苦しみと怒りが伝わる句。

いい笑顔噂は嘘と信じよう

萩原大朔

噂は無責任に広がるけれどあの笑顔を見るとすべて消えてしまう。信じる事が大切。

食料のうすら寒いぞ自給率

金森徳三

自給率下り棚田に鍬入る

岩本浩二

日本の農業を守る運動が今広がっています。小さな庭にも、プランターにも無農薬の野菜を作って安心安全の食を守りましょう。

美辞麗句浴びせて背骨抜いてやる

三浦強一

相手をいい気分にさせておいて……と思っていても向こうの方が役者は一枚上手かも。

読めないが達筆らしい書道展

津田シルク

極めた人の字は読めない。でも展覧会では箔がついている。思わず笑いました。これが川柳と思わせてくれる一句です。

順番が迫ると逃げる癖がある

花岡順子

仕方がないので開き直って逃げ出す所まではいきませんが、逃げたい気持は私も常に持っています。癖になってしまうといいのかも知れません。「川柳って楽しいと」思う句です。

隣からソプラノの声梅雨明けか

古田千華

雨が続く梅雨どき。隣から明るい歌声が聞えて楽しい気分に。最後にこの楽しい句を。

エッセー

特別寄稿「大八文庫」

古藤愛子

その当時、K氏は詩やエッセーを書いて「風だより」という個人誌を発行、配布してみえました。歯に衣着せぬ川柳評論家として活躍していた父、東野大八と出会い、八十七歳で亡くなるまでの十八年ほど、親交がありました。

父とは親子ほど歳のちがうK氏とは、黒野こうきという名の地方史研究家、詩人、画家の肩書きを持ち数冊の本を出版している多才な人物です。彼は父から反戦川柳の鶴彬の話を聞き、川柳にはまった人です。

その頃、父の川柳界での活躍を知る人は地元にほとんどなく、母はもっと世間に知って貰いたいといつも心にあったようで「黒野さん、主人に賞を貰えるようにしてやって」と冗談半分に話していたそうです。

父が平成十三年に亡くなったとき、その書庫には多くの川柳の本や資料が遺されていたので、黒野さんの提案により「大八文庫」を立ち上げました。

文庫の活動は黒野さんの企画により、平成十五年、中仙道みたけ館で「川柳と漫画による近代庶民史」展、平成十七年に岐阜博物館で「川柳の群像・大八文庫による川柳展」を開催しました。そのどちらにも彼が川柳人としての父を語って下さいました。また著書『川柳の群像』、句集『ああしんど』の出版の時も助言をもらいました。

これらの企画のために東奔西走して下さり父が亡くなっているにもかかわらず、世に出そうという思いが伝わって感謝の気持ちでいっぱいでした。そのほかに「大八講座」も黒野さんの勧めで始めました。

今年の二月半ば岐阜県庁から「大八文庫」が県の芸術文化奨励賞を授与されるという電話がありました。私は突然の朗報に頭が真っ白になりました。この賞は生前の父の川柳界での業績と、それに引き続く活動に授与されるとの事でした。

一番に黒野さんに報告すると「これで大八先生に恩返しと奥さんへの約束が果たせた」と、大変喜んで下さいました。私はこの言葉を聞き、黒野さんの侠気を感じ深く胸を打たれました。父のことを敬い時間をかけて東野大八という名をこの地に浸透させ、花道を作って下さった黒野さんへの感謝の気持ちは、言葉では尽くせません。

三月十八日の表彰式は快晴となり、午後一時半から県庁で行われました。顕彰三名、奨励五名（団体も含む）が受賞し、大八文庫の代表として出席させていただきました。私は黒野さんは言うに及ばず、この日まで支えて下さった多くの方と、亡き父と母の皆で表彰状を頂いたと思っております。

その大八講座もすでに十三回を終えました。会場の中仙道太田宿の旧家である小松屋は、寺子屋式の雰囲気のある佇まいです。平均して五、六十人の参加があり、不自由な体で欠かさず出席下さる方もあります。演題を間違えて書き直前まで気が付かなかったり、突然に停電になって右往左往した失敗もありました。私は主催者として講座の始まる前に、父の川柳やエピソードなどを紹介し、父を身近に感じて川柳に親しんで貰えればと思っております。

嬉しいことに川柳を作句する人が、少しずつ増えています。今回の受賞に後押しされながら、頑張っていますのでこの一文をお読み下さった皆様も、機会があればご参加頂ければこんな喜びはありません。

■各地句会だより

川柳塔まつえ吟社

三島淞丘

水郷松江市は今、松江開府四百年の大イベントが行われ観光客で賑わっています。

慶長十二年（一六〇七）に堀尾吉春、忠氏親子が、城と城下町の建設に着手した年から数え、ちょうど四百年目に当り、五年後の完成までを記念して、昨年から五年間を城下町建設期間の四百周年と位置付けたイベントです。

松江市の川柳にも古い歴史はありますが、ここでは当吟社の流れについて簡単に触れてみます。

大正十五年に松丘町二氏らによって川柳雑誌松江支部が創立され、ずっと後になりますが昭和十年には麻生路郎先生を迎えて勝谷山川児氏らによって記念大会が行われています。

昭和四十年に麻生路郎先生の長逝により本社『川柳雑誌』が終刊となり『川柳塔』と改題され、それを機に同四十三年に「川柳塔まつえ」が創立されました。

創立者の一人である恒松叮紅氏がその後四十年の永きに亘り会を支えて来られましたが、近年体調不良で平成十八年七月から小川注湖氏に、二十年二月から三島淞丘が後を引き継ぎ新たにスタートしたばかりです。

現在二十名の同人と約四十名の誌友に支えられ、毎月第二土曜日に句会を開いていますが、句会には当吟社の会員だけでなく、番傘の方々や他の公民館教室の川柳愛好家も集まって頂き、出席は毎回三十人前後、欠席投句は四十人前後の参加で、仲良く楽しくをモットーに緊張の中にも和やかに会を行っています。

永年会場にしていました雑賀公民館が老朽化し全面改築工事となり、この四月から会場を松江市総合文化センター・プラバホールへ移し、近代的な雰囲気の中で、みんな心新たにスタートしたところです。

投句の整理、句会の準備運営、会誌の原稿、発送と同人が手分けをして担当しています。

定例会は、兼題四題、内二つは選句と披講の勉強のために同人で行い、他の二題はほかの会の参加者に選者をお願いしてレベルの向上を図っております。ほかに席題一題を出して天位句には席題賞として、先人の足跡を消さぬよう、勝谷山川児賞の名で表彰いたしております。

司会進行も若い人に代わり、また選句の時間を活用して、前回の選者による三才の句評を行って鑑賞と同時に勉強も行っています。

年初めには、誌友の方々の励みになるよう雑詠（塔滴抄）の中から年間賞を贈呈しています。

春は観桜句会、夏は納涼句会、そして忘年句会、新春句会と年に四回、句会後にささやかな懇親会を開き、親睦を深めているところです。これからも心の触れあいを最も大切にして会の運営をして行こうと考えています。

（所在地　島根県松江市）

第26回　夜市川柳大会

と　　き　7月31日（木）10時30分開場
と こ ろ　総合福祉会館5Ｆ　締切12時
会　　費　2000円（お茶、軽食）
事前投句（葉書に2句、締切7月25日）
「　魚　」　河内　天笑　宛
宿　　題　各題2句　セレモニー1時半より
「上　　手」　高島　啓子　選
「びっくり」　木下　草風　選
「タ イ プ」　谷口　　義　選
「笑　　う」　三宅　保州　選
「ひらめく」　古久保和子　選
「食 べ る」　田中　笑風　選
「引　　く」　両川　無限　選
「呼　　ぶ」　木本　朱夏　選
「い じ め」　倉益　一瑶　選
「あけすけ」　井上　一筒　選
披講終了　4時30分予定
ベストテンご招待の宴（5時～7時）

第55回 八尾市民川柳大会

日　時　8月24日(日)　正午開場
場　所　八尾文化会館
5Ｆレセプションホール
(近鉄八尾駅、西武デパート東隣)
宿　題　締切　午後1時　（各題2句）
「　有　」　髙田美代子　選
「　太　」　植野美津江　選
「　鬼　」　前田　咲二　選
「　血　」　中田たつお　選
「　世　」　佐藤　純一　選
「　都　」　平山　繁夫　選
「　志　」　土田　欣之　選
会　費　当日2,000円
(作品集、鉢植花、軽食)
懇親会　当日受付　4,000円
主　催　八 尾 市 民 川 柳 会
後　援　川柳クラブ「わたの花」

第3回　松江市川柳大会

日　　時　7月27日（日）　10時30分
場　　所　松江テルサ４Ｆ
（ＪＲ松江駅前西側）
兼題と選者　2句　締切12時　披講13時20分
「時　　間」　長谷川博子謝選
「乾　　く」　辺　　安子　選
「　粒　」　奥田　勝子　選
「返　　事」　竹治ちかし　選
「こっそり」　金築　雨学　選
「転　　ぶ」　門脇かずお　選
「大　　地」　新家　完司　選
参 加 費　1500円(記念品・発表誌　呈)
弁　　当　600円　60個準備(先着希望者)
欠席投句　投句先　〒690-0015
松江市上乃木9－23－22
三島　淞丘　宛
投句締切　7月10日（厳守）
投 句 料　1000円
主　　催　松江川柳会

平成20年度相生市文化祭
第16回もみじまつり川柳誌上大会

課題と選者（1題2名選者）
「　川　」（三宅能婦子（倉　敷）
矢沢　和女（神　戸）
「　差　」（鴨谷瑠美子（藤井寺）
濱邊稲佐嶽（姫　路）
「　港　」（鶴田　遠野（大　阪）
赤井　花城（神　戸）
出　　題　3題　1題1句　吐
投 句 料　1000円(定額小為替)発表誌送付
投句締切　9月1日（月）消印有効
投句様式　所定の投句用紙または便箋ほか
〒住所、姓名、雅号、電話番号
投 句 先　〒678-0091 相生市矢野町瓜生508
丸山喜美代　TEL0791－29－0330
賞　3題合点により30名に市長賞ほか
主　　催　相生市・相生市教育委員会他
企　　画　相生市川柳協会
後　　援　兵庫県川柳協会・相生市観光協会
問合わせ先　中塚礎石　〒678-0005 相生市大石町14—14　TEL 0791－22－5883

本社六月句会

六月三日（月）午後五時半
アウィーナ大阪

降り続いた雨はやっと上がったものの、蒸しむしとしたり、肌寒かったりの一日である。天候の所為もあってか、出席は84名。

はじめに先日亡くなった大津市の中宗明氏、78歳へ一分間の黙祷をささげる。

お話は川柳塔相談役の板尾岳人氏。「川柳と健康」と銘うった内容は一貫して、健康で生きている日々への感謝で成っていた。御自身の実践している健康法を交えながら、充実した食生活と、一駅を歩けるほどの気力、そして笑いのある暮しが、如何に大切かと繰り返す、その意味において、川柳が最適だと、川柳の普及に余念がない。

また、川柳人は長患いをしないとも言って会場を大いに湧かせ、喜ばせた。

健康に関するテーマは多いが各人、各様、角度の違う内容は興味の尽きるものではない。とにもかくにも、医者にも薬にも頼らず、自分の体は自分で管理するものだと、熱く語って30分の有意義な刻が過ぎていった。

月間賞は枚方市の海老池洋氏に輝く。

（司会―ダン吉・美籠）（脇取り―冨美子・(久)千代）（受付―義・理恵）（清記―冨美子）

席題「握手」　河内　月子選

握手して両手でにぎりまだ御辞儀　靖博
手を握るだけで幸せもみじの手　冨美子
また来るね母との握手はなれない　俶子
名も家も知らぬが握手して別れ　哲子
偽りの握手も熱い血が流れ　鐘造
握手して君のオーラをもらいたい　理恵
百歳のお方と握手したほてり　保州
私の手いつまで握ってる積り　淳司
握手してようやく解けたわだかまり　朋月
若い子と見れば両手で握手する　蕉子
強引な握手味方にさせられる　冨美子
私にも両手で握手したい人　日の出
握手する力に好きが入れてある　太郎
冷たい手ですがと雪女らしい声　靖鬼
手を握る私も心軽くなる　ダン吉
握手しても中国の腹読めている　恭昌
きつねと狸握手のなかにある秘策　寿子
さよならにせめて握手という未練　修
ご無沙汰をほっこり埋めている握手　美籠
握手して四・五日夢見ごこちです　由一
一票のために振り撒く握手だな　寿美
勝敗をこえて涙の握手する　正
握手して別れた清い恋だった　楓楽
握手して貰い何時までも洗えない　ルイ子
差し出した手が空振りになる握手　玄也
きつく手を握りかえしたのが返事　好
こっそりと握手してから袖の下　尚士
いざと言う時は鬼とも握手する　光久
両の手で握り返した嘘ひとつ　幸雀
久しぶり握手で足りず抱きつかれ　好
握手なら素手でしてますあったかい　日の出
ガッチリと握手したのに名は知らず　(奥)五月

佳

妻だけが金婚式で握手攻め　則彦
握手するのに戸惑った左利き　時雄
握手してよかったその後みかけない　瑠美子
ちゃんと目を合わせ握手をして欲しい　(志)千代
喜びの握手互いにマタニティー　章久

人

金持ちに握られた手は洗わない　淳司

地

握手する骨太ですが女です　義子

天

勝った日はとても機嫌のいい握手　美代子

軸

スマイルも添えてライバルにも握手

兼題「悔しい」　近藤　正選

悔しいな貧乏くじがまた当たる　雅明
ゼロコンマゼロ一秒差予選落ち　哲男
悔しさが広げてくれた人の幅　准一
悔しさの中に女神が眠ってる　靖鬼
容赦なく結果論にも叩かれる　耕治
もう逢わぬ覚悟の言葉ほろ苦い　(久)千代
悔しい思いすべて知ってる百日紅　美花
本当に悔しい時で笑っとく　月子

わが娘悔しいけれど僕に似て　昌紀
切り札を使い果たした薔薇の棘　寿子
またひとつ若い命が散り急ぐ　能子
記録出る水着着られず負けました　公誠
古希すぎて歩幅だんだん狭くなる　(奥)五月
二十九歳今さらながら彬の死　ダン吉
悔しいことないかと仏壇歯痒がり　天笑
無視されることも悔しくなくなった　時雄
正直に話して梯子はずされた　(矢)五月
盤上の駒まぜ返す負け将棋　淳司
尻馬に乗って左遷を食った悔い　正雄
ぐらついて歯ぎしりも出来なくなった　(志)千代
親として叶えてやれぬ子の願い　舞夢
悔しさを顔に出したら皆笑う　日の出
悔しいがまだ十字路をぬけ出せぬ　扶美代
やきもちをさんざ妬かせて先に逝き　理恵
あの悔しがり方見込みありそうだ　(矢)五月
体力の衰え悔し欠け茶碗　美籠
年重ね歯も友だちもポロリ欠け　公誠
悔し涙嬉し涙にならぬまま　(志)千代
決めて悔い決めずに悔いる休肝日　好
なぐさめを言われ悔しさ倍になる　楓楽
一徹でいるから悔しさ倍になる　瑠美子
地震禍にじだんだ踏んでいる餃子　冨美子

佳

倒れる日老舗悔しい自己弁護　蛙城
後期高齢悔しい思いたんとある　瑠美子
六十余年まだ日本に基地がある　一歩
悔しいな犬が齧った右の靴　シマ子

卓袱台を返して寅は旅に出る　淳司

人

悔しさの余りに走るカタツムリ　洋

地

パートにはボーナスがないボーナス日　尚士

天

許容量超えたと地球悔しがる　蕉子

軸

悔しさに笑う勇気をくれた母

兼題「腕」　大田昭選

再建へ腕見込まれた自負がある　庸佑
腕組んでご覧よ一つになれるから　哲男
細腕も役に立ちたい高齢化　螢
ロボットに自慢の腕をさらわれる　冨美子
特技欄腕立て百と書いて出す　由一
少し乱れて貴方の腕で眠りたい　柳弘
二の腕に男野心をためている　美籠
名刹を残す匠の腕のあと　鐘造
腕落ちた師匠気づかぬふりをする　時雄
B面の腕を生かしている余生　冨美子
プライドを捨てて鬼とも腕を組む　幸雀
腕を組もうそして九条守りたい　ダン吉
ヘルバーに抱きつける腕鍛えねば　(志)千代
鉄腕アトム蟹工船の上を舞う　一歩
川下りの腕見せどころなりみどり　義子
腕力には負けるが口でなら勝てる　美代子
利き腕に止まった蝶を持て余す　幸雀
ロボットに腕の見せ場が奪われた　正

この腕に賭ける老舗の繁盛記　千里
腕前は逸品ですがよう喋る　柳昌
腕章をつけると道をよく聞かれ　則彦
腕の差を知って挑戦したくなり　いわゑ
職人の腕次世紀を見据えてる　楓楽
いざという時片腕が寝返った　昌紀
下積みの成果を試す練れた腕　靖鬼
ヘッドハンターに首切る腕を見込まれる　恭昌
凄腕の呼び声高い美人秘書　俶子
ギャルみこし凄い腕力あった妻　ばっは
さめた恋ちらちら覗く腕時計　朝子
金の腕かも直すまい左利き　俶子
腕前はそこそこ口数多すぎる　天笑
片腕がいざと言う時そっぽ向く　光久

佳

どう見ても敵わぬ妻の力こぶ　昌紀
職人の腕は多くを語らない　太郎
原点に戻り腕立て伏せをやる　一風
妻と腕組んで歩いたことがない　いさお
定年の腕半額になる稼ぎ　天笑

人

点滴で腕からご飯食べてます　日の出

地

片腕と言われて二番手で終る　(矢)五月

天

腕っ節強い女のヨイトマケ　朝子

軸

寂しくて鬼の片腕借りにゆく

兼題「尽くす」　高田美代子選

意を尽くす絆がとても温かい　美義
尽くしながらお金を貯めてはりました　義
尽くしてる割にあの人報われず　天笑
闘病記夫支えて二十年　寿美
空っぽになるまで尽くす母の癖　扶美代
お互いの弱み知り尽くしてる仲　玄也
知り尽くしたはずの道にもある地雷　幸雀
関白の裃妻が着せてくれ　(矢)五月
職引いて尽くす立場になった俺　弘風
燃え尽きて悔なく髪を切る土俵　正雄
尽くすことが生き甲斐だったお母さん　(志)千代
こころ尽しお作法いらぬ母のお茶　ばっは
尽すのが生き甲斐なんてご奇特な　朝子
命がけで国に尽してきた昭和　寿美
青春を国に尽くして報われず　かりん
尽くされて尽くして赤い実を結ぶ　千里
よう尽くすひとやが苦労性抜けず　天笑
万全を尽くしますがのがつらい　(矢)五月
尽くすだけ尽くしたあなたさようなら　由一
尽くすだけ尽くしましたと印を押す　美花
ジャングルも海もヒト科が食べ尽くす　哲男
種モミまで食べ尽したら最後です　(志)千代
言い尽くし拭いきれない自己嫌悪　俶子
左右とも使いつくして軽い脳　求芽
その道の奥義尽くしている余生　満作
子に尽くし親に尽くしてネギ坊主　欣子
尽くすだけ尽くしたあとどうにでも　房子
尽くし切り後期高齢とは寂し　昭

徹夜でも語り尽くせぬ過去がある　光久
いつだって人に尽くしてきたサクラ　千里
尽くしたとバラは自分を信じてる　哲子
言い尽くし身軽になって仰ぐ月　美籠

佳

尽くしてる指だ靴墨ついている　瑠美子
裏目に出ようと尽くす女で満ちている　寿子
明日は明日今の力を出しつくす　求芽
男一人駄目にしました尽くしすぎ　理恵
万緑の息吹の中でありがとう　ダン吉

人

尽くし尽くされ三角四角まるくなる　いわゑ

地

尽くすタイプですと軽ーるく売っておく　靖鬼

天

尽くしたと思うと長い影になる　義

軸

出尽くして萎んだままの知恵袋

兼題「マジック」　鶴田　遠野選

種明かしてマジックを盛り上げる　庸佑
裏金へ種も仕掛けもある仕組み　准一
開幕からマジックを出す虎フアン　玄也
うちの子が美人マジックではないぞ　みつ子
マジックミラー人を疑い深くなる　美籠
マジックでどうにかしたい府の予算　(奥)五月
鍵盤を魔法のように躍る指　幸雀
母のマジック父の内緒の金が出る　シマ子
恋はマジック種も仕掛けもないけれど　楓楽
咲いて散るこれもマジックかもしれぬ　いわゑ

マジックミラーあれは私の心かも　義子
マジックが効かなくなって恋終わる　冨美子
マジックミラー仮面うっかり脱ぎ捨てる　幸雀
土は魔術師どんな色にも花咲かす　好
マジックで飛べる翼が欲しくなる　日の出
頑固な父も母の魔法に踊らされ　光久
恋はマジックわたしをパッと華にする　朝子
マジシャンもATMで金おろす　(志)千代
バーゲンの魔法にいつも引っかかり　耕治
マジシャンはレンタルの服着られない　義
やりくりのマジック母にかなわない　一風
マジックを使ってこの世ドロンする　扶美代
失敗の手品で会場盛り上がる　扶美代
太り過ぎ箒に乗れぬ魔女となり　俶子
札束が増えるマジックなら習う　ふりこ
マジックのような話術で買わされる　玄也
女のマジックお化粧前とお化粧後　洋
ようチョンボするマジックが人気あり　天笑
神様のマジックだろうポックリ死　楓楽
キューピッドのマジックに酔う甘い罠　美籠
太陽のマジック虹の橋かかる　かりん
マジックの旨い男は信じない　天笑

佳

マジックはないひたすらに薬飲む　堅坊
手品師は鳩も造花も折りたたむ　昭
マジックを自分に掛ける若作り　冨美子
ワイングラスの底から愛の出る手品　哲子
幼児の瞳が見破っていた魔術　恭昌

人

お若いと言うひとことの魔法かけ　耕治

地　哲子
鳩千羽飛ばし平和を出す手品
天　公誠
究極のマジック地球空に浮く
軸
マジックと知らずに開けた玉手箱

兼題「無　我」　河内　天笑選

雅明　座禅組み無我の境地になりきれず
哲男　伴奏もものかわ音痴無我夢中
庸佑　無我夢中友の忠告聞こえない
弘風　子のために女は無我になる強さ
シマ子　佇めば無我を引き込む郷里の海
三喜夫　無我夢中他人の声は聞こえない
柳弘　天下りの男散髪屋で昼寝
蕉子　集中と無我がとらせる金メダル
宣子　遍路道同行二人無我の境
一歩　無我と書く僧侶が金を貯めている
(九)千代　このりんごが命と津軽はばからず
淳司　一坪の菜園今日も無我夢中
公誠　欲抱いて無我には遠い棺の蓋
なぎさ　ディズニーは無我の境地にひたるとこ
尚士　一億がみんなメールに無我の境
好　札束を見るまであった無の心
扶美代　枝豆とビールでじゅうぶん無我になる
義子　五欲あり無我とは無縁にて生きる
(奥)五月　我忘れ腹も気にせぬバイキング
蛙城　パチンコの無我恍惚へ誘う音
鐘造　大好きな人に誘われ無我夢中
昌紀　負けて泣き勝って泣いてる甲子園
楓楽　酒とろりしばし宇宙をさまよいぬ
美花　無我の愛母という名の大きい木
美代子　ひっそりと無我のかたちに座禅草
ばっは　邪魔なものすっかり捨てて方丈記
冨美子　歯科の椅子むりやり無我にさせられる
(志)千代　子育ては無手勝流の無我夢中
尚士　おっぱいを含ませ菩薩の顔になる
蕉子　読経聞く分らぬままに無我の境
朋月　煩悩が多過ぎ無我にほど遠い
能子　母となる無我の中から呱呱の声
楓楽　こはく色の梅酒に溶ける無我の刻
朝子　ひたすらな蟻の姿に見る無心
恭昌　和太鼓の我を忘れた撥さばき
かりん　無邪気な目へたっぷりそそぐ無我の愛
佳
美花　無我夢中にさせた人かと寝顔みる
(矢)五月　お経より演歌しっとり無になれる
(矢)五月　六甲おろし誰とでもええ肩組んで
いわゑ　無我夢中のうちに重ねていた齢
一歩　布グローブで夢中になった草野球
人
なぎさ　調理中話しかけると叱られる
地
求芽　無我の箸まだ納豆を練っている
天
海老池洋　**庭の草我を忘れて引いている**
軸
欲がしみついて無我にはなりきれぬ

弓削川柳社60周年記念
第60回　西日本川柳大会

第1部　（投句）**締切7月12日**（土）
用紙は葉書大の紙に1題2句
連記（4枚）

投句料　1000円（郵便小為替同封）
住所、氏名、電話番号は封筒に記入

「光」　赤井花城　選
「言葉」　土居哲秋　選
「澄む」　平山繁夫　選
「根」　三宅能婦子　選

尚大会　**9月7日**（日）
前夜祭　9月6日（土）
第2部大会の詳細は次号

柔地物壇

毎月24日締切・30句以内厳守　編集部

和歌山三幸川柳会　武本　碧報

宇宙から地球を摘まむピンセット　朱夏
大いなる地球の隅でサンマ焼く　町子
寝転んで春の地球に抱かれたし　かずみ
次の世代へ青い地球を届けねば　桂香
環境汚染地球悩ます人の欲　一歩
地球一周千の風号予約済　瑛子
天変地異地球観てきたモアイ像　孝子
揉めている地球を嗤う八咫烏　昇
庭に木を植えて地球を冷やしてる　幸
ガリレオも顎撫でている地球の出　碧
見上げれば父に似ている雲がある　絹子
似たようなものと慰め合うカルテ　みね
コンビニのおにぎりに似る背くらべ　章子
冗談の言い方までが似る息子　美花
わたくしとどこか似ている古時計　次根
コロッケの物真似巧い隠居部屋　孝義
真四角な遺伝子もろに受けている　菜摘
片減りの靴まで父に似て生きる　幹子
境遇が似ている同志吹き溜り　俶子
さしすせそ母と暮らしてきた月日　和子
背伸びした分が苦しい暮らし向き　保州
笑っても泣いても変わらない暮らし　武
よそはよそ内の暮らしに合うサイズ　イセ
故里にもどり暮らそか定年後　信子
微笑んで楽しく暮らそ二人きり　柳昌
蟹ほぐしもどきで我慢する庶民　東吉
すき間風夫婦で目張りして暮らす　起世子
スイッチの切れた同志へ透き間風　当代
オール電化人差指が忙しい　登美代
スイッチがどこか分からぬ旅の宿　准一

竹原川柳会　古田　太虚報

花冷えも温い仲間と春の句座　房子
黒滝の石仏優しく語りかけ　輝恵
春ですねタケノコが出る猪がでる　万年
空港もしまなみも抱く朝日山　幸子
朝日山理由も聞かずに抱いてくれ　汎美
千本桜やがて名所となるバンブー　慶子
照蓮寺一期一会の風に会う　規代
燕来る万朶の桜散りいそぎ　太虚
故郷でこころ許して酌むお酒　節夫
柔らかいものがいいなとほのめかす　栄恵
ジャズを流して刻を柔らかくするか　蘭幸
柔らかな芽吹きに弾む春の風　淑子
やわらかい日差しほっこり摩崖仏　厚子
予想より柔らかに吹く過疎の風　半徳
柔らかい仏の笑みよ母の愛　民恵
愛不思議こんなに柔い言の葉を　笹舟
一冊の本が転機をくれました　比呂子
生涯学習本が私を呼んでいる　一路
もう一度もう一度孫の絵本好き　笑子
色褪せぬ絵本の中の王子様　あゆみ
廻れ右昭和の本にある魅力　力
鬼平を読む湯豆腐が欲しくなる　敬子
穏やかな父とのんびりすごす春　千枝
鯉のぼり元気な男の子になあれ　史子
人恋しポストを覗く雨の午後　栄香

松露川柳会　小西　雄々報

角のないあの人らしい話し方　ちえ
上客らしい店主の対応丁重だ　敦子
今丁度蒔き時らしい種求め　三千代
夕飯は煮魚らしいよい匂い　澄江
二枚舌らしい上手に世を渡る　裕
勇壮な祭太鼓の音に酔う　智恵子
三味の音と泥鰌掬いに気も浮かれ　久子
名月へ父の尺八なつかしむ　豊枝
気持よく楽器奏でて歌うたう　信雄
リコーダー吹く学童はぎこちない　静江
退職後吹奏楽へ再加入　弘子
のど自慢鐘が一つのお愛嬌　和代
口笛も楽器の一つ魅了され　鈴枝

打楽器の音にとび出した茄子の馬　雄々

川柳らくだの会　岸本　宏章報

追い掛けるライバルが居て頑張れる　せつ子
つんとした美人が今日は笑ってる　邦昭
がやがやと月に一度の宮掃除　すが子
美しいものから先に売れていく　大鯰
ライバルもドリンク剤を飲んでいる　宏章
おしゃべりがつきることない四姉妹　紀子
告白をせよと夜桜背を押す　孝子
ライバルの意識高めてボケ防止　冨貫子
口下手に妻のがやがや少し足す　清帆
姑をライバルにして五十年　仁子
落ち椿がやがやがやと姦しい　玲子

岸和田川柳会　土橋　房枝報

竹の子でブツブツできた事にされ　香代
大地の精筍と春食べている　ダン吉
竹の子にも言い分あろう丸はだか　房枝
なれた手のひとくわで掘る春の味　酔粋
垣越えて出た筍の続く膳　蛙城
海老尽くしスピーチなんか聞いてない　洋
海老天の衣夏にも厚着させ　幸子
妻の海老ずっと大きい俺のより　ふみよ
掻き揚げを彩で和ます桜えび　守
海老腰になっても土を愛してる　絹子
十二単衣まとったような海老フライ　保州
拝まれて孫に小遣いあまい祖母　弘子
神仏何でも拝む日本人　泰弘
拝まれて貸したお金と共に消え　みね
嫁に来て拝んで貰ろたはずなのに　和美
今日の無事拝むゆとりに月冴える　ゆい
子の家に泊り格安春の旅　義泰
九割引で売って原価はいくらなの　夕胡
格安の文字に魔物が住んでいる　仁緑
格安の旅に疲れて貼り薬　准一
五割引き以上でないと買う気せぬ　東吉
ピカソとてあっと驚くギャル化粧　泉滴
昔ギャル三人生んでメタボママ　笑司
一人ならギャルもこんなにおとなしい　力子
大阪を活気付かせるギャルみこし　淳風
何故かしらギャル語得意なうちのパパ　俊昭
コギャル語のメールはまるで暗号だ　珠子
日本語に別冊付録要るギャル語　昭

東大阪市川柳同好会　森下　愛論報

心地よく赤ちゃん揺れる母の胸　賢子
父の樹が揺れて家族の楯になる　湖風
クラス会それからゆれる恋心　緑
友を待つ部屋へ一輪春を活け　三重子
幸せを招く小窓は開けておく　風子
バーゲンの招き体力つけておく　克己
医師の目がそこで止まった内視鏡　雅文
目でわかるやっぱり恋をしてたのね　ばっは

佳句地十選（6月号から）

片岡　智恵子

命がけきっと結果がついて来る　哲男
うま過ぎる膳立て裏を読まれてる　弘子
意に添わぬ答えが返る春の闇　美代子
風に乗りあれはショパンか春の窓　哲子
自分史のどのページにも凸と凹　日枝子
ほんのりと都が匂う千年紀　則彦
この国に切れかかっている躾糸　弘子
過去の負を未来の糧にして生きる　寿美
やさしさが薬になって効いてくる　艶子
捻子少しゆるんで周り見えてくる　満寿巳
やっぱりと言ってもおれずチルドレン　穏夫
用心は息子が甘えてくる時に　シマ子
時々は僕の先行く用心棒　柳弘
用心が過ぎて福さえ寄せ付けず　敏子
女ひとりが男物干してイル　美弥子
おはじきも水鉄砲も見た地蔵　和子
火傷する不倫の恋の火の用心　愛論

川柳塔なら　坊農　柳弘報

その先はそしてと書いて考える　彰治
杉花粉そして黄砂の大涙　博一
築山の歌碑に影さす朧月　満作
待つという楽しみ庭に種を蒔く　隆子

つきつめてそして悩んでラストラブ　美はる
淡々とラストあなたにありがとう　ふりこ
事なかれ主義が先生つぶしてる　勝弘
先生の先生が来る大手術　孝子
先生の一筆バラが匂いだす　道子
母べえでそして我が家の心柱　章久
極楽は自由にきめる湯の加減　千梢
手加減をして叩いてる愛の鞭　茂雄
小半日庭師と尽きぬ石談議　寿美
褒めるだけ手は付けられぬ妻の庭　弘風
そしてまた罪を重ねてゆくヒト科　順啓
レモンの恋先生気づいていましたか　理恵
加減して中途半端な恋になる　富子
加減してせかずに回る夫婦ゴマ　一風
蕾は花に少女は母になりました　良一
匙加減まちがえ恋が辛くなる　六助
気遣いの加減うれしい介護の手　朝子
匙加減一つで反旗翻す　隆盛
そしてまた付けは国民払わされ　和夫
生きて行く男を磨く禅の庭　秋雄
肘鉄の加減に脈がありそうだ　真理子
消息を訪ねてみたい師が一人　萠子
砂時計くるりそしてを生き直す　のりこ
庭先で回覧板がよく喋る　怜依子
さくらさくら春の加減はいかがです　義
先生の加筆に滝が流れ出す　國治

川柳ふうもん吟社　夏目一粋報

春の花みんな咲かせてから逝こう　洋々
出べすけとなじられようと母の愛　春名
孫巣立つ十指に十の祈りこめ　雅女
バッグひとつ夢満タンの始発駅　無限
最高の暗示諭吉を握らされ　一瑶
出べすけのくせに役職受けつけぬ　志げ緒
出べすけがまた幹事さんそっちのけ　妻子
出べすけと思っていないご当人　美雪
がむしゃらに漕いでいたのは泥の舟　節子
満タンにしてからイカの漁がない　蟹郎
出べすけの妻が年金食いつぶす　金祥
出べすけの夫婦へお金貯まらない　圭一郎
まん中の椅子出べすけに空けておく　善夫
出べすけにゆめゆめ内緒明かされぬ　美恵子
がむしゃらにプロポーズした妻も老い　毅
あの野郎俺に暗示をかける気だ　虎尾
鳶の子に鷹は鷹だと言い含め　あしび
この辺が潮どきだろう咳ばらい　孝男
出べすけの母は朝から機嫌よい　一京
出べすけがいつもわたしの邪魔をする　稔
不祥事の度に首だけすげ替わる　かをる
がむしゃらに花は咲かない時を待つ　行男
がむしゃらに恋し失恋まだ独り　由美子
がむしゃらに進む男が気に掛かる　秀四
腹満タン熊も冬眠しています　茂登子
がむしゃらに子供育てた戦時中　喜美子
音を吐かぬ父のがむしゃら見て育ち　夢路
善を積み満タンにして逝く日まで　菖子
がむしゃらに生きた日もある隠居部屋　喜子
しあわせと言う満タンが怖くなる　一粋

長柳会　村上直樹報

繁昌亭のどかに江戸の金魚売る　直樹
赤ん坊乳房を噛んでにっこりと　輝子
仲間だと思い打ち明け裏切られ　不二雄
飼い犬に噛まれるような間抜け者　武男
有名馬引退してもまだ稼ぐ　靖博
金魚の子仲間に入る鯉のぼり　たけし
旧友とメール交わして老い楽し　敬二
金魚とは生きた宝石摩訶不思議　明信
悲しみを噛みしめ我慢空見上げ　よしお
別れるな噛んで含めた母が逝く　明子
亡き母の小言を今は噛みしめる　光弘
金魚の糞だけは嫌だと言って野良　淳司
切磋琢磨仲間のお陰二十年　正一
ひらひらの金魚ファッション街泳ぐ　正子
仲間にも一つ二つの不協和音　一慧
子供より仲間と支え合う老後　正美
夫いま仲間と思う五十年　けい子
飛行雲ひとすじ平和噛みしめる　和代
噛み合せ時々狂う夫婦箸　三和子
妻は旅金魚に餌のメモ置いて　芳野

入れ歯では噛み砕けない昨日今日　冨美子
噛み合わぬままに暮して丸くなる　史
百均にベンツで何を買いにきた　正博
なれそめは金魚掬いの手が触れて　幸雄
ハートにもエステ輝き増してきた　和子

うぶみ川柳会　小谷美ッ千報

その次の交差点には多分君　美ッ千
ご多分に洩れずあちこち劣化音　ひろこ
言い訳がカチンコチンだからばれる　尚子
多分勝つ相手をのんだ面構え　天人
損得は多分頭に置いてない　芳江
高飛車に出るからカチンされるのだ　かつみ
春が来てカチンコチンが溶けて行く　和子
鬼の面はずせば多分仏顔　美知江
居ごこちが悪くて枯れる山野草　京子
今年も多分届くつもりでいるリンゴ　龍枝
目が覚めりゃ明日も多分うまい酒　照彦
近頃はカチンとくればすぐ別れ　幸恵
草むらは不法投棄に打って付け　あづま
ケセラセラ多分その後ダイエット　雄人
一生涯うっかりで済み仏さま　睦子
身構える癖が草書に出てしまう　きみ子
窓カチン愛しいものを守るため　孔美子
合いの手にカチンと嵌まり出た本音　玲子
ヒーローはうっかり出来ぬ追われる身　よしえ
免許写真ボクには多分似ていない　重忠
アイラブユー多分あなたもぼくが好き　玲坊
温暖化多分小島は海になる　和枝
返事がない多分幸せなのだろう　螢
醍醐味も軽みも多分これからだ　石花菜
干渉の小石の音を聞き流す　宣子

川柳塔唐津　仁部四郎報

倖せの追求ですと男替え　高明
好き好み男もまじるファッションショー　實
窓際の席で川柳事始　蜂朗
辛抱を第一志望へ親もした　四郎
トンチンカン耳の遠さを笑い合う　勝視
四面楚歌トイレでじっと練る思案　輝夫
見る人も無い満開の山桜　晴翠

川柳塔わかやま吟社　牛尾緑良報

僕でしか書けないボクという宇宙　裕美
つゆ草の藍戦争が疎ましい　泰女
脳トレに鋭い意見ありがとう　三男
そろそろという潮時を間違える　大輪
草原へごろんと地球暖かい　輝子
草魂九条守る母の愛　和香
草の根を分けても拉致の子を思う　冨美子
辛抱強い根なし草ではないらしい　豊太
そして今そろそろ生きているのです　怜
安倍さんに続きそろそろ福田さん　ダン吉
転ばないようにそろそろ歩きます　英子
子の自立そろそろ紐をほどく時　俶子
軋み出す会議そろそろお茶にする　准一
軍配はどちらに亀とカタツムリ　登美代
ヨッコラショそろそろここで一休み　順子
脳味噌へそろそろ活を入れ直す　利治
山の神時々爪をとがらせる　小雪
やる気満々鉛筆を尖らせる　紀久子
さすが親鋭いところ突いてくる　よしこ
良し悪しが鋭くなった市民の眼　和子
意のままに生きて近所の鋭い眼　克子
一点を睨み刑事は動かない　三喜夫
創作という爆発になっている　あきこ
下手なりに汗を流した作品だ　寿子
創作にしても三丁目の夕日　保州
午前二時詩を転がしている机　徑子
人の世の創作天が朱をいれる　めぐみ
煌めいた心一気に筆揮う　紀子
創造主浄化装置を付け忘れ　泰
つくりばなしが上手になってゆく病気　よりこ

川柳クラブわたの花　西川義明報

言い訳のむなしさシャボン玉飛ばす　民
効くきかぬふり回されるコマーシャル　君江
人待ちになれば一人も恐くない　博子
車窓より郷愁そそる母恋し　愛子
人生の余白明るい色を塗る　ミツ子
気にするな金は無いけど知恵は貸す　宏至

退化するひねもすのたり文の通　幸枝
母の日に面影抱いてお遍路に　荘司
季はめぐりカーペンターズ聴く娘らと　美はる
花の美にうっとり出来るヒマ嬉し　克美
惜しまれつ終章飾る花吹雪　いっふみ
花吹雪両手に受ける車椅子　義明
約款は読むなとばかり細かい字　宏
一枚の投票用紙国変える　正春
休耕田跡目つぐ子もサラリーマン　欣子
恥かしくない足跡に気を配る　妙子
生活の知恵働いて今日も幸　俊子
磨いてもすぐ曇るんだこの心　晴美
留め金が錆びて開かぬ知恵袋　浩三
賢いな春夏秋と冬が来る　孝子
恋猫もうっとりさせる春日和　和子
あの頃はうっとり聞いた妻の愚痴　八寿子
迷ったらまずはゆっくり眠ります　ふりこ
保険金殺されるほど掛けてない　ますみ
花吹雪く見せ場もつくる通り抜け　はじむ
高齢者の医療ミス先やっとくれ　たえこ
不器用な手でも五人の子を育て　美代子
窓を開ければ燕がすいと初夏を告げ　耀一
五月晴れ心の窓も風通す　知佐子
また問題背負って父のお人よし　一風

川柳塔おっぱこ吟社　川崎ひかり報

思い切り跳べばあの雲掴めそう　はつ恵
独り旅明日の予定は雲に問う　八重子
雲行きが悪いぞ知らぬ顔をする　放任
桑原くわばら雲が雷乗せてきた　弘
夢一つ蕾で遠い雲の上　賢
目顔見て雲行き読んで逃げる孫　よしみ
雲一つない碧空へ陽が登る　あきら
過去捨てて明日に生きよとキノコ雲　いさむ
痛恨の極み昭和のキノコ雲　ひかり
育児日記嫁取る孫に送る春　貞月

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

躾ですまだまだ出せぬ助け舟　ちよえ
失敗を失敗と言わぬ政治家よ　聖子
花嫁がひとしお映える金屏風　伸子
群集になると失敗おそれない　はるみ
失敗がオンザロックをふやしてる　恵美子
失敗を重ねて次へまた賭ける　かつ子
風呂敷がまだまだ似合う田舎道　好栄
あの一合大風呂敷のハメとなり　博利
風呂敷に包みきれない嘘と傷　清泉

尼崎いくしま川柳会　春城武庫坊報

連休を古里で待つ老いた母　幸子
愚痴は止せ明日という日が見えてこぬ　守弘
年金が減っても意地で生きてやる　東園
ああ言えばこう言う日本沈みそう　昭三
体力テスト受けて少うし弾んでいる　年代
草餅の香り心が丸くなる　久子
杖でないあなたの肩をかりてます　和子
ささやかに老いらくの花咲かそうよ　ゆき子
春うらら若さ溢れる薄衣　道子
雨あがり新芽輝き草匂う　千恵
汚れなき遊び疲れた児の寝顔　純
瓢箪の中で酔ってる俺の夢　寛之
桜満開春の心を明け渡す　武庫坊

京都塔の会　都倉求芽報

結局は甘い自分に跳ね返り　ふりこ
何もかも私悪いと腹撫でる　満子
メタボ妻お湯が溢れて孫ながれ　美義
メタボリック隠せる服を選っている　葉子
やけくそのお洒落も似合う初夏の街　とし子
見て見ない振りをするのも楽じゃない　綾子
寅さんにいつもはらはらするさくら　石舟
ハラハラと桜吹雪の生き上手　宏子
団塊の父には何の趣味もない　孝一
運転をあんたするなら俺降りる　こういち
はらはらとはかなさつなぐ花筏　求芽
校庭の太い欅に癒やされる　庸佑
嫁さんに任せとこ太い足と腰　典子
太い目の母の柩は重かった　篤子
いざという時に図太い落ちこぼれ　則彦
早く寝れば太らないって母の夢　知栄
骨太の生き方をするパイオニア　輝美

象の足ずっしり描いたクレヨン画　昌乃
天からの褒美ひたすら鍬を打つ　欣之
Uターンの褒美母校は花吹雪　福子
私へのご褒美ですと無駄遣い　文代
片隅で生きて賞罰には無縁　敬子

西宮北口川柳会　黒田　能子報

わたくしを天は黙ってみてくれる　いわえ
天敵と旅してるよな夫婦でも　てる
永田町天下国家は人ごとか　昭三
お天道様地球の涙見えますか　キヨミ
天命を全うしてる家族愛　松煙
天の川隅に小さく亡母の星　美代子
天命へ運を味方に山登る　哲子
引越しの度天井を見つめてる　弘子
許されて真っ赤に開くチューリップ　朋月
許されず子は我が道を強く生き　直
許されて許して夫婦共白髪　婦美子
肩揉みを百回やっと許される　耕治
許す気へ満を持してる砂時計　求芽
白黒でお洒落をします大事な日　わこ
白黒をはっきりさせる父の声　江美
年の功何とか白黒つける知恵　萬的
モノクロの写真に語らせる昔　折杭
ぴちぴちのパンツで若き夏になる　奮水
シンプルな暮らし静かに母偲ぶ　光子
バラ園のバラに五月の空が澄み　静子
春深し人に出逢いと別れあり　比ろ志
群れたがる雲の動きを絵図にする　栄
春の風喜寿に放浪唆かす　哲男
一輪の花がいとしい病明け　美籠
ン万の料理も実は食べ残し　五月
孫が来る朝取りいちごもいで待つ　順子
使わないから錆びるのか非常ベル　二英
千年と言われ式部がまだ解けず　晴美
短足の犬が見上げる八頭身　いたる
白黒を無色の風が塗りつぶす　孝一

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

母の日の母に聞かせる子守唄　節子
母の日へ好きに使えとのし袋　和子
母の日に母の改革案もある　はるお
こもごもの母の日になる種をまく　富久江
母の日に遠い温もり想い出す　みどり
無理するな気遣い母の日にもらう　かをる
子が孫がそれぞれ想う母の色　永子
母の日に赤い花より鯛がよい　露子
母になって母の日七十六回目　惣子
産湯の子に娘は母の顔になる　彩子
昼下りへそくりそっと出してみる　幸枝
覗き見をするにほど良い戸の隙間　茶子
ケーキ食う老母は無邪気な童です　くに子
土壇場の叫び神風吹いて来ず　弘子
長生きの秘訣はきっと粗衣粗食　孔美子
敗戦のひもじさ生きる術教え　公子
一日の元気をくれたごあいさつ　みさ子
お陽さまに挨拶そして深呼吸　きみ子
にんげんの並はやっぱり並を食う　忠良
三食を食べて動いてありがたい　久枝
食ってみて美味いと無害だと思う　実満
幸せだ三度の飯がおいしくて　菊乃
仏壇に食べろ食べろとおしつける　宣子
おはようを誰より先に言う元気　汲香
その朝武者は黙って茶漬け食う　盛桜
お仏飯さげて亡夫の分食べる　房子
母の日は無くても母を忘れない　諷人
食わず嫌いが菠薐草を食べている　螢

南大阪川柳会　吉川　寿美報

氏神さんへ必ず朝の手を合わす　太郎
別嬪に会うと必ず口ごもる　昌紀
また来てね白い小指に惑わされ　滋郎
もし来世あれば貴女を選ぶだろう　一歩
二次会は二つ返事でついてゆく　柳弘
心痛の母ずる休みとは知らず　ルイ子
ずる休み映し出された砂かぶり　克己
主婦業を仮病で休む妻の乱　洋
ずる休み時々したくなる介護　栄子
ずる休みする子の胸の深い闇　楓楽
鼻柱折られて面子ない天狗　(吉)修
認知妻飽きず折ってる千羽鶴　章久

さき折れた方が負けとは限らない　千里
我を折って忍の狭間にあるしこり　志華子
ほっこりし携帯そっと折り畳む　直子
折れ線のグラフが責める不眠症　憲太郎
よい汗をかいてクヨクヨ流し切る　更紗
くよくよが眉間の皺を深くする　東吉
くよくよと家裁出るのは男だな　あや子
くよくよを治す薬を酒と言う　弘風
食べ過ぎやそのひとことは禁句です　和雄
夫婦でも過去の生い立ちタブーだよ　弘泰
人差指唇に立て片目閉じ　祥昭
過労死はタブーのみなし管理職　尚士
貧しいが戒律守り生きてきた　忠昭
究極の愛はタブーを恐れない　集一
太陽が味方でタブーには触れぬ　柳伸
タイガースこのまま行けるハズがない　勝弘
靴下の破れくよくよ亡妻を恋う　寿美

川柳茶ばしら　板山まみ子報

一円が拾ってくれと光ってる　美代子
バーゲンでないと会えない人ばかり　遡行
まずメニュー衣替えする弁当屋　文男
頼られてボケる暇ない老いの幸　幸子
この話矢張りあの筋から出てる　秀水
到来のお国自慢をお裾分け　百合
良い便りばかりといかぬ世のつらさ　まみ子

川柳花の輪　妻谷　重風報

難問が解けてうれしい一年生　やすの
お隣へ一言足して疑問解く　隆子
美術展美は美でありて解けぬまま　泰子
紐解けば里の香りがころげ出す　一幸
励まし合う農園仲間鍬揃い　ミヨノ
まだ仲間遠く離れた友だけど　ルイ子
ズンドコに心一つのペンライト　善栄
入院でできた仲間と酒の会　重風
言い訳は決してしないプロの道　音成
地図にない道自己流に生きている　薫

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

卒業式何を卒業するのやろ　真一
無事卒業それから先の絵が書けぬ　泰子
杖なしで歩く稽古をしています　敏
音信を問うてもみたし薫風に　美喜
都市砂漠泳ぎ疲れた無精卵　重人
産卵に命をかける北の川　獏沓
生きもののすべてが丸い卵から　恵子
殻を割り出て来なさいとノックする　光男
駆け出しの卵を襲う五月病　一知
医長回診医者の卵を従えて　六点
高いなあ有精卵と書いてある　ヨシ枝
習うより慣れろパソコン笑ってる　久仁子
習いました証書がでかい顔をする　悦子

前例に習い無難な策を取る　庸佑
パソコンを習いゲームにしびれてる　喜久子
広辞苑死ぬまで習うことがある　扶美代
母さんに習えと嫁ぐ娘に諭す　いさお
すき焼きをせかせか食べて恨まれる　ちづる
劣勢に勝負の札を早くきり　章司
せかせかの心を直すすべがない　一壺
せかせかと休みもとらず動く蟻　フジ
せかせかとするだけ何も浮かばない　アヤ子
秒針がせかせか指図ばかりする　みつこ
お茶漬けを掻き込む朝は戦だな　美代子

ほたる川柳同好会　水野　黒兎報

したたかな計算秘めてある微笑　祥風
脳トレに暗算してるレジの列　春代
年金の計算できぬ社保庁さん　勇治
計算の出来ない命生きてます　美智代
きりもない愚痴と欲望綯いまぜに　肋骨
今もなお無数の夢を持って生き　禮子
年金の無数のミスに使う税　黒兎
隠れんぼしながら聖火運ばれる　雪子
お遊びの金勘定はあとまわし　見清
夢でさえ妻をベッドに運べない　幹治
針運ぶ母を囲んで聞く童話　昭子
蝶の羽根運ぶ蟻さん帆掛け舟　信男
何時も妻口に出さぬが眼でとめる　いさむ
悪口を言わぬと決めて無事の朝　長一

口々に行革唱え先送り　柳童

岩美川柳会　石谷美恵子報

甘いのは駄目子育ては辛さです　稔はるお
保証人受けて甘いと悔いている　孝男
甘い蜜覚えてからは汗かかぬ　たぬ
倍になる予定元まで失った　完司
初対面なのに年収きいてくる　圭一郎
札束にずばり弱くて物言えず　一京
ずばり言う君が隣に居てくれる　清帆
暴言を吐いてロマンを遠ざける　螢
牡丹の花にコーモリ傘をさす　きみ子
華やかな顔だがもとは浜育ち　茶子
自分史に少し付け足す華と毒　重忠
華やかな牡丹が百花咲いた庭　蟹郎
華やかな手打ち三三七拍子　節子
あと少し華やぎたいのさくら花　公乃
華やかじゃないが地道に生きている　幸枝
華やかさないがひかれる山桜　幸安
地味な僕華やかな句を抜いている　和子
華やかさまるでないけど紅つける　忠良
嘘言えぬ病室の戸が重くなる　睦子
いい話戸口まで出てまた喋る　一瑶
母の戸はいつでも開けたままである　和枝
優しさは心の扉開かせる　公子
春の戸を全開にして深山萌ゆ　菖子
心の戸開けて世界を見てみよう　かつみ
医者が手を離し生死の瀬戸ぎわだ　雅女
情けある苦言ずばりと受けとめる　美恵子
華やいで五体の錆は覗かせぬ　烈

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

ときめいた頃は黒髪光ってた　慶子
髪ままにならぬ日女楽しめず　あずき
怒髪は天に夫が嘘をついたとき　シマ子
風みどり肩の力も抜けていく　加津子
浮世絵を真似て爪切る風呂上り　喜美子
風の子はみえずゲームの子はみえず　香住
風が背を押してくれたら踏み出せる　能子
相談にのってはくれぬ北の風　弘直
強風に飛ばされし来たアデランス　烈
風に乗る噂は五割引きで聞く　ますみ

あかつき川柳会　山本柳昌報

晴れて句碑大阪城に鶴彬　紀雄
今月で晴れて後期の高齢者　和雄
美しいみどりは基地に似合わない　一歩
五月晴群游の鯉二〇〇匹　富美
草餅のみどりに母の愛こもる　シマ子
山萌える人に諂うこともなく　哲男
少女死す心の緑かきむしる　修
四万十の清流鮎の立ち泳ぎ　柳弘
怠惰にも流れていいよおじいちゃん　たもつ
信号機のままに流れてゆく怠惰　柳昌
流れた月日いつしか指が曲ってる　美花
お流れになったナ幸せな老後　ルイ子
ゆっくりと流れてたどり着くあの世　集一
鬼女の面つけて流れの中にいる　歌子
父の反っ歯を受け継いでいる次男　一筒
父の日が予定表には書いてない　正
父の背は八畳くらいありました　喜八郎
軍服の父はあれから語らない　ダン吉
星条旗にそそのかされる愛国心　鈍甲
温暖化産業界は皆無口　勝弘
今度こそ棄権はしない高齢者　尚士
平和憲法素案つくった日本人　美智子
九条の値打ち世界に認められ　明水
イムジン河諸行無常の反戦歌　よし子
吉兆の料理は僕の食べ残し　廣子
放っといた花に根性見せられる　桂子

川柳ねやがわ　籠島恵子報

惚れっぽい女あじさいを愛でる　柳弘
お月さま年寄りつらくなりました　たもつ
柔軟な態度が明日へ開けだし　洋
綺麗に生きる不意に逝ってもいいように　弘一
もどかしい思いなにかが通せんぼ　修
虎勝てば忽ちからになる財布　とし子
幸せの切符札束では買えぬ　一風
舟を漕ぐ妻よ苦労を掛けました　仁清
財布には何時も五万は入れておく　三郎

わたくしのハートにどうぞご招待　朝子
子がくれた財布の中に御縁玉　麗
気に入ったチケットそっと神棚へ　日出子
友の目をしっかりと見て話聞く　ルイ子
料理屋で料理は何も残さない　さち子
我が家では俺の居場所が見付からぬ　弘風
吉と兆不意に繰り出す神のいたずら　亜成
天国へ行く切符なら持っている　栄二
アメリカに言われるままで行き詰り　鈍甲
不意にいる写真はどれにしようかな　かすみ
旅人の心はいつも青い空　博泉
思春期が揺れて豹変する態度　郁夫
先方の強い態度じゃ意地が出る　一笑
愛しげに寄り添う肩は妻じゃない　賢子
変わらない態度に続くおつきあい　恵子

むらくも川柳会　毛利幸報

新緑に癒され一人山を行く　幸
歳月の早さ傘寿とは恐れ入り　恵美子
母の日の母に新茶がとどく今日　ます美
一年生ひ孫入学祝膳　定子
少子化の波に漂うランドセル　彰
旬の味一杯食べて胃は躍る　喜美
歎異抄わからぬままに力くれ　蘭水
遠い日の日誌を詩に道しるべ　瑞枝
嫁さんのブリ大根に一目ぼれ　俊夫
生きているきっと明日は笑うから　秀夫
冬眠と言う桃源郷は幻に　かずこ
にわか雨所によりと惑わせる　愛子
鯉のぼり男のしるし鼻高い　久子
あちこちの川辺に泳ぐ鯉のぼり　清子
胸の内のぞいて見たいこっそりと　英男
足音で留守宅になる事もある　美保
老い独り想いに残す夢枕　義良
美しく沈む夕日へ手を合わせ　秀子

川柳塔まつえ吟社　三島淞丘報

運命を引っぱりながら老母が来る　文子
いい風が来るから心開けておく　畔
また来ると言って別れてもう十年　薫
巡り来る四季折々の花愛す　静恵
来るものが来たと覚悟を決めている　長吉
若者の活気溢れる夏が来る　ちえこ
青空へデザイン悠々鳶が舞う　知恵子
世の乱れデザイン通りゆかぬ地図　桂子
デザインは気にせぬ母の割烹着　きみえ
人生のデザイン崩れ蛇行する　幸
宣伝カー派手なデザイン走り去る　和歌子
勇気出し派手なデザイン着て歩く　たえこ
君ひとり居るとこんなに活気づく　玲子
校庭に子供がもどり活気づく　紫晃
咲く花の活気みなぎる音がする　茂美
腹を割る友から活気ありがとう　多賀子
命まで延びる素敵なハイタッチ　日出子
豊漁へ港活気の声がとぶ　房子
出不精をその気にさせたのはみどり　昌枝
緑色いきいきさせる魔法もつ　蘭水
新緑の野山眩しい衣替え　禮子
おいしいな緑の空気背をのばす　幸子
雨にぬれ芽吹く緑のさわやかさ　政子
青春を緑の日々という英語　柳歩
ありがとう言わない愚か者になる　螢
愚か者と一度一喝してみたい　繭
ネクタイの歪み不祥事みつけられ　たけし
旗振られ踊らされてた僕愚か　注湖
自我ばかり強く愚かに気付かない　叮紅
戦争の絶えぬ愚かな蒼い星　淞丘

川柳塔打吹　野口節子報

職退いて軽いカバンに持ち替える　孝恵
寅さんのカバンの中身夢ばかり　公恵
お宝はみんなカバンに詰めてある　滋
古カバン思わぬ金が二万円　龍枝
眼が点になって見つめたレトロ展　京子
のんびりやいつも点呼に遅刻する　善江
何時までも点取り虫じゃいられまい　幸子
年輪の褒美点々シミ増える　和枝
グーチョキパー十指と脳の点検だ　玲子
一点を見つめより目になるおめめ　みち子
次々といちごが赤い灯を点す　よしえ
漁に出た息子の舟が点となる　重忠

人間に点をつけると小さくなる　芳光
点点点と汗と涙の染みた靴　三津子
懐が軽く揺れてるお父さん　禎元
仏壇のろうそく揺れる夫の影　久芽代
花水木恋に恋して揺れている　美ッ千
藤の花我がもの顔に蜂揺らす　隆一
叱ったのは親と言う字に揺れたから　睦子
ゆらゆらと母の背中で揺れる吾子　紀美恵
さりげなく揺れるいのちの置きどころ　きみ子
喧嘩して二人だんだん深い仲　和子
喧嘩した顔を鏡に諭される　美知江
欲をして残した遺産つかみ合い　美代子
火事喧嘩ちかごろ江戸で見かけない　玲坊
良き仲も喧嘩のもとは子の躾　義人
喧嘩して背中合わせが肌寒い　芙美子
出来のよい子ども喧嘩の種にする　螢
鬱と言う漢字といつも喧嘩する　完司
争いを避けてストレス溜めている　節子

尼崎尾浜川柳会　田原　宏一報

吹く風が読めないままに五月病　宏一
目に青葉茶摘みの歌に舞う雲雀　野薫
ほうれん草玉子トマトに愛入れて　よし子
旅の宿窓一杯に幸を呼ぶ　五月
外交にパンダ一と役買うている　江見
リビングはみどりが主役我が家流　亀与子
やわらかい命新芽も日にみどり　里江
指先をほんのり染めて新茶摘み　政江
新わかめ泳がせているすまし汁　イサミ
木の芽どき寝ていた山が起きてくる　靖鬼
飲みすぎた朝のスイッチ入らない　朋月
別居して確執を呼ぶ隙間風　正治
夢追って男は今日も歩き出す　孝一
風みどりこころの窓をあけておく　義芳
カーテンに窓辺の花をさらわれる　耕治
月の道一瞬吹いた恋の風　求芽
食卓に旬の緑がある安堵　紀乃
黒白をつけた心に風が吹く　美代子
草笛を吹けば故郷の空になる　比ろ志
みどり萌え命の伸びる音がする　美義
シシャモ焼くのんびり連休の中日　美籠

豊中もくせい川柳会　藤井　則彦報

いい父になろうなろうと考える　石舟
千本のノックが夢を追いかける　重人
年寄りの小言はきついけど温い　見清
考える事皆同じ宝くじ　タミ
渡り鳥何の因果か毒運ぶ　郁子
薫風を背に後期だと念押され　啓生
減る車道路は出来るこの政治　岩男
痛恨の内に自分を溶かし込む　佳恵
考える無駄を知ってる蟻の列　夢
再婚をもう考えている遺影　則彦
きつい仕事やり終えた日のうまい酒　美智代
3Kを避けてこの子もニート族　宇乃子
抱っこした温もり残し子が巣立つ　巴子
ともかくも生きる厳しさ子に諭す　早人
あっさりと言えば小言も角が取れ　(久)千代
考えて豌豆ごはん母の日に　勇治
あっちこち検定好きの日本人　玲子
ひと言に妻からきつい副作用　美義
気分一新これからの余生鬼の面　都代子
晩年は杖とコンビのひとり独楽　満寿巳
天災の救護支援はほしくない　肋骨
世渡りの不得手なくぼみ水溜まる　求芽
きついことさらりと言った京言葉　萬的
また何を考えてるのやら無口　寿美子
一目惚れたましい臨時停車する　幸雀
リベンジへしっかり結ぶ靴の紐　寅次郎
定めとやただ待つ丈に賭けて見る　十八娘
叱責がすぎて孤独の影を踏む　隆
青葉風残り時間は数えない　葉子

川柳塔すみよし　岩崎　公誠報

お荷物にならぬつもりの万歩計　桃花
ウォーキング見知らぬ人と会釈する　伸子
春の雨相合傘の肩が濡れ　かりん
後ろから散歩の会話止めるベル　克博
一歩二歩後期高齢下り坂　(奥)五月
薬より歩け歩けの保険料　萠
足二本とことんお付合い頼む　(矢)五月

背を曲げて歩く姿は親ゆずり　ヒロ
チックタクテクテク歩く遍路みち　正太郎
二日酔い散歩を叱る万歩計　遠野
マップ手に歩く各地の小京都　美籠
止らずに歩け歩けと花の下　裕之
冗談と思わせながらひとくさり　チエ子
さわやかに最後の日まで歩きたい　舞夢
五月の散歩蝶々とんぼ前後ろ　蕉子
現実は一歩進んで二歩下がる　昌紀
町内を歩けば喋りに突き当たる　シマ子
がむしゃらに歩き静かな現在地　りつえ
ばあさんは全財産を持ち歩く　日の出
幸せをつかめるところまで歩く　篤子
横道へ脳が勝手に散歩する　公誠

川柳さんだ　北野哲男報

手をあわす先祖の供養よもぎもち　和男
子が戸主でわたしゃ後期で姥捨てへ　晃
音読で脳トレ励みボケ防止　雅司
ビリなのに母の拍手はトップなみ　一泉
厚労省後期の次は末期ですか　祐康
今桜だれも見上げぬ葉のぼやき　好文
振り向かずどんどん進む蟻の列　順子
背中に目なくても視線わかります　二英
古希過ぎてからの月日が早すぎる　千代子
また買った無駄を承知の化粧品　キヨミ
指先だけがとても器用になる子供　忠
鯉幟だけで留守番子供の日　歳子
思いきり国旗かかげた子供の日　章子
仕事場の椅子が親父の避難場所　哲男
ひと仕事終えた気になる医者通い　正和

川柳塔きゃらぼく　大塚恵子報

初恋も静かに終る野のすみれ　瑞枝
折々が揃っているがコピーでは　ふみ
値上げの春朝の牛乳水っぽい　春枝
古箪笥もったいないの寄りどころ　すみえ
片すみにわすれな草が出ばん待つ　章江
句を作る母と同じ姿して　那珂子
友に逢い心のはずみまたもどる　やえ
五七五指折りながら卒寿坂　紫泉
ペンと私心の支えになっている　晶子
待ち侘びた花も団子もわしづかみ　恵子
ガソリン税がウロチョロ走り目が回る　寿々子
生きていて良かった桜見ましたよ　亜弥
笑い話にするのは少し先にする　てい子
ラジオから花見を急かす予報きく　蘭
私にも色はあります藍色が　晴子
春野菜グリンがいっぱいうれしいな　雪江
そっとしておく友情だってあるはずだ　なみ
お茶の席立ち居振る舞いしなやかに　清子
ここからも呆けないように努力する　玲子
旅立ちはこんな日が良い花爛漫　ゆき
加齢だと分っていても拗ねて見せ　初枝
遊びましょ団子を食べて花を見て　日枝子
自らも耕す後期高齢者　千代

川柳大阪　長井善純報

誠実な八方破れ壁やぶる　信酔
イチローは進化を続け壁がない　紀雄
鉄壁の俺のハートをとかす孫　彦太
壁に当り勇気で押せば道開く　喜楽
壁越しに長屋暮らしの朝が来る　青道
人生の壁を生き抜き糧とする　功
年の壁逆立してもはばまれる　和
ぶつかった壁がゆっくりしろと言う　美花
岸壁の友とザイルを信じてる　一風
挨拶がだんだん壁を低くする　一歩
苦労した日々思い出す壁の染み　美籠
まかしときピンチヒッター僕出番　比呂志
自給率ピンチと言わぬ国に住む　勝弘
父さんはやっぱりピンチには強い　笑風
人権を無視して聖火ピンチです　司
主義主張聖火リレーにあるピンチ　朝子
ピンチにはいつも寄り添う母の傘　柳昌
九条のピンチ不屈のペン磨く　ダン吉
横向いたおかめにひょっとこが慌て　重人
ピンチには優しい妻に徹してる　芳香
まだ七十奇跡もあると植毛し　川童
最後まで奇跡を信じ見るファン　照月
復活の奇跡信じた絵の願い　かよこ

下積みの苦労が実る逆転打　東吉
夢にまで奇跡待ってる拉致の親　五月
死ぬまでに奇跡を起す夢がある　修
快復を祈る看護が奇跡呼ぶ　鉄心
奇跡かなカメラの癌が小さくなり　章久
偶然と奇跡信じて生き延びる　柳弘
諦めない心が呼んだその奇跡　善純

八尾市民川柳会　宮西　弥生報

言い負けて作り笑いをしておこう　秋雄
くにの風包んで母の荷が届く　一風
母の日の墓へ手向ける赤い花　いさお
灼熱のあの日を語る義務がある　扶美代
トラキチの熱気の冷めぬ終電車　浩三
待ち続け見守り続け母となる　あかり
風見鶏爪を磨いて好機待つ　武人
裏切りの風は本陣あたりから　奏子
いい風だ硫化水素は御免です　紀雄
嬉しくて悲しくて行く風の宿　加央里
生きてゆく意欲をくれたのはあなた　賢子
我が命かけて救命する勇気　朝子
熱気ムンムン青葉若葉に会いに行く　ダン吉
こっぴりと叩いていった北の風　定男
背筋を涼しくしたのは神さま　アキラ
少女羽化ハートゆらゆら夢の中　寿鶴
とびきりの笑顔に闇を救われる　柳伸
久し振り会えばポロリと出た本音　弥生

六甲川柳会　伊勢田　毅報

風船に夢を託している詩人　いわゑ
ポタージュにほんわか愁い包みこむ　みつ子
血統はどうあれ犬はワンとなく　無限
わが家ではペットが名刺持っている　武彦
元彼の名前つけてるミドリガメ　淳子
こんにちはペットがつなぐ散歩道　孝子
愛犬よこのまま年を取らないで　順子
妻がする電話口には犬の声　忠良
マイペット手に負えないと野に帰す　寛子
自立した子の代役を犬がする　悦子
マイペットわたしに負けずメタボです　祥子
ブランド犬媚をふりまくペット店　毅
引き出しの語彙の少なさ悔やんでる　恵
ちょっとだけ背伸びしてみる古希の坂　美恵子
背伸びして見たのはたぶんパンダかな　めぐみ
職人の少ない言葉的を射る　正己
少な目の水で大きな花咲かす　能子
人形の服煤けてもいとおしい　久代
茶席より眺める塔は花の上　純江
西国の札所巡りも半ば終え　洋一
筍を供えて春を分ち合う　千賀子
孫の顔過去のわが子を思い出す　史郎
行間で作者の真意読んでみる　基輔
密室の厨房借りて色直し　政一
探しもの阿呆さを笑うのもひとり　美穂
白黒をつけて失う宝物　光久
煩悩がふつふつ湧いてくる座禅　楓楽

倉吉川柳会　竹信　照彦報

予約など要らない空の上の席　完司
星空に蠍や蛇や熊がおる　石花菜
空模様機嫌良い日と悪い日と　康子
澄んでいて嘘はつけない青い空　和子
空と地と真ん中に居る君と僕　風露
大空の夕日真っ赤で明日を待つ　日出子
空豆が風に吹かれて太りだす　賀寿恵
CTが脳の病巣暴き出す　和枝
風船が飲酒運転暴きだす　重忠
暴かれて一寸照れてる片思い　龍枝
暴かれた初恋聞いたクラス会　京子
肩書きが出来て昔を暴かれる　喜美子
同業の不正暴いて共倒れ　由起子
スコップで暴く杉菜の根が深い　よしえ
年取るに何の遠慮がいるものか　鬼一
ストレスが取れて山菜採りはいい　萩江
汗かいてこころの悪を取り除く　螢
宇宙から青い地球を撮っている　瑞子
百点を取った得意の孫の顔　貞子
民の声取るに足らぬと切り捨てる　悠子
高齢者もっと耐えろと税を取る　祐子
採れたての旬のもの食べ元気です　けい子
わたくしの翼になっている車　ひろこ
観覧車乗って見ようか花盛り　きみ子

運転手だけは乗ってる路線バス　泰輔
バス停で待っているのは私だけ　睦子
税金で乗り放題の小役人　次男
不景気は関係ねえと飛行船　恭子
病院へ百円バスを利用する　かつみ
天命だオゾンホールが人を喰う　照彦

翠洋会　安土理恵報

選ばれてシルバーシートに座ってる　日の出
当選後あっさり変える主義主張　昭
選挙まで握手その後はどこに居る　蕉子
アメリカの選挙に参加してる日々　茶々
惜しい人を選んで神は召し給う　尚士
わしの目の黒いうちはと父元気　さと美
阪神が勝つとメールをくれる友　桃花
徳利を振ったとたんに飯が出る　浩二
仕事やと言うてゴルフや北新地　集一
割勘に何時ものひとりまた居ない　春
フルムーン旅の途中で一人旅　げんえい
他愛ない会話が欲しい老い気まま　千歩
渡り鳥に心ない矢がつきささる　久峰
骨ささりあれから魚いやになり　千梢
家計簿に値上げラッシュが突きささる　弘子
ささるけどバラには棘があってバラ　すみ子
ささったのは棘か言葉か疼き出す　みつ子
言葉の棘ささると癒えぬ傷になる　楓楽
えんどうの青さに嫉妬してしまう　理恵
深呼吸心癒され花の下　舞夢

中国の大地揺るがすテロリスト　満作
つつじの花蜜吸う孫は蜂になる　水昇
ほのぼのと詩情に満ちている切絵　志華子
故人しか知らぬおひとのご焼香　恭昌
にこやかに後期高齢恋をする　富子

川柳塔みちのく　小寺花峯報

共白髪義理でもらった老妻といる　呑舟
義理ひとつ後期の背なにのしかかる　きよし
ひと呼吸入れて吹雪と対峙する　芳生
足湯から深くつき合うこととなり　柳子
いち日の疲れ足湯に溶けていく　ヒサ子
義理たてて赤い数字の交際費　美鈴
深呼吸ばかりしているプロポーズ　成柳
桜散り脱いでた義理を身にまとう　一呑
老いてなお雑草などに負けられぬ　隼人
雷神の鬼を鎮めている足湯　順風
保険屋と付き合う義理がひとつある　銀波
平常の呼吸に戻る年金日　ふさゑ
底辺に住み雑草の意地に生き　花匠
義理堅い尻尾を持ったブルドック　雅城
美しい過去はなかった庭の草　黙人
肩に置く重い義理から凝ってくる　花峯
雑草に埋もれ自分の彩がない　慕情
目を閉じる足湯の人の一人旅　五楽庵

米子住吉川柳会　渡辺多美子報

花見して気分そう快歌が出る　欣子

おもいきり値上げしているスーパーよ　雪江
今は亡き友がときどき夢に出る　公一
好き嫌いうなぎでもめるうなぎの日　日枝子
里芋が小籠で踊る用水路　すみえ
堂々と後期高齢仲間入り　正二
それぞれのスタート喜寿の節目から　ふみ
花の下幸せそうな顔の笑み　多美子
ありがとう感謝の気持ちくりかえし　登実枝

城北川柳会　伊達郁夫報

受け止める両手ひろげて母は待つ　朝子
母の日の母は泣いたり笑ったり　倫子
九条にやって欲しいね金メダル　一歩
逃げの一手こんなに私走れたか　典子
舞い扇持つ手は凜とそりかえる　恵子
走っても走らなくても日は暮れる　順三
背伸びした意見あっさり見送られ　萬的
町内会若い役員増えて来る　容子
メーデーが懐しんでる労働歌　弘風
気がつけばテレビの声が大きすぎ　美智子
後期高齢考えぬことにする　ルイ子
いさかいをするたび絆太くなる　喜八郎
メタボまで国が管理をしてくれる　昭子
初夏の空この快晴がきなくさい　高栄
喧嘩やないあれが普通の河内弁　章久
ご馳走の夜は体重はからない　求芽
さよならの手が温かったのは未練　修

年金の金の成る木が細りだす　集一
石の裂け目に開く命にもメダル　賢子
この先は内助と走る自営業　ひさ乃
唇をあてて投じた花封書　とし子
車椅子メダルの裏に流す汗　喜美子
老人をいじめる国は栄えない　東吉
ケータイと化粧のためにある両手　和夫
天引きは情け容赦のない政治　正
手を離し目は離さない母である　明子
温もりに飢えて心が干からびる　志華子

うたの碑たち

北海道南空知の美唄市にある、遊園通りに砂川を中心にした中空知の川柳の仲間達の句碑が10基建っています。

林芙美子の詩「面影」の中で、「美唄の町は美しきうたとかくなり」と表現されてから60余年になります。

全長2キロ余りの遊園通りには、川柳の句碑が37基建っています。詩・短歌・俳句を入れると100基以上になります。

私の句碑を紹介致します。

馬鹿になる酒がはらわたまでしみる

北海道　大橋　政良

計略を雲に流され刻を知る　麗
先走り自分の心見失う　千里
計略の小骨が喉にひっかかる　昭

第五回　大野風柳賞作品募集

雑詠五句（未発表）審査　大野風柳

―　審査方法　―

※　8月30日締切・千円
※　集句は記名選とします
※　五句一組として総合力で賞を決めます

―　表　彰　―

※　11月2日（日）柳都文化祭川柳大会
※　大野風柳賞一名（受賞作品のミニ句碑・賞状・表彰式交通宿泊費）準賞三名（大野風柳表装半折作品・賞状・副賞一万円）優秀賞五名（大野風柳色紙作品額付・賞状）を表彰します。

956-8691 新津局私書箱15号柳都川柳社宛

第63回尼崎市文芸祭作品募集

雑　詠　一人一句　応募葉書または官製葉書
締　切　7月10日必着
発表・表彰　10月19日
応募先　〒660-0881尼崎市昭和通2―7―16
尼崎市総合文化センター文化課
選　者　美籠・文擴・全彦・いわゑ・耕治

第十六回　和歌山県川柳大会

とき　9月7日(日)　出句締切り12時30分
ところ　JAビル本館5階大ホール
JR和歌山駅歩3分
参加費　千五百円（事前投句料千円・切手不可
当日五百円受付　軽食・発表詩望）
事前投句　（事前投句のみ欠席投句可
専用用紙にて8月10日必着）
兼　題　「空(そら)」　田中　山海　選
（各題2句以内）
「　金　」　松尾　和香　選
「耐える」　高木みのる　選
「　城　」　喜田　准一　選
「わくわく」　前岡由美子　選
「ルーツ」　中田たつお　選
賞　県知事賞　県議会議長賞　市長賞
市議会議長賞　日川協会長賞
産経新聞社賞
懇親宴　三千五百円　大会終了後開宴
投句・問合わせ先　〒640―8111
和歌山市新通7―17　古久保和子
（TEL FAX 073―423―8930）
主　催　和歌山県川柳協会
後　援　和歌山県　和歌山県議会　和歌山市
和歌山市議会和歌山文化協会
（社）日川協　産経新聞社

第32回 全日本川柳2008年福岡大会

表記大会は、六月八日福岡市アクロス福岡で開催、事前投句二三一四名、ジュニア四〇二二名、当日出席五六六名の中から選考され受賞句が次の通り決定した。（太字は本社同人）

〈一般の部〉

文部科学大臣賞

寄せ書きの国旗と朽ちてゆく昭和　岡山　小野　真備雄

参議院議長賞

刃こぼれを屋台の酒で研いでいる　福岡　馬場　ゆうこ

川柳大賞

なぞなぞをかけて写楽のかくれんぼ　東京　河合　成近

大会賞

マドラーで独りぼっちをかき混ぜる　東京　中島　かよ

雪祭り北には温い冬がある　秋田　白沢　キノ

ふるさとの言葉案山子も歩かせる　東京　西潟　賢一郎

輸血室屋台の友が駆けつける　熊本　本田　豊実

屋台から見上げる宇宙ステーション　愛媛　田辺　進水

棒グラフ横に伸びてもいいんだよ　宮城　佐藤　点加

友達を数えている独りの旗　大阪　森中　恵美子

企みの野心は音も無く歩く　島根　**伊藤　寿美**

力尽き矢折れて方言に戻る　広島　竹明　なおみ

棒二本人という字は美しい　広島　正畑　半覚

方言のキャッチボールが温かい　福岡　山下　華子

〈ジュニアの部〉

福岡県知事賞

雨の日は指人形がお友だち　大阪（小四）大野　雅

福岡市長賞

世界一いいお祭りはたん生日　鳥取（小四）高田　勇二郎

全日本川柳協会会長賞

いじめっ子その目のおくがさみしそう　山口（小五）矢野　稚葉

第一回 川柳文学賞受賞

『天秤座』　西出　楓楽

㈳全日本川柳協会が、個人句集を顕彰し、作家育成と川柳の地位向上を目指して、昨年新設した川柳文学賞の初の栄冠は、本社理事長西出風楽さんの頭上に輝いた。

昨年度中に出版された個人句集のうち最も優れた川柳句集に与えられた賞である。

審査員は、大野風柳を委員長に、斎藤大雄・大木俊秀・久保田半蔵門・林えり子（作家）の五名である。

六月七日、第32回全日本川柳2008年福岡大会前夜祭に於いて表彰された。

よろこびのことば　西出　楓楽

「おつき合い」程度の軽い気持ちで応募した私の拙い句集が、賞の対象になるとは想像だにしなかったので、大会の二週間前に日川協から連絡があっても半信半疑で表彰式に臨んだ。大野風柳選考委員長から「路郎、薫風、楓楽と引き継がれているものを感じる」と超過分な評をいただいたのが印象に残っているが、それとてまるで雲の上で聞いている気分。前夜祭席上での皆さんからの祝福の言葉もずっと雲の上。この状態はしばらく続くことだろう。ちなみに五人の選考委員のうち三人から一位の評価を『天秤座』にいただいている。

柳界展望

○せんりゅうくらぶ翔5周年記念集会は3月1日、亀山市の石水苑にて開催。当日の同人の秀句。

非常口を確かめに来た深海魚　川上　大輪

○泉北すばる20周年記念句会は3月13日、厚生年金会館にて開催。同人の秀句。

選りすぐり乗せて宇宙へエンディバー　米澤俶子

○第一回触光時事川柳大会で本社関係成績は次の通り

赤福が消えて下がった血糖値　喜田　准一

○4月29日、第九回大根島ぼたん句会（島根県）の同人の天位。

洞窟に棲んで尻っぽがまだとれぬ　三島　淞丘

集中砲火浴びて男の貌になる　伊藤　寿美

○5月18日、川柳たましま社創立五十周年記念大会に於ける同人の天位。

ジャングルジムの一番上にいる姫だ　小島　蘭幸

○大山滝句座会報100号記念大会は5月25日、まなびタウンとうはくに於て開催、出席108名。同人の秀吟。

欲ひとつ入れると熱くなる体　牧野　芳光

俺の前を走る外車は敵と見た　土橋はるお

半分にしても大きな方がある　土橋　螢

○第30回津山川柳大会は6月1日、津山市総合福祉会館に於て開催。出席150名、同人の特選句。

フィクションの島でくびれてゆく時間　西出　楓楽

地球が動いて洗濯物かわく　新家　完司

▽出　版△

○三宅保州氏（理事・和歌山県海南市）は句集『たまゆら』を発刊。発行所すみさか川柳社。B6判170頁。

○藤井則彦氏（同人・豊中市）は5月、第八冊目の著書『忘れ得ぬ三行句～古今東西二〇〇人の叡智～』を出版。224頁。発行所現代図書、発売元星雲社、定価一五〇〇円。

▽同人動向△

○木本朱夏さん（常任理事和歌山市）は川柳すずか173号に「リレー鑑賞・すずか路を読む」を掲載。

○木本朱夏さん（常任理事和歌山市）は雑誌「上方芸能」に「川柳人生劇場」を2年間担当。古今の名句を紹介する。

○西出楓楽さん（理事長・大阪市）他3名は、津山川柳大会出席のため津山市行。

▽訂正とお詫び△

5月号9頁上段11行目、アラモの歌→アダモの歌。6月号21頁上段22行目、節約が私語→節約が死語。22頁下段12行目、妻は平抜きの→妻は手抜きの。32頁下段3行目、命をかけた貝あわび→あわびを消去。119頁16行目、石谷美津子→石倉美津子。同17行目、河田学→河田洋子。

▽新誌友紹介△

青森県　紹介者　**松山　芳生**

堺　市　福士　慕情　**小西　郁子**

紹介者　河内　天笑

京都市　**松本　甘鬼**

紹介者　米田　恭昌

三田市　**谷　裕康**

紹介者　北野　哲男

神戸市　**平田めぐみ**

紹介者　山口　光久

大阪市　**尾崎　ゆめ**

▽常任理事会△

常任理事会＝出席12名。①14回川柳塔まつり最終案②2賞選考委員の選出。③檸檬抄選者の交替について。④主幹・理事長選並びに新年度理事、常任理事他役員の推薦。⑤定例確認事項について。⑥各部報告事項。⑦その他　次回7月7日(月)1時半

平成20年 造幣局桜の通り抜け

（投句者数 1113名）

4月16日～22日（太字は同人）

（人）新知事にエールを送る通り抜け　大阪市　鈴木　栄子

（地）花の下みんな素直になっている　茨木市　三村　舞

（天）恋の句が桜に似合う通り抜け　大阪市　**岩崎　公誠**

（佳作）**伊達　郁夫・河内　月子**
村上　直樹・熊代　菜月
山本希久子

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 さんだ	15日(火)午後1時より 続く・血圧・いけません 「自由吟」	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553—12 北野哲男
岸和田 川柳会	19日(土)午後2時締切 円熟・怒る・俄然・クール	岸和田市立福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
岬川柳会	20日(日)午後1時半締切 新築・誘う・答え	**(淡輪17区集会所)** 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳 ねやがわ	20日(日)午後1時半締切 南極・今朝・例外・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9 高田博泉
川柳 藤井寺	20日(日)午後2時締切 尾鰭・マネキン	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
もくせい 川柳会	21日(月)午後1時50分締切 誘う・節約・ムード・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4 江見見清
川柳クラブ わたの花	25日(金)午前9時半から 不意・落書き・浪費・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川柳塔 すみよし	26日(土)午後1時45分締切 明日・酒・思う・席題	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
東大阪市 川柳 同好会	26日(土)午後7時締切 スープ・無事・覗く・線	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21 片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	27日(日)午後2時締切 カレー・星・縮む・くらくら	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11 塩満 敏
和歌山 三幸 川柳会	27日(日)午後1時から 見る・力・「ゲスト句会」	和歌山県民文化会館5階 大会議室 〒640-8111 和歌山市新通7—17 古久保和子
川柳 ふうもん 吟社	27日(日)午後1時より オドオド・すんません・腹心	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2—632 田中かをる
南大阪 川柳会	28日(月)午後6時から 天井・張る・鮮やか・雑詠	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔 松露川柳会	28日(月)午後8時から 花火・ぞろぞろ・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
京都 塔の会	28日(月)午後2時締切 ばっさり・突く・充電	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328—202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

7月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 なら	3日(木)午後1時から 騒ぐ・滝・天井	奈良市立中部公民館4F（近鉄奈良駅④出口歩5分） 〒634-0812 橿原市今井町2—1—24—901 安土理恵
富柳会	5日(土)午後2時締切 鐘・ひょっこり・自由吟	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
城北 川柳会	5日(土)午後1時開場 大阪・うまい・ピアス・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉吉 川柳会	5日(土)午後2時締切 とても・問題・滅多に	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 唐津	7日(月)午後1時半から 短い・目・メニュー	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13 宗 水笑
尼崎 尾浜 川柳会	8日(火)午後2時締切 波・泳ぐ・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	8日(火)午後1時半締切 真ん中・装う・やっと	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2—4—1 水野黒兎
川柳塔 まつえ	12日(土)午後2時締切 舟・曲がる・騒ぐ・夜空	松江市西津田 松江総合文化センター 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川柳塔 打吹	12日(土)午後2時締切 逆・隠す・飾る	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637—3 牧野芳光
川柳塔 みちのく	12日(土)午後5時半締切 受話器・受付・風船	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53—1 小寺花峯
堺川柳会	12日(土)午後1時から 地球・喋る・「みかわ(折句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳大阪	12日(土)午後1時から 合図・毒・カード	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 わかやま 吟社	13日(日)午後2時締切 手抜き・正直・くよくよ 「病院・医院」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2 牛尾緑良
八尾市民 川柳会	13日(日)午後2時締切 両手・深い・どろどろ・雑詠	山本コミュニティーセンター3F 学習室 （近鉄山本駅） 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から 笑う・背中・こつこつ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515 山本義子

没後70年　鶴　彬
顕彰碑建立川柳大会

日　時　9月14日（日）1時開場　2時半締切

会　場　大阪市立　中央青年センター

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1－1－35

JR・地下鉄　森之宮下車　歩10分　TEL 06－6943－5021

お　話　「鶴彬と今」　木津川　計 氏（『上方芸能』誌発行人）

兼題と選者（各題2句）

「伸 び る」　木本　朱夏 選（和歌山三幸川柳会）

「にこやか」　赤松ますみ 選（川柳文学コロキュウム）

「　夢　」　佐藤　岳俊 選（川柳人社・岩手県）

「自　由」　田中　新一 選（番傘川柳本社）

「　鶴　」　西出　楓楽 選（川　柳　塔　社）

特別投句「生　む」　川端　一歩 謝選　**8月20日迄**　専用葉書

欠席投句　B5判用紙、各題2句、特別投句の葉書と1000円同封

8月20日(日)までに郵送

〒599-0232 阪南市箱作1586－14　　森村　美花

参 加 費　2000円（大会誌、記念品、鶴彬大賞）

懇親会費　6000円（希望者は特別投句の葉書に記入、定員60人）

問合わせ（事務局）

〒596-0824 岸和田市葛城町891－22　岩佐ダン吉

TEL 072－428－0325（FAXも）

主　　催　鶴彬顕彰碑建立実行委員会

共　　催　あかつき川柳会

後　　援　㈳全日本川柳協会

治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟大阪府本部

暑中お見舞い申し上げます

平成二十年　盛夏

堺　川　柳　会

河内天笑　源田八千代　西村りつえ
石堂潤子　小寺竜之介　長谷川彰
稲川恵勇　小西郁子　原清晋
岩崎公誠　齋藤さくら　樋口冬虹
榎本日の出　志田千代　日野愿
榎本舞夢　島尾政男　藤田泰子
大久保伸子　高木世紀子　伏見雅明
太田としお　津守なぎさ　升成好
太田扶美代　遠山唯教　宮本かりん
大谷篤子　徳山みつこ　村上玄也
大橋鐘造　冨山ルイ子　元永雅子
荻野像山　中井アキ　矢倉五月
奥時雄　中井萠　矢野梓
柿花和夫　中崎深雪　山本半銭
河内月子　永田山彦　山本進
河内康浩　中野健吾　米澤俶子
川西真澄　西内朋月　和田つづや

暑中お見舞申し上げます

西宮北口川柳会

例会　毎月第２月曜日午後１時　西宮市立中央公民館
（阪急電鉄神戸線西宮北口下車南出口徒歩３分）
プレラにしのみや４F

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2—19—515　山本義子

西口いわゑ
菊池トミヱ
西内朋月
奥田みつ子
北野哲男
長谷川春蘭
阿萬萬的
木村貴代子
林昭三
秋元てる
久保田千代
春城武庫坊
浅野房子
蔵田光子
春城年代
井上松煙
黒田能子
藤本直
石原歳子
小林わこ
古川奮水
岩倉キク子
住谷石舟
堀正和
臼井二英
田中章子
牧渕富喜子
小倉藍
辻開子
丸山一之
小熊江美
田原宏一
松下比ろ志
片山忠
坪井孝一
山口光久
亀岡哲子
都倉求芽
山崎君子
河井庸佑
冨山ルイ子
山田耕治
川島諷云児
長浜美籠
山田婦美子
河原野折杭
七反田順子
山本義子

暑中お見舞い申し上げます
夏バテをしない気配り希います

２００８年　盛　夏

私たち“川柳塔鹿野みか月”第28回記念大会は11月30日(日)に年忘れを兼ねて開催予定です。
皆様のご支援を心からお待ち申しております。

※　詳細はあらためてご案内したいと存じます。

川柳塔鹿野みか月

事務局　〒689-0405 鳥取市鹿野町鹿野1279　中原諷人方
電話（0857）84－2100

暑中お見舞い申し上げます

竹原川柳会

会長　小島蘭幸
監査　時広一路
会計　岩本笑子
古田太虚子
福島万年
森井菁居
石原淑子
山内房子
ほか会員一同

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔きゃらぼく

会長　政　岡　日枝子

会　員　一　同

事務局　〒683-0845 米子市旗ヶ崎3-12-13
政　岡　日枝子
TEL 0859-34-1729

暑中お見舞い申し上げます

エイシス堺

講師　河内天笑

石堂　潤子　西村りつえ
榎本日の出　原　清晋
榎本　舞夢　樋口　冬虹
大久保伸子　伏見　雅明
太田としお　升成　好
奥　時雄　松井　明江
荻野　像山　宮本かりん
源田八千代　村上　玄也
齋藤さくら　元永　雅子
高木世紀子　矢倉　五月
中井　萠　矢野　梓
中野　健吾　米澤　俶子

暑中お見舞申しあげます

川柳ふうもん吟社

会長 両川洋々

会員一同

事務局 〒680-0824 鳥取市行徳2丁目632
田中かをる方

月例会 毎月第4日曜日 13:00～
JR鳥取駅構内（シャミネ会議室）

暑中御伺い申しあげます

平成二十年 盛夏

香川県東かがわ市白鳥

川柳塔おっぱこ吟社

会長 成重 放任
会計 川崎ひかり
顧問 木村あきら
同人 池内かおり
〃 原 賢
〃 伊勢八重子

会員 角尾いさむ
〃 辻上よしみ
〃 山崎はつ恵
〃 赤沢 貞月
〃 中塚寿々女
〃 田中 弘

医療法人社団

湯川胃腸病院

理事長　湯　川　紘　未

大阪市天王寺区堂ヶ芝２丁目10番２号
TEL　06－6771－4861

暑中お見舞申し上げます

いずも川柳会

会長　竹　治　ちかし
会　員　一　同

事務局　〒693-0006
出雲市白枝町４２３　伊藤玲子方
TEL 0853—23—3200　FAX 0853—23—3201

暑中お見舞い申し上げます

翠　洋　会

安土　理恵
穴吹　尚士
阿部　茶々
井上　照子
岩本　浩二
榎本日の出
榎本　舞夢
大川　桃花
太田　昭
岡本　久峰
奥田みつ子
古今堂蕉子
小谷　集一
佐々木満作
清水　絹子
住谷　石舟
髙杉　千歩
谷口　義

津村志華子
坪井　孝一
辻内げんえい
寺井　弘子
天正　千梢
長浜　美籠
中村　叡子
中村れんげ
西出　楓楽
原田すみ子
藤井　正雄
安永　春
山本希久子
横山　捷也
米田　水昇
米田　恭昌
渡部さと美
渡辺　富子

暑中お見舞い申し上げます

尼崎尾浜川柳会

長浜　美籠
田辺　鹿太
河津　正治
坂本　晴美
西内　朋月
山田　耕治
林　昭三
松下比ろ志
奥村　五月
岩城　義芳
木村美代子
松村　里江
村山よし子
酢谷亀代子

西部イサミ
軸丸　勝巳
田原　宏一
加川　靖鬼
坪井　孝一
矢野　野薫
小熊　江美
南　全彦
大川　桃花
都倉　求芽
富田　美義
小山　紀乃
高野　政江

暑中お見舞申し上げます

NHK川柳教室

河内天笑	山田耕治	
藤井正雄	池上清治	
指宿千枝子	久保田千代	
鴨谷瑠美子	角谷克治	
志田千代	藤井則彦	
井上松煙	西内朋月	
緒方美津子	松村里江	
江見見清	山本加お里	
加川靖鬼	山口不動	
田中幸代	川田兵吾	
安達忠央		

自費出版 川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町９番４号
TEL (06) 6372－1178
FAX (06) 6372－1196
E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

暑中お見舞申し上げます

川柳塔みちのく

主幹 斉藤　劦

副主幹 小寺　花峯
福士　慕情

相談役 工藤　甲吉
森中惠美子

顧問 波多野五楽庵

理事 岩渕　黙人
相馬　一花
櫻庭　順風
佐治氏加子
浅田　隆樹
肥後和香子
田中　叶

監事 相馬　銀波
小枝ふさゑ

会計 福士　慕情

ほか同人一同

暑中お見舞い申し上げます

鳥取県川柳作家連盟

会長 鈴木公弘
会員一同

事務局 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364
安田方　春木圭一郎
TEL 0857—24—2834

暑中御見舞
申し上げます

川柳ささやま

会員一同

暑中御見舞申し上げます

岩美川柳会

会員一同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-115
山下蟹郎
TEL 0857－72－0762

暑中御見舞

和歌山三幸川柳会

事務局 〒640－8111
和歌山市新通七－一七
古久保 和子
TEL 073(423) 8930

主幹 三宅保州
理事長 木本朱夏
相談役 桜井千秀
副主幹 古久保和子
副理事長 喜田准一
理事 田中みね
〃 楠見章子
〃 川上智三
〃 玉置当代
〃 武本碧

例会 毎月第四土曜日 午後一時
和歌山市勤労者総合センター
(和歌山市役所西隣)

暑中御見舞
申し上げます

川柳茶ばしら

飯田秀水
片岡文男
早川遡行
関本かつ子
金子美千代
吉田幸子
鶴留百合
板山まみ子

暑中お見舞申し上げます

平成二十年　**川柳塔唐津**

山口　樋口　仁部　宗　坂本　久保　市丸　岩崎　井上

高明　輝夫　四郎　水笑　蜂朗　正剣　晴翠　實　勝視

暑中お見舞い申し上げます

岸和田川柳会

井芳　伊地東　長谷川佐吉　呂岩万　土橋房枝原　不破仁緑山本　雪本珠子堂免路子　仲谷弘子小島笑司　中島寿海池田岩夫　永田守玉俊昭　沖泰弘藤原昭　次井義泰千葉武　高見泉滴宮野みつ江　森元ふみよ薮野けい子　林力子堤楢代　中岡香代林春栄　助川和美前田ゆい　佐藤幸子松岡浅子　長谷川柳風米富淳風　稲葉洋　向井清

暑中お見舞申し上げます

京都塔の会

会員一同

暑中御見舞

川柳塔まつえ吟社

主幹　三島淞丘

同人一同

事務局　〒690-0015 松江市上乃木9－23－22

三島淞丘方　TEL 0852－21－2810

暑中お見舞申し上げます

はびきの市民川柳会

会員一同

暑中お見舞い申し上げます

ほたる川柳同好会

水野黒兎　田中蛍柳

小牧信男　田辺正三郎

高嶋　勝　上田陽子

宇山禮子　笠田幹治

江見清子　神野宇乃子

栗田久子　谷川勇治

多田契子　中山春代

寺井柳童　前田昭子

藤原桂子　松尾美智代

前田いさむ　宮田肋骨

椋山祥風　米原雪子

南　賢次　会員一同

藤澤長一

大阪川柳の会

事務局 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦 方
TEL (06) 6303-7297

代表
礒野いさむ

世話人
足立淑子
碓氷祥昭
岡良三
坂本和樹
竹森雀舎
内藤光枝
藤井満洲夫
本田智彦
森口美羽
安井英華
吉村雅文

大阪川柳人クラブ
板尾岳人
坂本晴美

暑中お見舞申し上げます

西宮ローズ川柳会

秋元てる
岩倉キク子
奥田みつ子
小倉藍
亀岡哲子
菊池トミヱ
木村貴代子
坪井孝一
長浜美籠
西口いわゑ
春城武庫坊
春城年代
山崎君子
山本義子

暑中御見舞
申し上げます

六甲川柳会
メダカの学校

世話人
伊勢田毅
黒田能子
山口光久
山口美穂
両川無限

暑中お見舞申し上げます

川柳クラブ わたの花

平川幸枝　赤木妙子
松葉君江　西川義明
生嶋ますみ　寺川はじむ
吉村一風　笠井欣子
村上ミツ子　田邊浩三
山本宏至　松浦愛子
八倉知佐子　小西博子
乾美代子　上田和子
篠原いつふみ　飛永ふりこ
井尻民　土谷耀一
砂田八寿子　葭矢正春
馬場宏　梅原荘治
杉本晴美　梅原克美
脇俊子　今川孝子
本田たえこ　佐藤美はる

暑中御伺い申し上げます

河内長野 長柳会

講師

板尾岳人

会員有志

水谷正子
村上直樹
山岡冨美子
坂上淳司

サークル 檸檬

浅野房子
井丸昌紀
太田扶美代
大塚節子
奥田みつ子
片岡智恵子
久保田千代
鶴田遠野
長浜美籠
西口いわゑ
西出楓楽
西村哲夫
早川清生
前たもつ
山口光久
山本希久子
山本義子
吉田あずき

暑中御見舞申し上げます

富　柳　会

西浦一慧
佐々木七朗
山野寿之
黒澤ひろし
藤田武人
栃尾奏子
井澤壽峰
織原　礼
森下よりこ
関　よしみ
中村恵子
石橋未知
大橋鐘造
中井アキ
池　森子
他一同

暑中お見舞申し上げます

川柳塔なら

宮口笛生
中原比呂志
米田恭昌
坊農柳弘
大内朝子
吉川寿美
居谷真理子
渡辺富子
安土理恵
飛永ふりこ
森中博一
会員一同

暑中お見舞申し上げます

八尾市民川柳会

会員一同

暑中お見舞い申し上げます

エイシス東大阪

講師 河内天笑

生嶋ますみ
大橋嘉文
笠井欣子
吉川寿美
熊代菜月
小谷集一
古手川光
佐々木満作
飛永ふりこ
中岡妙
西川更紗
平嶋美智子
堀富重
三宅健一
森田麗
山本宏至
米田水昇

暑中御見舞申し上げます

おたまじゃくし川柳会

助川和美
多田郁子
堤楢代
中岡香代
原みつよし
森元ふみよ
雪本珠子
土橋房枝
山本蛙城
林力子

〒596-0076
岸和田市野田町一―六―二
土橋方
電話 〇七二―四三八―三三〇八

暑中お見舞い申します

川柳藤井寺
川柳みささぎ

会員一同

暑中お見舞申し上げます

南大阪川柳会

会員一同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋６丁目駅③出口）
原則として第４月曜日・６時から

暑中お見舞申し上げます

城北川柳会

会長　小谷集一
会員一同

暑中御見舞申し上げます

川柳大阪

会員一同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

暑中お見舞申し上げます

川　柳　塔　社

主幹	河内天笑
理事長	西出楓楽
副主幹	小島蘭幸
副理事長	村上玄也
常任理事	穴吹尚士
	籠島恵子
	河内月子
	木本朱夏
	鶴田遠野
	西内朋月
	松原寿子
	山本希久子
	井伊東吉
	鴨谷瑠美子
	川端一歩
	黒田能子
	長浜美籠
	坊農柳弘

川柳塔社常任理事会

編集後記

☆今月号には古藤愛子さん（相談役㈱東野大八氏長女）のエッセイを掲載しています。愛子さんは大八文庫の代表として、文化活動を継承、県芸術文化奨励賞を受賞されました。

☆7月7日は例年通り路郎忌本社句会を開催。今年は交換選者として番傘川柳本社の田中新一氏をお迎えすることになっています。たくさんの御参加をお待ちしています。

☆昭和40年7月7日、路郎師逝去。本葬儀は7月18日に行われました。

炎天に寒扶立てて
師を葬送る　薫風

葬儀委員長の北川春巣氏は8月号にこう書いておられます。

「悲報は一瞬、私の耳に富士山が崩れた音に聞こえた。路郎先生は実に現柳会の富士山であった。路郎先生の全面を私のペン如きで書きつくせるものでないことは、富士山の絵や写真がいくらあっても、まだ富士の全貌ではないのと同じである」そして28年前の路郎師との出会いから、医者として、亡くなる三日前、脈をとったことなどを書いておられます。そのおり路郎先生は「巻頭の句が辞世の句」とおっしゃったそうです。

7月号『川柳雑誌』の巻頭には

死はゆらぐ文楽人形の死はゆらぐ
死の影が紋十郎の背後から
いつのほどにかブックエンドに似てわれも
臨終が冬ならいろはおくりで逝かんかな

他2句掲載。（希）

ひとこと

柳人にワルなし

月刊『いきいき』平成十一年七月号に皆が川柳をやると、罪人がなくなる気がすると書いた。先師が「人間陶冶の詩」と喝破されたのは人間を句材とする柳人は、喜怒哀楽を通じて人間の善悪を凝視するから自己を厳しく磨き、決して悪をなさぬはずだからである。川柳のキャッチフレーズの一つに「悪に釘打つ」と主唱する団体もある。ワルになって我が身に釘を打つような愚かなことはしない。だから、柳人の皆様が仲間を見わたしても誰一人ワルは居まい。もし一人でもいたら手を挙げて前に出て顔を見せてもらいたい。

此処に言う川柳は勿論真っ当な川柳のことで、駄洒落や言葉遊びや人間冒涜の往時の狂句のごときを除くことは言うまでもない。

それにしても昨今、汚職だの偽装だの使い回しだの、政官業にワルが蔓延して姦しいが、そういう辺りに柳人は不思議なほど皆無だ。

（山本　蛙城）

★雲の峯という手もあり
さらばさらばです　路郎

★物言わぬ金魚がうれし
誕生日　薫風

★七月は故橘高薫風先生の誕生月。今月号の目次下は薫風先生の講座を二十年間受けられた瀬戸まさよさんにお願いした。先生は多い時で六か所カルチャー講座をお持ちだった。残念ながら私は講義をお聞きしたことはない。瀬戸さんの文章の行間から、在りし日の先生の息吹を味わう。

★七月はまた麻生路郎師の亡くなられた月でもある。思うところあって『川柳雑誌』創刊号を開く。表紙は薄墨色に白抜きの柳が一本。大正十三年二月十五日発行。発行所は兵庫県武庫郡鳴尾村。時に路郎師三十六歳。

★巻頭言「誤れる川柳観を排す」に路郎師曰く。「川柳はその人一人の人格の発露であり、その人一人の歴史であります」と。募集句（現在の一路集）として課題「仲人」「花嫁」「出世」選者に井上剣花坊、岸本水府とそうそうたる顔ぶれ。カットあり、笑話あり「楽屋落」と題したコーナーの同人の消息に、思わず笑いを誘われる。

★路郎師の遺産を食いつぶすことなく、いのちある一句に情熱をかけたい。（朱）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（9月号）

地名　　都道府県　　市

姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「穴」（7月15日締切）

9月号発表

木本　朱夏　選 ── 共選 ── 髙瀬　霜石　選

B　A

地名

市都
県道府

姓
雅号

切らないで下さい

B　A

地名

市都
県道府

姓
雅号

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

9月号発表（7月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　小島蘭幸選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄（2句）「穴」　高瀬霜石共選
　「短い」　木本朱夏共選
一路集（3句）「目」　両川洋々選
　「メニュー」　高杉千歩選
初歩教室「字」（3句）　三宅保州担当　上地登美代選

10月号

檸檬抄「うろうろ」
一路集「不　意」「公　園」「グラス」
初歩教室「な　ぜ」

路郎忌 本社7月句会

とき　7月7日(月) 午後5時半開場・6時半締切り
―開催時間、締切時間にご注意下さい。

ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

おはなし「路郎の遺したもの」　木本朱夏

席題「　」　選

兼題「ひそひそ」　山岡冨美子選
「技」　加島由一選
「ルーズ」　三宅保州選
「照れる」　田中新一選
「予感」　河内天笑選
（各題2句以内）

会費　1000円　投句料　500円（切手可）

本社8月句会
8日(金) 午後5時半から

兼題「なんで」「山　」「仕掛ける」「リゾート」「挑　戦」

第27年度 夜市川柳募集

第2回「壷」　池　森子選
ハガキに3句　**7月末日**締切

投句先　〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**堺川柳会**

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価　八百円（送料92円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）

二〇〇八年(平成二十年)七月一日発行
発行人　河内權治
編集人　山本希久子
印刷所　美研アート
発行所　川柳塔社
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

ホームページアドレス　http://www.senryutou.join-us.jp/

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九七四号 ● 柳塔 七月号 定価 八百円（送料 九十二円）

オニザキの
すりごま

自宅の台所で始めた手洗いのごま加工・販売から50年。
オニザキでは、手作りの風味にこだわり、独自に開発した製法で、ごまの香りと味わいを最大限に引き出し、美味しいすりごまを作り続けています。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL フリーダイヤル 0120-30-5050

医療法人社団
湯川胃腸病院
・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得
健康保険取扱 看護２A・緩和ケア病棟
・消化器科・内科・外科
・放射線科・ホスピス
・デイサービスセンター
診療時間
月～金 8:30～16:00
土 8:30～11:00
JR桃谷駅徒歩3分
http://www.yukawa.or.jp
電話 大阪(06) 6771-4861(代)

雑誌 05703－7